

---

# つきのかがみ

桜月まき

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つきのががみ

### 【Nコード】

N1754F

### 【作者名】

桜月まき

### 【あらすじ】

たいせつなものって、なんだろう？…綾星学園高等部生徒会長・新藤逸が巻き込まれる（…巻き起こす???）事件とは？ドタバタあり、シリアスあり。桜月まき本領発揮の作品です（^^）

## #0 プロローグ (1)

その日もあたしは、夕闇の中に姿を現したばかりのまんまるい月を横目に、ぼんやりと電車に乗っていた。

行き先は特にない。ただ乗り降りする人たちを眺めているだけ。

いつもとは全然違う、つけまつげバリバリの気合いの入ったメイクして、金髪ショートウィッグつけて、さらにその髪の毛に蛍光ピンクのメッシュ入れて、水色に黄色とピンクのハイビスカス模様のキャミソールに超ミニのデニムスカート、ピンクのスパンコールがついたピンヒールのサンダル、麦藁素材の小さなバッグっていう普段のあたしからは想像できないスタイル。こういう格好で電車の座席に座っていると、あたしはあたしじゃなく、そこら中にいるただのちよつと派手めな私服の女子高生の一人。その他大勢の中の一人に過ぎない。

こうしていれば、あたしだって絶対バレない。誰一人、気に止める人もいない。…何もかも投げ出したい時、忘れたい時、誰にも邪魔されず、ボーっとしたい時には最適。癒される、って感じ？

…ただこの日はちよつと乗る電車を選ぶのを誤ったみたい。あたしの乗ってるこの車両の吊り広告、張り広告：全部、とある携帯電話会社の広告で、統一されている。

「あ、ちやねんにじか鞘根虹香。」

誰か男の人が言う。思わずあたしは声のした方向を見てしまう。  
…視線は広告の中で携帯持って笑っているアイドルに向けられている。

### 鞘根虹香。

にこやかに笑うその笑顔…癒し系でもてはやされている、屈託のないその笑顔を見ると、いらいらしてくる。あたしには、癒されるどころか、ストレスの素だ。

なるべく広告には目を向けず、窓の外を眺めていよう。そう思っ  
て、あたしは座っている席の正面の窓越しに目をやる。

…月が、ビルの谷間に見え隠れする。ネオンの光とは全く種類の違う、優しい光。でもあたしにとって月の光は、優しくなんかない。それどころか、いつも冷淡で、意地悪だ。だって、月は、月だけは、あたしがどこにいても、どんな格好をしてても、いつも見えている。あたしのすべてを、知っている。決して、逃げられやしない。

## #0 プロローグ (2)

月から目を逸らして短く溜息をつく。電車は、次の駅に到着したところだ。

別に誰かを捜すわけではないけれど、なんとなく乗ってくる人を、いつものように、見ていた。

…その時だった。

乗ってきたのは五、六人の女子高生。…どこの制服だっけ、近く  
の私立高校かな。よく見かける制服。そしてその女の子たちに囲ま  
れた、同じ制服の、男子高校生が一人。その男の人の顔を見た瞬間、  
あたしはその人に釘付けになる。

…記憶の引き出しが開く。そこから、蘇る、思い出。

五年前に、一度会っただけ…たった一度、会っただけの、名前も  
知らない男の子。けどはつきりと思い出せる。今の今まで忘れて  
いたのに、彼を見た途端に、鮮明に思い出した。

…五年前、あの日も、空には今日と同じような丸い月が浮かんで  
いた。

『この世にいないものなんて、ないんだよ、きつと。』

そういつて月を見上げていた、端正な横顔。夜だったけど、月明  
かりに照らされてよく見えた。自分を壊そうともがいていたあたし

を、その言葉とその凜とした表情が浄化してくれた。…あの日の月の光だけは、そういえば優しくかった気がする。

…どうして今まで忘れていたんだろう。彼は、あたしの命の恩人だったのに。

彼と、彼を取り巻く女の子たちは、閉まった扉の近くで賑やかに盛り上がっている。話の内容まではあたしのところまでは聞こえない。ちよつと離れてるし、電車が動き出して、ガタゴトと音を立てているせいもあるかもしれない。

彼はあの日より少し大人っぽくなった優しい笑顔をふりまいて、楽しそうに話している。それを受けて笑う彼女たち、またそれを見て楽しそうに話し出す彼…

見ていて、だんだんあたしの中に沸いてくる不快感。…どの女の子も、たいして可愛いわけじゃない。あたしのほうが、ずっと彼には似合ってるわ。そんなことを考えてしまっている。自分でも、わかってる。馬鹿馬鹿しいけど、その女の子たちに、はつきり言って嫉妬している。嫉妬してしまっている、あたし。

じつと見ていたら、…びつくりした。あたしの視線に気付いたのか、彼と目が合ってしまった。慌てて逸らしたけど…よく考えたら、今のあたしのこの格好じゃ、あたしだってバレるはずがないんだっただ。そもそも彼は、あたしのことを覚えていないかもしれない…。

…今のこの格好のあたしじゃ、気付かれない。だけど…今彼の周りにいる女の子たちに取って代わって、彼の隣というポジションを奪い取る自信は、ある。

…そう、あの頃のあたしじゃなく、今この格好をしているあたし  
でもなく、今の、本当のあたしなら。

## #0 プロローグ (3)

彼らに視線を戻した頃、次の駅に着いた。彼女たちは電車を降りる。彼に手を振って、背を向ける。彼はそのまま、彼女たちに手を振って電車の中に残っている。…あれ？一緒に、降りないんだ。

その時、かすかに聞き慣れた音楽が聞こえた。携帯の着メロ用にアレンジされた、鞘根虹香の新曲…この車両に嫌なくらい並んでいる携帯電話会社の広告の、CM曲だ。

慌ててポケットに手をつ突っ込む彼。鳴っている携帯は、彼のもののようだ。

あたしは彼が鞘根虹香の曲を携帯の呼び出しに使っていることに驚く。驚くっていうか、意外っていうか、不愉快とまではいかないけどそれに似た、変な気分。そんなあたしには当然気付くはずもなく、彼は電話に出る。

声は相変わらずあたしの耳には届かない。だけど、彼はまた笑っている。…かっこいい、というより、綺麗な笑顔…。

すると彼が突然車両の連結部分にくると向きを換えた。あたしもつられて彼の視線を追う。

…また、女の子たち。今度は、制服じゃないからわかんないけど、やっぱり高校生くらいかな。三人のうちの一人が携帯を片手に彼に駆け寄る。どうやら彼の電話の相手は彼女だったらしい。さっきの子たち同様、彼は彼女たちに笑顔をふりまいて、また楽しそうに話



を始める。

…だんだん腹が立ってきた。

あの日、月の光の下であたしに微笑みかけてくれた彼と、今そこで女の子たちと盛り上がってる彼…五年の月日があるとはいえ、あまりにもイメージが違いすぎる。あんなに軽い感じの人じゃなかったと思うんだけど…。あの人、ほんとにあたしが昔出逢った彼？人違いかも。

そう思って見てみるけど、見れば見るほど、相違点どころか、間違いないって確信すら出てくる。絶対あの笑顔を見間違うことはない。あのきらきらした表情…他人と見間違っわけなんか、ない。間違はなく、あの夜あたしと出逢った、あの人だ。

…また次の駅が近づいてきた。だんだん速度を落とし、ガッタン、と大きな揺れを起こして電車は止まる。空気の抜けるような音が生きて、ドアが開く。

彼は彼女たちと電車を降りる。わいわいと、会話を続けながら。

思わずあたしも席を立つ。彼を、追いかけようと無意識に体が動く。

ぴるるる、ぴるるる、ぴるるる…。

立ち上がった瞬間、あたしの行動を静止するかのように、バッグの中の携帯が鳴った。慌ててバッグの中を探る。そんなことしてるうちに、ドアは閉まる。彼を見失ってしまう。今追いかけるべきや、もう二度と、彼に会えないかもしれない。追いかけていのに。

あたしの気持ちを無視するように鳴り続ける携帯。掛けてきている人の名前を見て、諦めて、ゆっくりと、通話ボタンを押す。

『あ、<sup>かおり</sup>香居。僕だけど。』

…懐かしい、耳障りのいい声が聞こえてくる。でも、同時にあたしの胸はきりりと嫌な痛み方をする。…懐かしいはずなのに…いや、懐かしいからこそ、かも知れない、できることなら聞きたくないその声は、あたしの返事を待たずに続けた。

『この前のこと、考えてくれた？』

…この前の、こと…。あたしは閉まった電車のドアにもたれかかって遠くを見る。…月の位置が、次第に高くなっている。しばらくあたしが無言でいると、受話器の向こうの声はまた続ける。

『香居にとって、悪い話じゃないと思うけど？ あ、もしかして僕が約束破っちゃうかもなんて心配してる？ そんな心配ならいらないうってば。香居は僕にとって大事な人だから、そんなことするわけないでしょ？』

クスクス…と笑い声。だけどあたしの表情は固まったまま。

返事を、しなきゃ。そう思って言葉を搜す。短く嘆息して目を上げると、ドアの上にある張り広告の鞘根虹香と目があった。

…鞘根、虹香、…か。

そう口の中で呟いてから、あたしは初めて声を出す。

「…じゃあ…、ひとつだけ!」。

月は、皓々と、街を、そしてあたしを、照らしていた…。

## #1 タソガレ (1)

“それ”は試験も終わってあとは夏休みがやって来るのを待つばかりの、楽しみでじつとしてなんかいられない夕刻に突然やって来た。

「逸くーん、今帰り？」

授業も終わって、今日はさつさと帰って家でRPGの続きをしようと、半ば小走りに正門を出ようとしたら、声掛けられた。相手が男だったら立ち止まらず挨拶だけで去るところだが、女の子相手ではそういうわけにはいかない。

オレは声のしたほうを振り返る。と、正門の脇に我が私立稜星学園一の美少女と謳われる沢見栄子嬢さわみえいじょうの笑顔があった。栄子ちゃんは正門の横の、ポプラの木の陰に立っている。肩までのウェーブした栗色の髪が時折そよぐ風になびいて、なんとも絵になる姿だ。

「あれ、栄子ちゃん。こんなとこで何してんの？ ああ、彼氏待ちい？」

すると栄子ちゃんは花のような微笑みを苦笑いに変える。

「んー、まあね。一人で帰るのちょっと怖くって。」

「え、何で？」

きょとんとした顔で聞き返す。すると栄子ちゃんから逆に聞き返された。

「あれ、律<sup>りつ</sup>から聞いてない？」

「？ 何を？」

律というのはオレの双子の片割れのことだ。栄子ちゃんと奴は小等部の時から現在までずっと同じクラスで仲が良い。ってことはとりあえずおいといて、え、別に何も聞いてないけど。

オレが疑問顔していると栄子ちゃんが言いにくそうに話し出す。

「うーん…、あのね、実はね…、あたし、最近ストーカーされてるの。だから一人で帰りたくなって。」

「ストーカー…」

「ほんとに律に家まで付き合ってもらおうと思ってたんだけど、用があるって言うから仕方なく彼氏呼んじゃった。」

栄子ちゃんの彼氏、確か他校のひとつ年上だったわけ。一緒にいるとこ、何回か見たことある。

オレはとりあえず栄子ちゃんの隣で一緒に待つことにした。ああ、日陰は多少涼しいな。蝉の声がちよつとうるさいけど。

で、え？ 律が、用事があるから先帰ったって？

「用事い？ 何じゃそりゃ…っ！」

言っつてて気がついた。ちくしょうやられた！

「…あんのやろお…」

「え、何かあった？」

栄子ちゃんが不思議そうにオレの顔を覗き込む。うーん、きれいな顔…。って見とれてる場合じゃなくて。

「何でもない。くだらんこと。」

うん、ほんとくだらんこと。でもくやしーっ。RPG、先越されたっ。

…まあ、それは家に帰ってから律に文句を言うつてことで、とりあえずは栄子ちゃんの聞き捨てならない発言に話題を変える。

「ストーカー…って…？」

「うん、ここ一週間くらいかなあ。朝と帰りと、家から駅までの間だけで、学校近辺では感じたことないんだけど、何か誰かにつけられてて…。」

栄子ちゃんは眉間にしわを寄せて本当に気味悪そうな顔をする。

正門を出て行く生徒たち、みんなオレと栄子ちゃんを見て通り過ぎる。オレに屈託のない笑顔で挨拶していく女の子たちに軽く手を振って、視線を栄子ちゃんに戻す。

「家の近くの奴なんだ…。」

言っと、栄子ちゃんほうん、と不安そうに頷く。いつもの明るい

栄子ちゃんの表情じゃない。

…その辺の女の子たちにだったら自意識過剰なんじゃないのおつて笑い飛ばしてあげられるけど…栄子ちゃんじゃあなあ…。さつきも言ったように、栄子ちゃんは我が校の華だから。変な男に気に入られて、つけまわされてもおかしくない。

「うー…ん、しっかしストーカーなんて陰湿だよなあ。こんな季節に暑かしいし…。栄子ちゃんに気があるなら正々堂々と真っ向勝負しろってんだ。ねえ？」

腕組して怒った表情でそう言つて、栄子ちゃんの顔を覗き込む。栄子ちゃんが、やっと笑ってくれた。…うん、やっぱり栄子ちゃんには笑顔がいい。

その時向こうから栄子ちゃんを呼ぶ声。あ、栄子ちゃんの彼氏だ。その百八十センチはゆうにあるだろう背の高さと、服を着ていても明らかにわかる鍛えられた身体は、遠目でも格別に目立つ。男の才れから見ても、いい男だ。…ま、オレとは比べられないけどね。“いい男”の種類が違うから。

「ありがと逸くん、付き合ってくれて。でも、逸くんも気をつけてね。」

栄子ちゃんは彼に駆け寄りながらオレにそう言った。え？

きょとんとしていると、栄子ちゃんが手を振りながら笑つ。

「逸くんと律は稜星で一、二を争うアイドルなんだから、あたしより狙われる可能性は高いはずよ。ストーカー、されちゃうかもよ。」

「栄子ちゃん冗談きつい。オレは律と稜星で一、二を争ってなんか  
ないよ。」

オレはいだずらっぽく笑って栄子ちゃんに返す。

「ナンバー1はオレだもん。」



## #1 タソガレ (2)

栄子ちゃんと別れてオレは家路につく。もう急いで家に帰る必要はなくなってしまったけど、とりあえず帰って律に文句言ってやらなきゃ気が済まない。

学校からオレんちは歩いて約十五分。商店街を抜けて、閑静な住宅地にさしかかる。蝉の声をBGMに、なるべく陰を探して歩いていると、気のせいかな、誰かにつけられているような感覚。

振り返る。…誰も、いない。

さつき栄子ちゃんからストーカーの話聞いたからかな。足音が、聞こえたような気がしたんだけど。

とりあえずまた歩き始める。…だけどやっぱり、人の気配。

気にしつつ歩き続ける。まあ、栄子ちゃんにも言われたようにオレってけっこうモテるから、ストーカーされるのも無理ないけど。でもやっぱりそういう暗い行動はいただけないなあ。

そうこう思っているうちに家の前だ。オレはストーカーの不意をついてやろうと、門を開けるふりをして素早く振り返る。

「あ。」

足音の主がびっくりして目を丸くした状態で硬直している。…見たことのない顔。中学生くらいかな、目がくりくりで、さらさらのショートヘア。黒いTシャツにワンウオッシュのスリムジーンズ。

スタイルいいし、かなりかわいい。ふつ、オレも罪作りの男だぜ。  
こーんなかわいい子をストーカーにさせちまうなんて。

とりあえずカッコつけて、口元に笑みなんか浮かべて問いかける。

「オレに、何か用？」

するとその子はおどおどオレに聞き返した。

「あ、あの…新藤<sup>しんどう</sup>さんのお宅は…この辺りですか？」

なあんだ。声聞いて、ちょっとがっかり。この子、かわいい顔してるけど男じゃん。男にしちゃ声は高いほうだと思うけど。残念だなあ…男にしとくのもったいないけど、オレ男にはキョーミないし。カッコつけて損したな。

「この辺り…って、ここだけだ。あ、そっか。」

少年の質問に答えてて気がついた。そうか、そーいうことが。

「ひょっとして、由<sup>ゆ</sup>か。由のストーカーか。だったらストーカーなんてそんな陰湿なコトやってないで、堂々と会って言えばいいじゃん。」

オレは少年の右腕を掴んで引っぱる。そして門を開け、家の敷地に入る。由、というのはオレのかわいい妹だ。まだ五年生だけど、オレに似てモテるので、さっきの話じゃないけどストーカーされてても無理はない。

「あ、あのっ…！」

何か言いたげな少年を無視して、玄関を開ける。

「おおーい、由！ お客さんだぞー！」

玄関に入るや否や大声で呼んだオレに、すぐさま由が駆けつける。背中まである長い髪をポニーテールにして、オレンジ色のTシャツにデニムのスカート、その上にクリーム色のエプロンといった格好だ。夕飯の用意してたか。ウチの両親は共働きだから、夕飯の仕度はこうして由がすることも少なくない。

「おかえりなさい、いっちゃん。…お客様って？」

由はそう言つてオレの後ろにいる少年に目を向ける。…あれ、由、こいつと初対面？

「あ、のお…」

何か言いたげな少年を無視してオレは由に話を続ける。

「由、さすがはオレの妹だなあ。こいつ、お前のストーカーらしい。」

「ストー…カあ？」

「ほら、少年、由に言いたいことあんだろ？ 正面きつて言っちゃえよ。すつきりするぞ。」

「…あ、の…」

ええいはつきりしねえ奴だな！　だんだんイライラしてきた。由は不可解な顔で首かしげてるし。せつかくオレがこんない設定してやってんのに！

だあああつつつ…と叫ぼうかと思ったとき。

「あれえ、逸、今ごろ帰ってきたとか言う？」

廊下の向こうから、馬鹿にしたような声がした。オレははっと思いで出して急いで靴を脱いで、声のした居間へとダッシュ。

「律！　こんのやるおおおっ！」

ボタンっ。我ながらすごい勢いで居間のドアを開ける。テレビの前で、オレと瓜二つの顔（まあオレのほうが背も高いし顔も良いんだけどさ。）がゲームのコントローラー持って、水色と白のボーダーのＴシャツにジーンズって姿であぐらかいて座っている。オレを見るなり、奴はにやりと笑った。

「おかえり。」

## #1 タソガレ (3)

「おーまーえーなあっ！ 栄子ちゃんよりゲームのほうが大事かった！」

ばすんっ。オレはソファに鞆を放り投げる。オレの双子の片割れは、視線を画面に戻して言う。

「だってオレ、一昨日と昨日、二日連続栄子んちまで送ってったんだぜ？ 今日は彼氏呼ぶからいいよって、あいつが言ったんだし。」

「用があるって言ったそうじゃねえかお前っ。」

「二日連続逸にゲーム先越されるの悔しいからつい。」

律はペロツと舌を出して笑った。こーいーっはつつ。

「つい、ってなあっ！」

言いかけて止まってしまった。テレビの画面見て、愕然としてしまふ。オレが二日連続ゲーム占拠して辿り着いた画面、通り越してやがる！

「何でオレより先進んでんだよっ！」

律の首しめて揺さぶる。がーつつ、悔しいっ！

「ぐえ、やめろ逸バカっ……」

「しかもそのＴシャツ、オレんじゃねえか！ 勝手に着んなよ！」

「…苦しいって！ 放せよ！」

「いいかげんにしてよ二人とも！」

律の声より大きく、怒った声がオレたちの背後から飛んできた。二人して振り返る。由が、仁王立ちしていた。オレははおとなしく律の首から手を放す。

あ、忘れてた。オレは由の後ろにさっきのストーカー少年の姿があるのを見て、思い出す。そーだ、由とこいつ、どうなったんだろ。由と一緒に家の中に入ってきてるってことは、こいつの想いは成就したってことか？

「誰これ。」

律が少年を指差して問う。

「ああ、由のストーカー。」

オレが答えると由が即座に否定する。

「違うのいっちゃん。話聞いてあげて。」

そう言つて由は少年を振り返る。少年はおどおどして話し出す。

「あ、のお…、僕、小林真咲こばやし まさと言います。えと、新藤先生に、ここに来るように言われて…それで。」

新藤先生。ウチで“先生”なんて呼ばれ方するのは親父くらいだ。親父、弁護士だから。

「親父が？ 何で？」

問うと少年は今にも泣き出しそうな表情で言う。おいおい、男だろ。

「…新藤先生に、聞いてないですか？」

オレたち兄妹は三人とも首をかしげる。ここんとこ親父の顔見ないんで聞くも何も…。だいたい最近親父、家帰ってきてるのか？ それすら知らんつーの。確か母さんの話では今けっこう厄介な仕事を抱えているとか…。母さんは親父の事務所で事務をしているから、要するに母さんも忙しいのだ。ゆえに今日のように由が夕飯を作っているとゆーわけ。ま、それは余談だけど。

「…ひよつとしておとーさんの今やってる仕事に関係あるのかな…」

由が呟いた。うん、今オレもそれ思ってた。うんうん、って頷いている律もきつと同じだろう。

「ま、由の今言ったことはあながち間違ってもないが。」

突然ドアのほうから声がした。オレたち三人と少年はその声のしたほうをいつせいに見る。

「親父！」

「おとーさん！」

「新藤先生！」

オレと律、由、そして少年が同時に声をあげる。居間のドアにもたれかかって、親父が立っていた。

「早かったんだね、真咲くん。」

親父は少年に笑いかける。少年はホッとした表情で少し笑い返す。

「で？ こんな時間に突然帰って来て、見知らぬ少年家に呼んで…」

律が短く溜息をついて言ったので、オレもその後を続ける。

「どーいうことなんだよ？ ちゃんと説明してくれよな。」

と、親父は首をかしげる。

「あれ、言ってなかったか？」

「聞いてねえよ。」

即答。律とハモってしまった。そうだったわけ、と親父はまた首をかしげたが、まあいいかってな感じでやっとこの状況の説明を始める。

「今日からウチで預かることになった、小林真咲くんだ。」



「はあ?!」

またオレと律はハモってしまふ。思わずあんどりと口開けちまつたぜ。…前言撤回。状況説明なんかじゃ全然なかった。

律を見る。と、オレとまったく同じ表情で律もオレを見ていた。由もちよつと困惑した顔をしている。オレたち双子はまた同じタイミングで親父と少年…小林真咲を交互に見つめる。

「ちょ…それ、どーいうコトだよ。いきなり帰ってきていきなりそんなコト言われても…わけわかんねーよ。」

「そーだよ。だいたいウチで預かるって…ウチには年頃の女の子が二人いるんだぞ? ふつー預からねーだろーが。」

オレが親父に文句を言い始めると続けて律もそう言った。…ん? ちよつと待て。ウチのど・こ・に年頃の女の子が二人もいる?

「年頃の女の子が二人って…由と、ひよつとして…まさか律、お前のこと、か?」

オレが今ひつかかった点について、親父が聞き返す。すると律は鬼のよーに怒る。

「つたり前だろオレだって女なんだから!」

「律…その口調と態度じゃまああつ…たくその台詞、説得力ねーぞ。」

はうう…。溜息まじりにオレが言つと、親父も頷く。

「逸の言つとおりだ。…ほら、真咲くんが驚いてるじゃないか。」

親父の言つたとおり、小林真咲少年はただでさえ大きな目を、飛び出してポロリと落ちてしまふんじゃないかっていうくらいに見開いていた。律とオレをその大きな目で見比べて、呟くように弱々しい声で言う。

「…お、んなの人、なんですか…？ ごめんなさい、僕…お二人とも男だと思ってました…。」

ぶすつ、としてる律の横でオレは大笑い。小林少年は間違つてない。初対面で律のこと女だつてわかる奴なんかいるわけねーよッ。外見もオレと同じ（いや、オレのほうが格は上だけど）美少年ツ！だし、声だつて口調だつて、女らしさのかけらどころか細胞もない…これで一発で女だつて言える奴の顔が見てみてーよ…つつうぐつ。…あんまり大笑いしてたんで、律に殴られた。

## #1 タソガレ (4)

「真咲くん、改めて紹介するよ。こつちがウチの長男、逸。で、その双子の・妹、長女の律だ。二人とも真咲くんの二つ年上だよ。それから次女の由。真咲くんの四つ下になるかな。」

親父が小林少年にオレたちを紹介すると、少年は礼儀正しく深々と頭を下げる。

「小林真咲、中三です。お世話になります。」

「はあ、こちらこそ…つつて！ 親父！ まだ事情がさつつつぱりわかんねーんだけどっ！」

つられて挨拶はしてみたものの、一番最初の大疑問が解決しなかったんだった。思わず親父に詰め寄ってしまう。

「…まあまあいっちゃん。わたし今から急いでご飯の仕度の続きするから、食事しながらゆっくり話聞こうよ。ね、おとーさん。おとーさんも今日はもう仕事終わりでしょ？ そのうちおかーさんも帰ってくるんでしょ？」

につこり、由が笑ってそう言う。…そーいえば腹減ってるな…。腹が減っては何トカって昔から言うらしいし。…あれ、関係ないか。とにかくメシだ、メシ。メシ食いながらのほうは素直に親父の話聞けそーな気がする。食事は人を精神的にも肉体的にも丸くさせるのだ。おお、名言！

というオレの考えはすぐさま親父に打ち消された。

「いや、すぐ事務所戻らないといけないから食事はいいよ。母さんはもうしばらくしたら帰ってくると思うけど。」

「…だったらもつと順序だてて説明してくれよ。」

短く溜息をついて律が言う。うん、オレも今それ言おうとした。なんでこの少年ウチで預かるのか、もつと端的に説明できそーなものなのに。親父それでも弁護士か！

「うん、そうだな。」

親父は頷いてやつと状況を説明し始める。

「父さんの同期で、宮武<sup>みやたけ</sup>っていう弁護士がいるんだが、彼が今依頼を受けているのが、この真咲くんの家なんだ。何でもかなり高額遺産相続らしくて、一筋縄ではいかないそうさ。下手すると真咲くんの身も危険になりかねないとかで、しばらく小林家から離れることになったんだ。それで、ウチで預かることにした。」

…親父の話はだいたい理解できた。でも、なんでウチなんだ？他にも身を寄せる安全なトコ、いくらでもありそーじゃん。

「じゃなんでウチで預かるわけ？身の安全確保するんだったら、ウチよりもつといいトコあんじゃねえの？」

オレの疑問を律がそっくりそのまま親父に尋ねる。

「ああ、それは…」

親父が答えようとすると、初めて少年が自分から口を開いた。

「あのつ、…皆さんは、稜星学園に通ってらっしゃるんですね？  
僕、以前から稜星に…憧れてるっていうか通ってみたいと思つて…それを宮武先生にお話ししたら新藤先生を紹介してくれたんです。学校も近いし皆さん稜星の方だっということだったんで…。」

### 稜星学園。

…オレたち双子と由の通っている私立の学校。小等部、中等部、高等部がある、まあいわゆるエスカレーターな学校だ。けっこう名門な部類に入ると言われているらしいけど…小等部からずっと中にいると、通ってみたいアコガレの学校なんだろうかとちよつと疑問に思ってしまう。まあ、確かに校風はかなり自由だし、それに惹かれて入ってくる奴は多いみたいだけど。特に中等、高等からの途中編入の奴らはほとんどそうらしい。だから途中編入はかなりな倍率だとかいうウワサ。ホントかどうかは、よくわからない。

「そういうわけだから、逸、律、由、真咲くんを頼むな。じゃ、父さん事務所に戻るから。」

親父はそう言い残してとつとウチから出て行ってしまった。…残されたオレたちは、しばらくそのままぼーぜんとつつ立ってしまった…。

## #1 タソガレ (5)

「…とりあえず、わたし、ご飯の仕度の続き、するね。」

由のそのひとことで、やっとオレと律はフリーズ状態から抜け出せた。

うん、とりあえずボーっとしてもしょうがない、か。

由が台所に戻ってく。律も引き続きゲームに戻る。そしてオレと少年が取り残される。…さあて、どーしょーか。沈黙してるわけにはいかないよなあ…。なんか、話題話題っつと。

「何で、稜星に來たかったわけ？」

尋ねてオレはソファにどかっとな身を委ねる。突っ立ってる少年にオレの隣勧めて、座らせる。少年は遠慮がちにちょこんと座って、これまた遠慮がちに答える。

「あの…実は、憧れてた、通ってみたかったっていうのも嘘ではないんですけど…、探してる人が、いるんです。」

「探してる人？」

聞き返したのはオレじゃない、律だ。

「何だよ、お前。ゲームしてんじゃねえの？」

「だってこっちのほうが面白そうだから。で、探してる人って？」

律はゲームを終了させながらこっちに向きなおして座る。律に尋ねられて、少年は少し恥ずかしそうにする。…ははあん。これは。

「初恋の人、とか？」

オレがニヤニヤしながら聞くと、少年はぶんぶんぶんつ、とまるでモーターで動いているみたいに頭を左右に振る。

「なあんだ、違うんだ。」

オレと律はハモってしまふ。律のつまんなそうな顔。多分オレの顔も、同じ。

「すみません…男の人なんですけど…、男の僕から見てもかっこいいなあ、って思える人で…。僕もあんなふうになれたらなあって…。」

「ふうん。…稜星にオレ以外でかっこいい男なんていたっけ？」

「…名前とか、知らないの？ オレたちの知ってる奴かもしれないし。」

律の奴め…オレの発言はてんで無視かよ！

律の質問に、少年は知ってます、と答えた。そして、少年はその名を言う。

「えと…大石<sup>おおいし</sup>、…確か智史<sup>さとし</sup>さん…だったかな。」

「大石智史イ?!」

驚いて声をあげる。その声にはオレたち双子だけじゃなく、台所からの由の声も混ざっていた。

「ご存知なんですか?」

少年が嬉しそうに尋ねる。…知ってるも何も大石智史は…。

「智史はオレたちの幼なじみだよ。ガキの頃から、三人でつるんでる…。」

「…智史そんなにかっこいいかなあ…。オレのほうがモテるっぢゅーの。」

「何で智史のこと知ってんの?」

またオレの発言は無視されてしまった…。ふん、まあいいさ。そうだな、律の言うように、何でこの少年が智史のこと知ってんだろ? 他校の生徒にはオレのほうが絶対有名のはず…特に女の子にはね。まあ、コイツは男だけど。

少年は智史のことを思い出すように遠い目をして話しはじめる。

「前に…去年の秋だったかな、うちの近くの競技場で陸上の大会があったんです。たまたま僕、友達に誘われて見に行つて…」

ああ、そういえば去年の秋、陸上部遠征で大会に出てたっけ。確か智史、その大会で大会新出して優勝したって喜んでた気がする。智史は短距離のエースだからな。昔から足は誰よりも速かった。



「見かけはおっとりしてそれで線だつて細いのに、他のいかにも鍛えてますって感じの人達をあっさり抜いちゃって…カッコいいなあ…って思つて…」

おっとりしてそう、か。してそう、じゃなくておっとりしてる、が正解だけど。…それはともかく。

「お前も陸上やってんの？」

オレは少年に尋ねてみる。すると少年は苦笑する。

「僕は運動苦手で…。大石さんは、陸上っていうよりどっちかっていうと文化系の顔してるっていうか…僕と似たようなタイプかなあなんて勝手に思つてて…でもあんな足速くつて、イメージじゃないのに、カッコいいなあ…うらやましいなあ…なんて。」

ほんつとに、憧れてんだなあコイツ。見ててわかる。頬高潮させて、嬉しそうに話してる。ちよつと、うらやましい気もするな、智史の奴。

「確かに、智史は普段はしっかりしてるかと思えば大ボケかますしいキャラだけど…。走らせたら人変わるよな。」

「うんうん、ギャップ激しいよな。昨日だつてCD返してもらったけど中身入ってなかった。その前もさあ…」

オレと律は幼なじみの失態を奴に憧れてる少年の前で暴露し始める。智史とオレたちはほんとにガキの頃から…それこそ幼稚園のお泊り保育の夜に怖くてトイレにいけなかったことを知ってるくらい

の頃から一緒にいるから、話題は尽きない。

「…いっちゃんもりっちゃんも…いいかげんにしたら？ 真咲くん、智史くんのこと幻滅しちゃうよ？」

二人で盛り上がったたら、由に溜息混じりに止められた。はた、と気がつけば少年は困惑顔。あ、ひいちゃった？

…話題を変えなければ。

「そーだ！」

思いついた！ 話題の転換。

「智史、呼んじゃえばいいんだよ。そろそろ部活も終わる頃だろ。」

「逸にしてはいいアイデアじゃんっ…っていいたいトコだけど、智史今日、なんか急いで帰ってたぞ。珍しく部活サボって。用事あんじゃねーの？」

「用事イ？ 聞いてねーぞオレは。…ま、とりあえずケータイ、ケータイっと。」

オレは制服の胸のポケットから携帯を取り出し、智史に電話してみる。

とうるるる…とうるるる…。呼び出し音がしばらく続く。…うーん、律の言う通り、用事あんのかな…。

『はい。』

コール9回目にしてようやく繋がった。出れるんならさっさと出るっつーの。

「あ、智史。今どこ？ 暇？」

当然名乗らずに話し掛ける。と、智史が返す。

『あー…今ダメ。これからDiana To Moonのライブなんだ。ごめん。』

はあ？！ だいあなとうむーんだあ？！！

…Diana To Moonっていうのはギター、シンセ、ドラムの男性三人に女性ヴォーカル二人の今けっこう人気のユニットで、今シーズンはドラマの主題歌なんかも歌ってる。ヴォーカルの二人がまた両方ともカワイイんだこれが。オレはSHIYAちゃんのほうが好みだなあ…なんて言ってる場合じゃなくて！

「なんでオレも誘ってくれなかったんだよう！！ ずるい智史っ！ オレに黙ってライブなんて！ いっちゃん泣いちゃうからっ！」

『ごめんって。叔母さ…紫<sup>ゆかり</sup>さんからチケット1枚だけもらっちゃってさ。』

これは内緒なんだけど、智史の叔母さん、大石紫さんはDiana To Moonのマネージャーをしている。でもだからってえ…悔しい。

「…わかった。今日は許す。楽しんでこい。…そのかわり、」

『なに？ サインとかはもらえないよ。楽屋には入れないから。』

「…ハーゲンダッツのアイス、十個おごってくれ。」

『なにそれ？ 五個でいいだろ！』

「八個！」

『…六！』

「…仕方ないなあ。六個で手を打ってやるよ。忘れんなよ。」

ぴつ。電話を切る。

「…なにケチくさい取り引きしてんだよ。」

律が呆れてる。ふふーん、だ。

「誰もシングルカップなんて言ってねーよ。オレはポイントサイズの個数で話をしてたんだもーん。この夏はハーゲンダッツ三昧だな。」

「…ばかばかしい。」

「…大石さん、お忙しいんですね。」

オレたちのせこい会話を無視して、少年が少し残念そうに言った。あんまりがっかりして見えたので、オレは少年の肩をポンと軽くたたく。

「別に急ぐこたねーよ。明日にでも会えるって。」

「そうそう、智史は逃げないよ。ハーゲンダッツ付きで会えると思うぞ。」

律も笑ってそう言う。

「お待たせしましたあー、ご飯ですよー。」

ちょうどいいタイミングで、キッチンの由がオレたちに声を掛けた。

## #2 アコガレ (1)

次の日の朝、いつも遅刻ギリギリにダッシュしてるオレたち双子は珍しく余裕で学校に着いていた。理由はただひとつ、小林真咲少年を案内しなきゃいけなかったから。

正門近くまで来ると、あちこちから主に女の子たちのざわめきが聞こえる。まあ無理もない。オレたち双子が揃ってこんな時間に登校なんて、滅多に見られるもんじゃないからなあ。なにせオレたちは栄子ちゃんいわく“稜星で一、二を争うアイドル”だし、おまけに今日は見慣れぬ男子中学生が一緒だ。…男子中学生、といっても制服が男物だからかううじてそう見えるだけなのだが…。ホント、律とちようど反対だな。

「なんか…いろんな人の視線が痛いんですけど…。」

真咲がつぶやく。と、律が笑って返す。

「無理もないよ。転校生なんてシチュエーション、このガッコでは滅多にないから。」

「…いえ、僕が転校生だから目立ってるんじゃないくて…なんか、なんとなく、お二人が両サイドにいるから目立ってるような…。」

真咲がオレと律を見る。ちょっと困惑顔。うーん、その表情、男にしとくのもったいないなあ…じゃなくて。

「そりゃ仕方ないさ。だってオレたちほど目立つツーショットない

もん。」

カラカラカラ…真咲の困惑顔を笑い飛ばす。

「？ …お二人はこの学園内では有名な人なんですか？」

ケラケラケラっ。さらに笑ってしまった。ゆーめーじん、ねえ。

「あれ、言ってなかったっけ？ オレ、稜星の生徒会長。んで、こっちは副会長。」

オレは笑いながら自分と、そして律を指差して言う。真咲は目を大きく見開いた。あ、口も開いてる。

「えええつつつつ！！ 稜星の、生徒会長と副会長！？ …確かここって、生徒会役員は生徒からの投票で決まるんですよね？！」

「そ。だから生徒からの人望が厚い…つまり学園のスーパースタアしか選ばれないってコト。」

「…自分で言うなよ。」

律の乾いたツツコミはとりあえず無視しといて。

「ちなみに智史は会計だよん。」

そう付け加えると真咲はさらに驚いて、溜息のように呟く。

「陸上部のエースでさらに生徒会役員…すごいなあ…。」

「ちなみにさらに付け加えると、智史、陸上部の部長でもある。」

律がさらにの上乗せをすると、もう無条件降伏、って感じ。

「早く会いたい？」

律が聞くと、真咲は目を輝かせて頷く。

「じゃさ、昼休み、生徒会室に来いよ。オレたちそこで昼メシ食ってるから。あ、弁当も持って、な。」

「はいっ！」

おーお、いい返事。

そうこうしてるうちにオレたちは靴箱にたどり着く。オレと律はそれぞれ自分の靴箱で靴を履き替える。…おっと、ここは高等部の靴箱だった。真咲は中等部だからこつちじゃなくて…。

「逸先輩、律先輩、おはようございまあす！」

廊下側から可愛く明るい声がオレたちを呼ぶ。目を上げると、きやるんつと元気な笑顔の女の子が二人。中等部3年2組の、志信しのぶちゃんと比呂美ひろみちゃんだ。

「おはよ。今日も元気いーねえ。」

「もちろんですう！ あれ、転校生、ですか？」

志信ちゃんがオレの隣の真咲に気づいて問いかける。ああ、そう



だ。真咲も中等部3年生だっけ。

「うん。二人と同じ、中等部3年。」

「そういえば先生が転入生が来るとかこないだ言ってた気がする…。」

「

「え、そうだっけ。じゃあ、うちのクラスかな？」

「だったらちようどいいじゃん。志信ちゃんと比呂美ちゃんに案内してもらったら？」

律が靴履き替えながら横から口をはさむ。オレも今同じこと言おうとしてた。

そうと決まれば話は早い。

「真咲、この子達同じ中等部3年生。こっちが佐々西志信<sup>ささいし</sup>ちゃん、こっちが森比呂美<sup>もり</sup>ちゃん。」

「小林真咲です。よろしくお願いします。」

「小林くん、ね。よろしくねっ。」

「んーとじゃあ、先に職員室案内したほうがいいのかな？」

志信ちゃんと比呂美ちゃんは、きゃいきゃいと小鳥のようにはしゃぎながら真咲に話し掛ける。うーん、適任に出会えてよかった。

「んじゃ志信ちゃん比呂美ちゃん、真咲のこと頼むね。あ、それと

昼休み、真咲生徒会室に連れてきて。」

「はあい。了解です。」

「じゃあ、まずは職員室職員室つと。」

「よろしくね!。」

職員室に向かう三人にオレと律は手を振る。

さて、教室に行きますか。と踵を返す、と。

「今の…誰? 転校生?」

挨拶もなしにオレ達に問い掛ける声。声のした方向を見ると、朝練を終えてTシャツ・短パン姿の智史が、靴を履き替えていた。

「智史!」

## #2 アコガレ (2)

「なんでもうちよつと早く登場しねーんだよ！」

真咲もうつちまった後じゃねーかつ。なんてタイミングの悪い奴なんだ！

「んなこと言っただって…。んで、あれ、誰？」

智史が再び聞き返す。しゃーねーな、教えてやるか。

「ああ、昨日からウチで預かってる奴。親父の仕事関係で。」

「…預かってるって…なんか犬か猫みたいな感じだな。」

「可愛さはペット並みかも…」

オレも律も、ひどいコト言ってるなあ…。

ともかくオレたち三人は教室に向かいながら話を続ける。途中いろいろ話を中断させなきゃならないこともあったけど。なにせさつきも言ったけど我が校星の生徒会役員が四人中三人揃ってるんだから、他の生徒からの挨拶やらなんやらは半端じゃないのだ。

智史に昨日の出来事を全て話し終えることができたのは、やつの思いで高等部の校舎にたどり着き、二年の教室がある二階へと階段を昇るあたりだった。

「おれのファン、ねえ…。」

智史はふうん、と首をかしげる。コイツ、生徒会会計、つまりは  
稜星ナンバー4の人気保持者のくせに、そーいうコト無関心なんだ  
よなあ…。オレほどじゃないにしても、きゃあきゃあ言ってる女の  
子は多いのに…。ま、今回は男だけど。

「あ、ファンで思い出した。智史、昨日のライブどーだった？」

律が言っただけでも思い出した。そーだ昨日、こいつDiana  
To Moonのライブに行ってたんだった。

「うん、よかったよ。」

「楽屋に入った？ SHIYAちゃんに会えた？」

オレがワクワクしながら聞くと、智史はあっさりと答える。

「だーから、昨日言っただろ？ 楽屋には入れないって。」

「…なあんだ。つまんないの。」

「だいたい楽屋に入れたって、智史はSHIYAちゃんよりCHI  
SAちゃんにしか興味ないよなあ。」

くくつ、と笑って律が言う。智史は顔を少し赤らめて大急ぎで否  
定する。

「なっ…何言っただよ律！ おれは別につつ…あ、予鈴鳴ってる  
！ おれんとこ一時間目数学なんだ！ 当たるかしんねーからっ、

じゃあなつつつ！」

大慌てで廊下を走ってく智史。途中掃除用具入れにぶつかってた。ぎやははは、おもしれー！ オレと律は大爆笑。智史からかうとコレだから楽しいんだよなあ…やめられない。

「んじゃオレらも教室行きますかね。」

ひとしきり笑ってから、オレと律はそれぞれの教室へと分かれる。

## #2 アコガレ (3)

つまらない授業を四つ受けて、やっと昼休みだ。待ちに待った弁当の時間。オレは弁当箱と五時間目の古典の宿題プリントを持って、生徒会室に向かう。

「逸せんばあい！ これ食べてくださあい！」

「あ、ありがとー京子ちゃん。調理実習？」

「逸さまこれも！」

「ありがとー美穂ちゃん。」

：生徒会室へ行くまでには、毎日いろんな女の子がいろんな差し入れをくれるので、なるべく荷物は少ないほうがいい。

「お、逸！ 今度のサッカー部の練習試合、人数足なくてさあ。助っ人で出てくんない？」

「考えとくー。」

女の子だけでなく、男からのこっという誘いも結構あるんだなあ。人気者はつらいなあ。

そんなこんなだから、生徒会室に着くのはいつもオレが最後なのである。

「はぁいいっちゃんでえす！ 今日も差し入れ大量だよー。開けてー！」

両手に差し入れ、なのでドアを開けられないのでいつものようにオレはドアの前で叫ぶ。すると今日は律でも智史でもなく、書記の栄子ちゃんでもない人がドアを開けてくれた。あ、そか。真咲か。

「…すごいんですね逸さん。」

「今日はドーナツにクッキーにチョコレートにワッフルと…カップケーキ、かな。食後にみんなで食べよーねえ！」

どさどさどさっ…と会議室にありがちな長机に女の子たちの差し入れを広げる。色とりどりのラッピングが、まるで季節外れのクリスマスかもしくはヴァレンティンのプレゼントのようだ。女の子たちのこーいうとこってすごいよなあ…包装なんかすぐに外されちゃうのに、そんなところにまで気持ち込めてんだもんなあ…。いつも感心する。

それはともかく。

オレはいつもの決まったパイプ椅子に座って、とりあえず弁当を広げる。四つの長机を四角く配置させてある、黒板のすぐ近くの席がオレの席。いちお、かいちよおだから真ん中に陣取ってる。オレから見て左側の机に智史、右側の机に律と栄子ちゃん、てのが定番。今日は智史の隣に、真咲が座ってる。心なしか、緊張してる？

「真咲やっと思史に会えたな。よかったな。」

オレが笑ってそう言つと、真咲ははにかんで笑う。

「話聞いてたら真咲んち、智史んちの別荘の近らしいよ。」

律が弁当の海老寄せフライを食べながら言った。智史の（いや正確には智史の親父さんが所有してる）別荘：ああ、昔オレたち双子も連れてつてもらったことがある。いかにも避暑地って感じの、高原の別荘だっけ。

「へえ、昔よく行ったとこだよな。夏休みに。確か近くに湖があった…。」

「そうそう、三年前くらいから行ってないけど…。」

「えーいいなあ、大石くんちの別荘、あたしも行きたーい。」

しばらく弁当食べながら智史んちの別荘の話で盛り上がる。真咲も地元の話なので、ちょこちょこ会話に乗ってこれてるし。

「そういえば去年の遠征で近くまで行ったんだよ。いつも車で行ってたけど、電車とか使って行くとめちゃくちや時間かかるんだよなあ。」

智史が言つと、真咲の目がきらきらする。

「そう！ その遠征なんです、僕が大石さんのこと初めて見たの。あつという間にトップに立って、本当にすごいと思いました！」

あまりにも真咲が熱弁するので、智史は照れ笑い。

「…ホントに真咲くん、大石くんのファンなのね…。ここまで純



粹に憧れられるのって、ちょっと羨ましいかも。」

栄子ちゃんがしみじみ言った。うーん、確かに。女の子たちからじゃなくても、憧れられるのって、気持ちいいもんな。

「智史今日帰りにウチ寄ってけよ。真咲、智史とのツーショット写真、欲しいだろ？」

律がなかなかいい提案を持ち出す。なるほど、ファンなら一緒に写った写真、欲しいよな。オレも体育祭とか、イベント時にはひっぱりダコだもん。

すると真咲は頬を少し赤らめて、弁当箱が入っていた紙袋から、何かを取り出す。

「…実はそう思って、デジカメ持ってきちゃいました。」

「おおお、準備いい！」

そして食後はもらったお菓子を片手に、真咲のデジカメで撮影会ということに。真咲と智史のツーショットだけでなく、いろいろ撮りまくる。そうそう生徒会室で写真なんか撮ることないから、調子に乗ってたくさん撮ってしまった。人のデジカメだし。

「あ、今のちよっと目閉じちゃった。消して消してっ。」

栄子ちゃんの声を遮るかのようにきいんこおんかあんこおん、とチャイムが鳴る。しまった！ 古典の宿題プリントの存在をすっかり忘れてしまっていた…。ま、仕方ない。どーにかなるさ、きつと。

「さあて、教室戻りますかねー。」

「あ、真咲授業何時間目まで？ 帰り道、まだ覚えてないよな？」

律が食べかけのカップケーキのかけらを口に放り込みながら真咲に尋ねる。

「えと、確か六時間目まで…」

「じゃ終わったら陸上部の練習見に来る？ 逸もどう？ 久しぶりに走りに来たら？」

智史が真咲とオレにそう言う。そしたら帰り道も心配ないじゃん、となるほど、真咲は智史の走る姿見たいだろうし、オレも久々に陸上部に乱入するのもいいかな…さすが智史、なかなかいい考えだ。

「おっけい。じゃ、真咲、そうしよう。」

オレは真咲の返事も聞かずに智史の提案に乗る。真咲はためらいがちにも頷く。よし、決定。

そうしてオレたちは生徒会室を後にして、それぞれの教室へと戻る。

## #2 アコガレ (4)

授業中に隣の席のさつきちゃんに宿題プリントを写させてもらって、なんとか古典を乗り切って、今日最後の授業の世界史も、居眠りしつつ乗り越えて、やっと放課後。Ｔシャツとジャージに着替え、女の子たちからのお誘いをうまくかわして靴箱へと急ぐ。真咲とそこで待ち合せているので。

「逸さまあ、今から直美たちとカラオケ行くんだけど、一緒に行きませんか？」

「えー、私たちとモス行きましょーよお。」

「ゴメン美樹ちゃん玲ちゃん、今日は陸上部なんだ。また今度誘って！」

カラオケもモスも、美樹ちゃんも玲ちゃんも、魅力ではあるけど今日は断る。えー…と残念そうな女の子たちに笑顔だけは忘れずに

靴箱に着くともう既にそこには智史と真咲の姿があった。鞆を抱えて智史の横におずおずと立っている真咲は、憧れの彼の隣に立っているだけで幸せって感じの女の子みたい。制服着てなかったら、ホントに女の子に見間違われるぞ。

「ゴメンゴメン、待たせちゃって。女の子たちのお誘い断るのに苦労して…」

「はいはい。では、行きますか。」

軽く智史に流されてしまった。そんなオレたちのやりとりを見て、真咲が笑う。

グラランドに向かうと、陸上部の連中は智史を見つけ、集合する。真咲をグラランドの端のベンチに座らせて、陸上部マネージャーの由紀ちゃんに相手を頼んで、オレも陸上部が集まる輪の中に溶け込む。オレが陸上部に合流していることがもう既に学園内に広まったらしく、グラランドの周りには女の子たちが集まり始めている。ウワサつて、早いなあ。

アップを済ませて、オレが200メートル走のコースで同じクラスの齊藤とタイムを競っていると、智史がやって来た。

「だいぶ体温まってきた？ 久しぶりに競争してみる？」

智史に促されて、200メートルのスタート位置に二人並ぶ。競争、つたつてなあ……。智史の専門は200メートル走だろ。例の、真咲が見にいったつていう大会で優勝したつてのも200メートル走じゃん……勝てるわきゃねーよ。

スタート位置に立つて、真咲のいるベンチの方を見ている。マネージャーの由紀ちゃんが気付いて、他の方向を見ていた真咲に何か言つと、真咲もこっちを見る。

「位置についてえ」

齊藤が声を掛ける。オレも智史も、クラウチングスタートの器具に足をかける。真っ直ぐに前を見る。勝てるわけない……だからって、手を抜くわけにはいかない。そんなこと、できるわけない。

「よおい…スタート！」

走る。走っている間は、何も頭がない。真っ白。ただゴールを見  
てる。

どこで智史に抜かれたのか、それとも最初から智史のほうが早か  
ったのか、記憶にない。とりあえず、ゴールに着いたら既に智史は  
そこにいた。

「うっ…やっぱ走るのだけはかなわん…悔しい…。」

「いちお毎日走ってるし。たまに来る奴なんかに負けらんないよ。」

笑う智史を軽くうらめし顔でむうとにらんで、思わず「もう一勝  
負！」とか言ってみる。智史は笑顔のまま快諾。

…結局「もう一勝負！」が五回ほど続いたけど、一度も勝てずに  
タイムオーバー。くうう…悔しすぎるっ。

途中何度か気になって、真咲のほうを見てみたけど、あんまり気  
にすることなかった。真咲は終始智史の走る姿に見入ってたみたい  
だし、由紀ちゃんとも打ち解けて話をしていたみたいだし。

## #2 アコガレ (5)

部活を終え、制服に着替え帰路に着く。

途中のコンビニで智史にハーゲンダッツのカップをおごってもらい(とゆーか半ば強制的におごらせて)、歩きながら食べている。やっぱりハーゲンダッツはクキクリ(クッキー&クリームの略)だよなー…。美味い。

「やっぱり智史さんて、走ると顔つき変わりますよねえ。すごかつこよかったです。」

真咲がアイスを食べる手を止めて、溜息つくように言う。智史はスプーンを口にくわえたまま照れ笑い。

「そだな、走つてるときはかつこいいよな、智史は。ま、オレはいつでも何してるときでもかつこいいけど。」

「…逸さんもかつこよかったですよ。」

「真咲、逸に気なんか遣わなくてもいいよ。さらりと流しとけばいいんだから。」

「智史ヒドイ…氣い遣つてよう。」

そんなことを言いながら、だらだら夕日の中を歩いている。夕方とはいえまだまだ暑い。じりじり、コンクリートの地面から熱が伝わってくる。陽が傾いているから直射日光じゃないだけ昼間よりは

まだけど。蝉の声も、止む気配はない。

しばらく歩いていると、智史が急に立ち止まって後ろを振り返った。

「？ どした智史。」

「…いや、今、誰かにつけられてる気がして…。」

智史が気にする方向を、オレも見てみる。けど、誰もいない。

「気のせいだろ？ あーもう、昨日からこんなばっかだよ。智史も栄子ちゃんからストーリーカーの話聞いたのか？」

「聞いたは聞いたけど。」

「だから過剰反応になってんだよ。オレも昨日気になって、後ろ振り返ったら真咲がいた。な、真咲。」

「…気のせいかなあ。」

智史が首をかしげる。気のせい気のせい、そうあしらって歩き出す。

アイスも食べ終わって、近くの公園に寄り道してゴミ箱にカップを捨ててまた歩き出した頃、真咲が遠慮がちに智史に問う。

「あの…智史さんは、彼女とか、いらっしゃるんですか？」

あまりにも唐突な真咲の問いに、智史はまるでコントのように石

に躓く。

「へっっ??? か、かのじょお?」

智史声裏返ってるぞ、変な声つ。思わず吹き出してしまった。そして智史の代わりにオレが答える。

「そんなもんいいいいいい。智史そーいうことにはてんで疎いからっ!」

「でも、あれだけ走つてるとこ素敵なんだし、なんといつても生徒会役員だし! モテますよね? 彼女の一人や二人や三人! いてもおかしくないじゃないですか。」

真咲の真顔に、やっと平静を取り戻した智史が苦笑い。

「彼女の一人や二人や三人て! 逸じゃあるまいし。」

「オレは一人や二人や三人じゃすまないけど。なーんてっ。」

「逸さんはたくさんいらっしやるんですか? 彼女。」

「! なんか、人聞き悪いなあ。それじゃまるでオレが遊び人みたいじゃん!」

「あれ、そーじゃないのか? てっきり逸は遊び人なんだと思ってた。」

智史が仕返しのようにオレにそう言う。智史のイヂワルっ。オレは智史をにらみつけて返す。



「…違いますう。特定の彼女はいないよん。みいんなお友達、お・と・も・だ・ちっ。…そーいう真咲は？ 彼女とか、好きな女の子とか、いないの？」

「はあ…、そういう人は、いません。」

「好きな芸能人とかは？ 理想のタイプとか。」

たたみかけて聞いてみる。と、真咲はうん、としばらく考えて、思いついたようにつぶやく。

「…鞘根虹香、とか…かなあ。」

「鞘根虹香かあ。…真咲、なかなか面白いじゃん。オレもけっこう好きかも。新曲もいいよね」。智史は…CHISAちゃんのほうが好き？」

また智史をからかってみようとする振ってみる。が、無視して話変えやがった。

「…そういえば真咲、ちょっと鞘根虹香に似てるよね。目とか。」

仕方ないのでその話に乗ってやる。無視されたのは気に障るけど、オレって寛大だから。

「言われてみるとそーかも。パツチリ二重のくりくり大きい目だよな。」

「えええ、そうですか??？」

…そんなくだらない会話をしながら、ようやく智史の家の近くまでたどり着く。

あと十数メートルで智史んち、ってところだった。ずっと普通に会話をしていた智史が、また立ち止まって振り返る。

「今フラッシュ光らなかった？」

「へ？ 気付かなかったけど。」

きょとん、として智史を見る。と、智史は周囲を気にしながら小声で返す。

「…過剰反応なんかじゃない気がする…誰かにつけられてないか？」

うーん…そう言われても…。とりあえず、辺りを見回すが、誰もいない。気配も、感じられない。

「逸のストーカーとかじゃなくってさ。真咲って、身の危険があるかもしれないから逸んちに来てるんだよね？」

智史が少し険しい顔をして言う。そうだった。真咲は莫大な遺産相続のトラブルに巻き込まれないためにうちに来たんだった。

「でも僕がこっちに来たのまだ昨日のことだし…こっちにいること弁護士の宮武先生と僕の後見人の湯浅さんしか知らないし…。」

「まあ、警戒し過ぎるに越したことはないんじゃない？ 逸、気をつけて帰れよ。」

気をつけて… っていっても智史んちからオレンちまで、歩いて五分なんだけど。しかもここは住宅地。道細いから車通りも少ないし。

でもまあ真咲は狙われててもおかしくないので、智史の言う通り、警戒し過ぎるに越したことはない、か。

「わかった。」

そうして智史の家の前で智史と別れ、真咲と二人、新藤家に帰るわけだけど…。

「…真咲？」

さつき智史が立ち止まった場所を真咲はじっと見つめていた。オレが声を掛けると、我に返ったようにオレの顔を振り仰ぐ。

「どうか、した？」

「…いえ、なんでもありません。」

### #3 ヒトカゲ (1)

次の日。昼休み、いつものように生徒会室にたどり着き、ドア開けてーと頼むが、返事がない。あれ、珍しく今日はオレが一番乗り？

仕方ないなあ…。オレは女の子たちからのプレゼントを片手に抱え直して、ポケットに入っているはずの生徒会室の鍵を探す。…。いつも誰かが先に来ているから、滅多にこの鍵使わないんだよなあ…。見当たらない。

もたもたしてると後ろから手が伸びてきた。鍵穴に鍵を挿す。振り返ると智史だった。

「わりい。オレが一番なんて、珍しいよなあ。」

「…律と栄子ちゃんまだなんだ。真咲は？」

ドアを開けて、中に入る。…心なしか、智史の表情が硬い？気のせいかな…。

「ああ、真咲、今日は志信ちゃんたちに校内案内してもらったってさ。」

ふうん、と言った智史の返事の後に、短い溜息が混じった。…やっぱり、なんか智史、いつもと違う。

荷物を置いていつもの席に座って、智史を眺める。窓から差し込む光の中、逆光になっているからというだけじゃなく、暗い感じ…？

「…なんかあった？」

あくまで軽く、聞いてみる。十年以上も見てきた顔だ。なんかあったに決まっているのだが、ここはさらりと聞いたほうがいい。

「…ん、ちょっと。」

智史が少し笑ってみせる。そしてポケットから一通の封筒…手紙？を出しながら、話し始める。

「昨日さ、帰り、誰かにつけられてるような気がするって言ったじゃん。」

「うん。…ってまさか…」

「…違うかもしれないけどさ。」

智史はオレにその封筒を差し出す。オレはその薄いピンク色の封筒の中に入っていた一枚の便箋を取り出し、目を通す。

そこにはたった一行、女の子っぽい字で、短い文章が書かれていた。

『あなたをずっとみています』

「…ストーカー…？」

オレがつぶやくと、智史がうなる。

「うー…ん。昨日の視線とは別かもしれないけど…。これ、今朝郵便受けに入ってたんだよ。ほら、封筒。差出人も書いてないけど、宛て先の住所も書いてない。てことは、郵便じゃなくて、直接入れたってことだよな。」

言われて封筒を見てみる。表には『大石智史様』の宛て名だけしか書いていない。切手も貼ってないし、智史の言う通り、直で郵便受けに入れたんだろう。

「こーいうこと慣れてなくてさ。女の子から手紙とかはもらうけど、みんな直接もらったり、直接じゃなくてもちゃんと差出人書いてあったりしたから…どう対処していいのかわかんなくて…。逸ならわかるかな、って。」

「わかるかよ、オレだってストーカーには慣れてないし。てか慣れてたくねーよ。」

真顔で言う智史にうなだれてしまった。ストーカー慣れしてる奴なんているのか？ いねえよフツ！。そんなことに慣れたくない…。

「うー…ん、どう対処したら、ってもなあ…。」

オレと智史はそのピンクの手紙を眺めたまま、しばらく沈黙。その沈黙を破ったドアの開く音。律と栄子ちゃんだ。

「うわ、今日は逸のほうが早かったんだ。なんかくやしいつ。」

「仕方ないじゃない律が調子に乗って怪我なんかするから…」

「怪我ってほどの怪我じゃないけど…あれ、どした二人とも。」

自分の右腕に貼られたガーゼを一瞥して、律がオレたち二人の顔を見る。なんか変な感じを察したらしい。

「律、怪我って、どしたの？」

智史が話を逸らせようとしたのか、律の問いを別の問いで返す。律はああこれ、と右腕を上げてみせる。

「さっきの時間、体育で幅跳びやってさ。奥井が新記録出してみろってゆーからマジになって跳んだらずさああつつってすりむいちまった。」

「奥井サンの挑発になんか乗るからよ。で、保健室行つて遅くなつたってわけ。」

奥井っていうのは律のクラスの女子体育の先生。律を気に入っているのかいないのか、よくそーいう注文を出されると前々から律は愚痴っている。

「…で、何？　なんかあったの？」

智史の話逸らせよう作戦は失敗に終わる。ま、そりゃそーだろ。律だってオレと同じ、伊達に十年以上智史とつるんでいるわけじゃない。智史の表情、見逃すわけではない。

### #3 ヒトカゲ (2)

「実は、さあ。」

智史が口を濁しているので代わりにオレが言っでやる。

「智史ストーリーされてるみたいなんだってさ。まったくナンバー1のオレをさしおいて…生意気じゃね？」

「ストーリー…？」

律と栄子ちゃんがハモる。オレはピンクの封筒をひらひらさせる。

「昨日の帰りに、なんか視線が気になってさ…。その時は真咲も一緒だったし、ほら、真咲遺産問題抱えてるって言ってたから真咲のほうに気がかりだったんだけど、逸に気のせいだって言われて…。で、今朝、朝刊取りに行ったらこの手紙入ってて…。」

智史がぼそぼそと話し始める。オレはその手紙を律に手渡す。律が中の便箋を広げると、栄子ちゃんも覗き込む。

「…これだけ？」

律が問うと、智史が頷く。栄子ちゃんは目を上げた律から便箋と封筒を取り上げ、じっくりと見ている。

「…直接家に来てるのね…あたしと同じだわ…。でも、あたしと違うのは…これ、手書きよね。あたし宛てにきてるのは、パソコンで



印字されたものなのよね…。」

「さすが、経験者。」

律がぱちぱち、と拍手をする。栄子ちゃんが律をにらむ。

「ま、そんな冗談はさておき。手書きってことは、筆跡で人物特定できるってこと?。」

「逸女の子からたくさん手紙もらってるよね、わかんない?。」

律の台詞を受けて智史がまた無茶を言う。…わかんねーよっ。

「…だいたいオレに手紙くれるのはオレのファンじゃん…。このコは智史のファンだろ。オレに手紙くれてるわけないし、そもそも筆跡なんか見ただけでわかるかよ。」

「ごめんね、余計なこと言った。」

栄子ちゃんのせいじゃないのに、栄子ちゃんが謝りながら着席する。同じく律もその隣に座る。立ち話には長くなりそうだし、弁当食べながらの話にしたほうがよさそうだ。

「とりあえず食べながらにしようぜ。腹減っちゃった。」

促すとみんな頷いて、おのおの弁当広げてランチタイム。

「…栄子のストーカーもそうだけど、直接家のポストに手紙入れに来るってことは、うちの学校の奴じゃないってことだよな。うちの学校の奴ならわざわざ家まで来なくても、学校にいる間に何らかの

アクセスしてくるだろうし…。」

律が卵焼きかじりながらなかなかいい意見を言う。やるじゃん。ちよつとくやしいけど、その通りだ。智史が視線を感じたのもガツコ出てからだし…てことは他校生？

「他の学校の子なんて…接点ないけど。手当たり次第に遊びほうける逸じゃあるまいし…。」

身に覚えがないよ、と智史は溜息をつく。…なんかオレに対してすつごく失礼な言い方してない？ 手当たり次第なんて…そんな軽くなえよつ。声掛けられたら応じてるだけじゃんつ。女の子がほつとかないんだから、仕方ないじゃん、ねえ。

「…今の台詞にはちよつと物言いつけたいけど、まあ置いといて。接点ないって言うけど、智史、真咲みたいな奴もいるじゃん？ 大会とか見に来てて、ヒトメボレしちゃった、とか。」

「そつか、そーだよな。智史走つてるとこはカッコいいし。」

律が頷く。すると智史もうーん…とうなる。

「でも、あたしもそうだけど、視線感じて名前のない手紙もらっただけなのよね…。スッキリしないし気味悪いんだけど、こつちからは何もできない。向こつの出かた見てるしかないのよね…くやしいんだけど。」

栄子ちゃんが眉をひそめて言う。まあね…訴えるようなことはされてないし、栄子ちゃんの言う通りだ。

「そだね…様子見るしか、ないか…。」

智史がまた溜息をつく。なーんか、暗いなあ。こういう雰囲気はこの生徒会室には似合わない。空気換えなきゃ。話題の転換、転換つと。

「しっかしストーカー、流行ってんのかなあ？ それよりオレは鞘根虹香の新曲のほうが行ってほしいなあ…。」

「ああ、“つきのががみ”？ あれって作詞作曲、鞘根虹香本人なんだって？」

律がすかさず話に乗ってきてくれる。オレの意図を読みきっている。

「らしいよね。あたしけっこう好きよ。つきのががみ あなたのすがた うつして とおくにいても わかるように… ってサビの歌詞が好き。」

栄子ちゃん、歌上手い…。思わず拍手。すると栄子ちゃんは照れ笑い。うんうん、いい空気になってきた。智史にも話を振ってみる。

「そういえば真咲も、鞘根虹香好きって言ってたよな。ちょっと意外だった。」

「そうそう、昨日思ったんだけど、真咲って、鞘根虹香に似てるよね？」

よし、乗ってきた。智史の顔に明るさが戻った。うん、それでこそ智史。よかったよかった。

そうして生徒会室は、昼休み終了のチャイムが鳴るまで、そのまま鞆根虹香の話題で盛り上がる。考えたって答えの出ない問題は、とりあえず保留にしておくのが一番だ。考えるだけ時間の無駄ってもんだ。

### #3 ヒトカゲ (3)

「ただいまあつ！ …… 由、シャワー使えるー？」

今日も一日なんやかんや授業を切り抜け、帰宅。汗だくになった制服のシャツのボタンを外しながら、ドタドタと廊下を歩く。

…居間からピアノの音：なんだっけ、この曲。とにかく弾いているのは由だ。

「…なんだったっけ、この曲。」

「あ、いつちゃんおかえりなさい。」

「おかえりなさい、逸さん。」

居間に入ると由の手が止まる。くるりとオレのほうに顔を向けてそう言つと、ほぼ同時にソファに座っていた真咲も同じような反応をする。

「ドビュッシーの“月の光”。真咲くんのリクエストなの。」

由はそう言つて、続きを弾き始める。

オレは真咲の横にどかっとな腰を下ろす。真咲はちらりとオレを見て微笑んで、また由のピアノを弾く姿に視線を戻す。

「…由ちゃん、上手ですね、ピアノ。」

真咲がつぶやくように言う。

「3歳から習ってるからな。」

「あんなに弾けたらきつと気持ちいいですね…。」

「真咲はピアノとか…音楽やるの?」

真咲、お金持ちの坊ちゃんだから、ヴァイオリンとかやってそうだよなあ…。なんて思って、聞いてみる。すると真咲はふるふる、と、首を振る。

「…僕は全然…。でも、姉はピアノ、上手でした。」

「姉? 真咲、お姉さんいるの?」

初耳な内容にちょっと驚いた。真咲にお姉さん…? 想像してみる。きつと、めっちゃめっちゃ可愛いぞ…。うわぁ紹介してくんないかなあ…。

…でもちよつと待て。上手でした、って、過去形じゃん。…あ、ひよつとして、悪いこと聞いちゃったかな…。

瞬間的な妄想(?)のあと、我に返って真咲を見る。少し寂しそうな表情…やっぱり、あんまり触れないほうがいい感じだな…。

「姉は…三年前に失踪して…まだ、行方がわからなくて…。」

ほらやっぱり。

「…ごめん、悪いこと聞いたな。」

謝ると、いえ、と真咲がはにかんで笑う。由のピアノの音が、静かに消える。

ぱちぱちぱち、真咲が拍手をすると、由が照れ笑い。照れ隠しのように、オレに話し掛ける。

「いつちゃん、シャワー浴びるんだっけ？」

「ああそうだった。シャワー浴びてから、また出掛ける。聖マリアの女の子たちと待ち合わせしてるんだ。」

そうそう、今日まつすぐ帰ってきたのはそのため。聖マリアの制服可愛いから、みんな可愛く見えちゃうんだよね。

「あ、じゃあ駅行くよね？　よかったあ。真咲くん、一緒に行けばいいよ。」

「…真咲どっか行くの？」

由の台詞を受けて真咲に問う。真咲が頷いて、答える。

「湯浅さん…あ、僕の後見人なんですけど、こっちに来てるらしくって…ロイヤルガーデンホテルまで…」

「ロイヤルガーデン…ならオレの待ち合わせ場所と同じ方向だよ。おっしや、連れてってやるよ。その前にシャワーだけ…。ちよっと待ってな。」

オレは鞆を再び持って、自分の部屋に戻る。着替え持って、シャワーシャワー、っと。鼻歌まじりで階段を下りる。

洗面所入ってさあシャワー浴びてすっきりするぞお！ と制服のシャツを脱ぎ捨てる。これだけでもけっこう涼しい。シャワー浴びたらもつと極楽だつ。

「ただいまあ！ あっちーっ…シャワーシャワー！」

「ああっ、りっちゃん待って！ シャワーは…」

なんか騒がしいなあ…と思いつつズボン脱いでトランクスに手をかけた瞬間。

ボタンつつっ！ ドアの開く音。

「うわわわあああつ！ 入ってるなら入ってるって言えよっつ！！」

ボタンつつっ！！！！

なんなんだよっ！ 人が気持ちよく服脱いでんのに邪魔しやがつて！ 仕返し（？）してやるっつ！

「きゃああああつつつ律のえっちいいいっ！！！！ 覗いたわねっ！！」

「覗いてねえし見たくもねえよっ、バカ逸！」



ばすんっつ、洗面所のドアを蹴る音と共に、律が怒鳴った。

### #3 ヒトカゲ (4)

わあわあ律と喧嘩しながら、真咲と家を出たのは既に待ち合わせ時間の二十分前。ここから駅まで十分で…電車すぐ来てくれればなんとか間に合う、ってところか。ビミョーだな。

ま、真咲が一緒なので駅までダッシュ…ってわけにもいかないし、せつかくシャワー浴びてスッキリしたのに、走って早々に汗かきたくない。ので、何故か女の子ペースの真咲の歩調に合わせて、ゆっくりめに歩いている。

「智史さんて、彼女いないって言ってたじゃないですか。」

オレが無言で歩いていたからか、突然真咲が話し始める。

「うん。間違いないよ、それは。」

「…でも、好きな人はいたりするんですかね？」

真咲がオレの顔を見上げる。ちょこつと首を傾げて…うん、女の子だったら、なんて可愛い仕草。失踪した姉、どこにいるんだっ。

「…逸さん？」

ああ、いかんいかん、いらんこと考えてしまった。反省して、真咲の問いに答える。

「うん…それも聞いたことないなあ。ほんとにあいつ、そういう

ことには疎いんだ。」

「あ、でも…：そういえば逸さん、昨日智史さんに“ちさちゃん”って名前言っていましたよね…：？」

ちさちゃん…：多分それはCHISAちゃんのことだろう…：。昨日言ってた覚えはあんまりなかったけど、よくそれで智史をからかっているので、きっと昨日も真咲の前で言ってたんだろう。真咲、記憶力いいなあ。

「“ちさちゃん”て、智史さんの好きな人じゃないんですか？」

また真咲がオレの顔を見上げて問い掛ける。あんまりその表情が可愛いので、思わず笑ってしまった。ほんとに…：女の子みたいに、智史のこと好きなんだなあ真咲は。ちょっとそれってヤバイ感じもするけど、まあきつと純粋に憧れなんだろう。うん、そう思っておいたほうがいい気がする。てーかきつとそうだ。

オレはCHISAちゃんのネタばらしを始める。

「CHISAちゃんてのは、真咲、Diana To Moonって知ってる？」

「…：“Take it easy”とか歌ってる…」

「そうそう。そのDiana To Moonの、ヴォーカルのCHISAちゃんだよ。…：今から話すことは智史曰く内緒なんだけど、CHISAちゃんは、短かったけど稜星の生徒だったんだって。残念ながら当時オレは知らなかったんだけど、智史とCHISAちゃんは同じクラスでさ。…：詳しいことは智史が話してくれないからわ

からないけど、智史は当時のCHISAちゃんの歌声に感動して、音楽関係の仕事をしている智史の叔母さんに紹介した。…それがCHISAちゃんのデビューのきっかけ。」

智史とCHISAちゃんの関係について、オレが知っているのはほんとにそのくらい。CHISAちゃんが智史の叔母、紫さんをマネージャーとするDiana Tomoonのヴォーカルの一人としてデビューして二年、ちよくちよく智史はその事務所：KMMミュージックプロダクツに顔を出したりしているので、からかっているだけ。ひよっとしたらもう一人のヴォーカルのSHIYAちゃん狙いだったりするのかもしれないけど、とりあえずCHISAちゃんの話題を出すと智史が大急ぎで否定するのでおもしろくって。

「そうだったんですか…。それで、智史さんはDiana TomoonのCHISAのこと…あ、智史さんが恩人ってことは逆でしょうか？ CHISAが智史さんのこと…？」

「さあね。わかんないけど、たまに事務所行ったりしてるのは事実だよ。一昨日だってさあ、一人でライブ行ったりしてさ。ずるいつたら。」

「ぶーぶー言ってるうちに駅に到着。切符買ったりして、とりあえず智史とCHISAちゃんの話題はそこで終わった。電車に乗る頃には、もう違う話題になっていた。」

### #3 ヒトカゲ (5)

それから二・三日経った土曜日。律は栄子ちゃんちに遊びに行ってるし、由も友達とショッピングに行くとかで外出中。たまたまオレと真咲しか家にいない午後。

「真咲い、オレコンビニ行ってくるけどなんか欲しいもんあるか？」

さすがにRPGにも飽きてきて、気分転換に散歩がてら冷たいものでも買いに行こうかなあと思って真咲に声をかける。ソファで行儀良く読書中だった真咲が本を閉じる。

「あ、一緒に行ってもいいですか？」

そういうわけで二人してコンビニに行こう、と家を出ようとした時だった。

「逸！」

玄関に鍵をかけてると、後ろから聞き慣れた声がした。智史だ。

「智史さん、どうかなさったんですか？」

あんまりいつになく血相変えた声だったので、真咲もオレもちよっとビツクリ。あれ以来続いているストーカー被害(?)に、新展開でもあったか？

乱れた息のまま、智史が切れ切れに話し始める。

「さつき…、いきなり紫さんから電話があつて…、浜田さん宛てのファンレターに…、変な脅迫文が、入ってたつて…。」

「…浜田さん？ ああ、CHISAちゃんの本名、浜田千紗ちゃんだったつけ。」

誰のことかと思つたよ。CHISAちゃんならCHISAちゃんつて、言つてくれればいいのに。

そんなことより。

「…CHISAちゃん宛てのファンレター？ …で、なんで智史が血相変えてうち来んの？」

智史の行動が珍しく読めず、暑いのも手伝つてちよつとイラつき始める。息もだいぶ整つた智史が、そんなオレに気付き、“変な脅迫文”の補足をする。

「…『大石智史さんに、近づかないで』つて…ベタだけど、剃刀まで入つてたつて。自分の恋愛のトラブルこっちに持つてくんなつて、紫さんに怒鳴られた。…おれと浜田さんは別に何もないのに…つてかなんでおれに近づくななんて浜田さんのとこに手紙行くわけ？ 封筒薄いピンク色だったつていうし…しかも事務所の郵便受けに直接入れてあつたみたいだし…これもやっぱ例のストーカーの仕業？」

間髪いれずに一気に話し切る智史に、思わずあつけにとられてしまふ。智史のキャラじゃないから、すぐに返事ができなかった。

「…オレに聞くなよ。でも、同一犯の可能性は高いよな。」

「あ！」

今まで黙ってオレと智史の会話を聞いていた真咲が、いきなり大声をあげた。大きな目を、ますます大きく見開いて、オレに言う。

「逸さんこないだ一緒に駅に向かつてる時に智史さんとDiana To MoonのCHISAの関係について話してくれたじゃないですか。ひよつとしてあの話を例のストーリーカーが聞いてたんじゃ…。」

「…真咲に話したの？ 浜田さんのこと。」

「えへ、話しちゃった。」

ぺろっ、と舌を出して笑って誤魔化す。智史の顔がちょっと怒ってる？ いいじゃん別に真咲に話すくらい…。

「…おれの後つけたり手紙くれたりするだけならまだ我慢もできるけど…他の人に迷惑かけるなんてことは…やっぱり許せないよ。特に浜田さんは芸能人なんだし…そもそも何でもないんだし…。今回のこの件については、逸、お前のせいだ。」

ええっ、オレのせい？ そんなこと言われてもっ…。

「で、でも逸さんに尋ねたのは僕ですから…僕のせいです。ごめんなさい。」

智史に抗議しようとしたらその前に真咲が謝ってた。深々と、頭を下げて。さすがに智史も怒る気にはならなかったらしく、真咲の

頭を優しくポンポン、と軽くたたく。そしてオレにもすまなそうな顔をする。

「…おれのほうこそ、ゴメン。逸のせいでも、真咲のせいでもないよ。悪い、ちょっと気が立ってた。」

ふう、と智史は溜息をつく。

…あの智史がこんな風に冷静さに欠けるとこんなんで、ほとんど見たことがない。これはちょっと…由々しき事態？ でもどうしようってアイディアもないし…。

しばらく三人沈黙。一分くらい続いたかな。そして智史がいつもの調子に戻ったようにオレたちに話し掛けて、その沈黙は終了した。

「…あ、ゴメン。どこか行く途中だったんじゃないのか？」

「ああそうだった。コンビニまで。」

「オレも行くよ。お詫びに、アイスでもおごる。」

「やったあ！ ハーゲンダッツ！…！」

今までの空気を吹き飛ばすように、明るく喜んでみる。真咲もやっとホッとした表情を取り戻す。

そしてさあ三人でコンビニまで行きますかあ、と歩き出した時だった。



不意に智史の足が止まる。

「どした…？」

「シツ…後ろに、人の気配がする。」

そう言うや否や、智史はくるりと踵を返してダッシュした。さすがは稜星の名スプリンター、速い速い。

…なんて感心してる場合じゃない。オレも真咲も、慌てて智史の後を追う。…例のストーカーの彼女が…？ 智史に追われて、捕まらないわけがない。智史より足の速い女の子なんて…普通いないぞ。

智史を追いかけて角を曲がる。と、智史が逃げた奴を捕まえたところだった。

…え、男？

智史が腕を掴んでいるのは、女の子なんかじゃなかった。このクソ暑いのにスーツ姿の、三十代半ばのサラリーマン風の男。智史も捕まえてはみたものの…と困惑している様子。

そこにやつとオレたちに追いついた真咲が息を切らせながらやってきて、息を切らせながら驚きの声を発する。

「…湯浅さん！」

呼ばれた男は真咲を見て、息を整えながら会釈をした。…湯浅さん、て…真咲の後見人の？

智史が湯浅さんの腕を離す。すみません、と謝ると、湯浅さんはハンカチで汗をぬぐいながら苦笑いをする。

「…連絡せずに訪れてすみません。真咲様がお世話になっている新藤様にご挨拶をと思い、お伺いしたのですが、家を出られるところだったようで…」

なるほど、湯浅さんは手になにやらお土産らしき紙袋を持っている。やったぁお土産っ！

…ではなくて。

「そんな、ご挨拶なんて…。てか今両親とも仕事で家にいませんし。」

「そうですか、そうですよね。やはり事務所にお伺いしたほうがよかったですね。」

湯浅さんは優しくそうに目を細める。いい人そうな…感じの人。真咲の後見人だもんなあ…なんとなく、納得。

「湯浅さん、何か進展でも？ 僕に話があったから、こっちに寄ったんじゃないんですか？」

真咲が尋ねる。と、湯浅さんは頷く。

「…じゃあ真咲、湯浅さんとウチで話しなよ。オレたちは邪魔にならないようにコンビニ行つてくつから。」

遺産関係の難しい話なんだろうと思った。あんまり人に聞かれた

くない話に違いない。オレはそう言って、真咲に家の鍵を渡して、智史を促す。

「あ、真咲なに買ってきて欲しい？」

「すみません逸さん、気を遣っていただいて…。じゃ、アロエヨ―グルト、お願いしてもいいですか？」

「おっけい」

そしてオレと智史はコンビニへ、真咲と湯浅さんはウチへ向かう。

…真咲と湯浅さんが何を話したのか、もちろんオレは知るわけがない。

### # 3・5 モノローグ

深夜零時過ぎ、あたしは誰もいない家に帰ってくる。当たり前のことだけど、真っ暗で、静寂が、しい…んと耳から耳を突き抜ける。耳を澄ましていると、外から雨音が、静かながらに聞こえてきた。

…そうか。雨だから、月明かりがないから、ますます暗く静かに思えるんだわ。

照明のスイッチを入れ、部屋を明るくすると、散らかったままの部屋が視界に入るけど、無視してソファに雨に濡れてしまったバッグを構わず投げ捨てる。

ふう。短く嘆息してあたしは冷蔵庫からミネラルウォーターを出して、ペットボトルから直接飲む。ごくごくと一気に飲みほすと、乾いていた喉が潤う。…喉は潤うけど、なんとなく、あたしの心は潤わない。強風に吹きつけられた皮膚のように、がさがさと、乾いたままだ。雨のせいで湿度は高いはずなのに…あたしの体だけ、砂漠のようだ。

空のペットボトルをゴミ箱に捨て、さっきバッグを投げ捨てたソファにどかっとな身をゆだねる。

…疲れた…。

しばらく目を閉じて倒れこんでいたけど、つけっぱなしだったパソコンがメールを受け取ったようだ。電子音に反応してゆっくりと体を起こす。そういえばしばらくパソコンのメールチェックしなかった。…面倒くさいけど、処理しなきゃ。

パソコンの前のスツールに座って、受信トレイを開く。未読メールは二百件近い。そのほとんどが広告メールと迷惑メール。その中から、稀に必要なメールを探すのは、けっこう労力があるので、ついつい後回しにしてしまう。

…未読メールの中から、あたしはそのメールを見つけた。

件名は、“先日 の件”。…それを見た途端、乾いた砂漠の心に、オアシスか、あるいは蜃気楼か、幸か不幸か紙一重の複雑な感情が発生する。安堵なのか胸騒ぎなのか、何故か少し緊張しながら、あたしはそのメールを開く。

『最近携帯繋がらないけど、忙しいのかな？

…まあ今回も添付あるからPCのほうが都合よかったんだけど、この前の写真、あまりはつきりしてなかったね。わかりにくかった？

今度はちゃんと撮れてるから写真を送ります。

間違いない？

確認したら、メールか電話をください。

香居の誕生日に間に合うように、手に入れるからね。』

…一方的な短い本文に、あたしは苦笑いするしかなかった。…なんていうか…さすがあの男の血を今この世にいる誰よりも濃く受け継いでいるだけある。その一方的さもそうだけど…、あたしが“お願い”した、どう考えても無理難題な“探し物”を…いつたいどん

な手を使って見つけ出したのか…。

…あの男の血筋…、か。

あたしはその言葉を頭の中で繰り返して後悔する。苦笑いが、笑いが消えて苦いだけになる。あたしにも、その血は間違いなく流れているんだった。

自虐的な気持ちのまま、三個ついている添付ファイルの一個目を開く。

…あれ？

あたしは自分が見間違えたかもしくは勘違いかと思って、次の添付ファイルを開ける。そしてその次も。

…違う。

何度も何度も三つの添付ファイルを開けては見、開けては見てみたが、どれも違う。…あたしが頼んだ“探し物”は、これじゃない！

あの男の血筋だもの、狙った獲物を間違うはずなんかない…わけがわからなくなつてあたしはそのメールを閉じ、前に来たほうのメールを見してみる。確かに前のメールには、不鮮明ではあつたけれど、あたしの“探し物”が写ったデジカメ映像が添付されていたはず…。

前のメールを開けて、添付ファイルを確認する。

…目を疑った。…間違えたのは、あたしのほう？

不鮮明なデジカメ映像には、両方、写っていたのだ。あたしの“探し物”と、…その横に、新たに来た三個の添付ファイルに写っているのと、両方…。よく見ると、どちらかと言うとあたしの“探し物”じゃないほうにピントが合っている。

あたしの、ミスだ。あの時は“探し物”の映像を目の前にして、舞い上がっていたんだ…。あたしは片方しか見てなくて、時間もなかったし、すぐに『そう！これ！』と返事を送ってしまった…。

自分の注意力のなさに落ち込んでいる場合じゃない。早く伝えなきゃ。違う、こっちじゃないって。

慌てて携帯をバッグの中から取り出して登録メモリを捜す。でもふと手を止める。今何時…？くるりと首をひねって真後ろの壁にかかっている時計を見る。…午前一時を回ったところだ。…さすがに、電話は非常識よね。

少し落ち着きを取り戻して、仕方なくあたしは返信をクリックする。

…さつきより雨足が強くなってきている。メールを打ちながら、雨の音をBGMにしていると、ほんとに孤独を感じてくる。メールの向こうに相手はいるけど、今現在、あたしは独りだ。

もしも本当に、この“探し物”が手に入ったら。

…こんな雨の夜も、孤独を感じずに済むのかもしれない…。





#### #4 マチブセ (1)

三日ほど前の夕方から降り出した雨は、時折激しくなったり弱くなったりするものの、止むことなく、降り続けている。ちよつと前に梅雨明けしたはずなのに、また梅雨に逆戻りといった感じた。

智史のストーカーは、CHISAちゃんに脅迫文を送りつけて以来、何の動きもない。ずっと雨が続けているからか、後をつけられているという気配も、智史は感じないという。

「ああん誰かドア開けてーっ。いっちゃんだよー。」

いつものように女の子たちからのプレゼントで両手がふさがった状態で生徒会室の前で叫ぶ。今日の収穫は心なしかいつもより少ない。ほんとは片手で持とうと思えば持てるくらいの量だ。でもクセ(?)でつい叫んでしまった。

ガチャ。ドアが開く。開けてくれたのは、智史だった。

「サンキュ。」

智史に笑いかけていつもの自分の席に着く。…今日もオレが一番最後か。律と栄子ちゃんは今既に弁当を食べていた。

「あれ、なんか今日は荷物少ない？」

智史が座りながらオレに尋ねる。あれ、智史…今日はなんか機嫌が良さそう。いつも雨の日が続くと走れないストレスが溜まってきてあんまり機嫌よくないのに。

「あ、やっぱそー思う？ 雨だからかなあ…。」

「人気落ちてきたんじゃない？」

唐揚げをかじりながら律がにやにや笑う。くーつつ、にくたらしいっ！

「んなわけないだろっ、いったいオレを誰だと思ってるんだっ！  
稜星ナンバーワンの…。」

「スーパーアイドル新藤逸、ね。はいはい。」

くうううつつっ！！！ 台詞とられたっ！ ますます腹が立つ  
うっ！

ふるふるふる…と拳を震わせていると、智史がぼんぼん、とその  
拳を軽く叩く。

「まあまあ、とりあえずメシ食おーぜ。な。」

にこにこにこ。…うーん、やっぱり智史、今日は妙に機嫌が良い。

「…智史、なんか、あった？」

笑顔の智史に尋ねてみる。と、律も栄子ちゃんもオレと同じ表情。

「逸もそう思う？ やっぱり。」

「さっきから聞いてるのに、大石くんたら全然教えてくれなくて…。」

「  
なんか、あった？ って…ついこないだ逆の意味で同じコト聞いたつてのに。先日の憂鬱な表情が嘘のようだ。それほど晴れ晴れした表情の智史。」

…って、思ってみてから気がついた。あ、ひよっとして…。

「うん、実はさ。みんな揃ってから話そうと思ったんだ。」

智史はポケットから何かを取り出す。まるで既視感…表情はまったく違うけど、この前と同じ光景。

取り出したのはピンクの封筒。予想通りのものが出てきた。

「今朝またこの手紙が郵便受けに入っててさ、またかよ、と思って警戒して開けてみたら…見て。」

智史が中の便箋を広げる。オレと律、栄子ちゃんはその便箋を覗き込む。

『ごめんなさい。もう、しませんから。』

たった一行、同じ女の子っぽい手書きで、そう書かれていた。

「…終わっただってコト？ えらい急にまた。」

律が目を上げて首をかしげる。勝手に始めて急にやめます、なんて人騒がせな…。だったら最初っからそんなことすんなって。律の思ってることはきつところ。オレも同じ意見だから。

「うーん、何でかわかんないけど、まあ、一件落着かな、なんて。」

智史がのほほん、と言う。コイツ…この前はすごい剣幕でオレんちにまで怒鳴り込み(？)に来たつてのに…。まるで別人…。

あ、そうか、それでだ。きつとそれで…。

「きつとアレだよ。智史、こないだオレんちに来たじゃん。ほら、CHISAちゃんとこに脅迫文が来たつて…あの時のオレらのやりとりを、ストーカーちゃん聞いてたんじゃね？ 智史すごい激怒してたから、恐れをなして…？」

「…あの時の気配は湯浅さんじゃなくてやっぱりストーカーだった、つて？ …かもな。それはそうかも。」

オレの推理(？)に智史も納得。てーかもう済んだことはいいよ、みたいな穏やかさで智史は頷く。ほとんど既に他人事状態に近いぞ。

「いいなあ大石くんは早いトコ解決しちゃって。あたしなんかもう三週間目に突入だよ。」

はああ、と大きな溜息をついたのは栄子ちゃん。そうか、栄子ちゃんのストーカー問題は、まだ解決してないんだ。

「だから今度オレも協力するから捕獲作戦決行しようって言ってる

じゃん。彼氏に頼むのやなら、こいつらに手伝わせりゃいいし。」

律が栄子ちゃんに言う。え、そんなおもしろそうな話浮上してんの？ わーいやるやるっ！

「別に頼むのが嫌ってわけじゃないんだけど…。うん…そだね、話してみる。」

栄子ちゃんが控えめに頷く。

智史のストーカー問題が終結したので、次は栄子ちゃんのストーカー問題を解決させなきゃねー…と、この日の昼休みはそうみんな話していた。…その時は、まさかそんなことが起ころうとは、まっつっつたく考えてもいなかったのだ。

#### #4 マチブセ (2)

いよいよ夏休みまであと一週間を切った。待ちに待った夏休み…生徒全員、先生ら曰く、浮き足立ってる。当たり前だ。オレもわくわくしてる。

そう、わくわくしてる。…はずなのだが。

この夏は、なんかちょっとおかしい。例年なら、オレの夏休みの予定を女の子たちが躍起になって聞きに来るのに、今年はなんか活気がない。放課後誘われることも、何となく減ってきているような気がする。

おかしいなあ…まさか、まさか律の言ったとおり、人氣が落ちてきた？ まさかそんな、ねえ。長年稜星でスーパースタイルやってるけど、そんなことはありえない。

「…自信満々に言い切るなよ…。」

そう律は呆れ返って言ったけど、だってありえないって思うんだもん。仕方ねえよ。

今朝もいつもどおり予鈴ギリギリの時間に靴箱で靴を履き替えていると、女の子たちに声を掛けられる。ほら、やっぱり人氣落ちてなんかないじゃん。気のせいだったんだよ。さあて、今日の放課後のお誘いか、夏休みの予定か、なんでしょう。

「逸さまおはようございます。あの、ちょっとお話が…」

ちよつと前に今日の放課後一緒にカラオケ行こうって約束してた真理ちゃんと奈々ちゃんと芹香ちゃんだ。今日の約束の時間変更かなんか？ なんかいつものきゃぴきゃぴ感が見受けられないのがちよつと気にはなるけど…。

「おはよう。なに、どうしたの？」

気にせずいつもどおりのキラキラ輝くイケメンスマイルで答えると、代表して真理ちゃんがちよつと言いにくそうに話し始める。

「あのお…今日の約束なんですけど…」

「うん？ 時間変更？」

「いえ…ちよつと、予定が入っちゃって…」

真理ちゃんが奈々ちゃん、芹香ちゃんに目配せをする。しばらく三人、もじもじと言葉を濁しながら、次の台詞を出し渋っている。

オレが三人をかわるがわる不思議そうに見ていると、奈々ちゃんが溜息まじりにとうとう口を開いた。

「…今日のカラオケの約束、キャンセルしたいんですけど…」

きゃんせる、…キャンギャル…は雑誌のモデルさんだよな。…ランドセル…とはだいたい遠いし…。…きゃんせる…きゃんせる…キャンセルうつ？？？

「すみません！」

オレがボーっとしてると彼女たちは揃ってそう言っ  
て、逃げるよ  
うに去って行った。

…まさか、ホントに人気、落ちてる…？

固まってしまったオレの耳に、ぼんやりと本鈴のチャイムが届い  
た…。



#### #4 マチフセ (3)

それから四時間目まで、どんな授業をどんな風に受けたかてんで覚えがない。頭の中は今朝のショックと、「何で？」ってクエスチヨンマークの嵐。

「逸？ 授業、終わったぞ。生徒会室行かねえの？」

隣の席の岩井に肩叩かれて、やっと気がついた。ああ、四時間目終わったんだ…。

「ん…ああ、行く。」

のろのろと立ち上がって、ふらふらと教室を出る。

「大丈夫か？ 逸、何か変じゃない？」

「…逸の周辺、妙に静かだしな…。」

「いつもなら女の子たかってんのになあ。」

教室から、クラスメイトの男どものそんな声が耳を通り抜ける。

…ああ、やっぱ、ハタから見てもそうなんだ…。余計ふらふらになつてくる…。

…廊下を歩いていても、階段下りてても、女の子が寄ってこない。それどころか、ちよつと離れたとこでなんかひそひそ話してる気もする。

…何？ オレ、なんかした？

どおんと重くて暗い空気を背負いながら、やっとの思いで生徒会室に着いた。いつも女の子たちに呼び止められているもらったりしてここまで来るのに時間かかるけど、今日は誰にも声かけられずにここまで来てしまった…。かかった時間はいつもより長かった気がする…。

ガチャリ。…ぎいいい…。

「うわ、ビックリした！ なんだよ逸っ！ 亡霊がやってきたかと思っただじゃねえかつ。」

いつもは大声あげてドアを開けてもらうのに、自分で、しかもめちゃくちゃ陰気に、オレが入ってきたので、律が飛びのいて驚く。

「逸くん、今日は手ぶら？ …めずらしーね。」

「…なにそのどんよりした空気…。梅雨の中心にいるみたいだよ。」

栄子ちゃんと智史もオレの様子を見て眉をひそめる。オレはろくに返事もせずに、惰性で自分の席にたどり着く。そして、よろよると椅子に腰掛ける。

オレ以外の三人はオレを訝しい目で見ている。…しばらく無言が続いた後、ようやく口を開いたのは、律だった。

「…なんか、あった、の？」

…こないだからその台詞ばかりだなこの生徒会室。そんなことをぼんやり思いつつ、オレは大きな溜息を吐く。一呼吸ついてから、やっと言葉を口にする気力が出てきた。

「…律の言う通り、オレ…人気、落ちてきたのかも…」

はあ？ と三人、顔を見合わせる。オレの言葉を理解しきれていないみたい。無理もない。オレだってまだ、わけわかんない。

「…実は、さ…」

暗い空気のまま、オレは今朝からのことをみんなに話す。気分がすぐれないので、すごく時間がかかった気がする。

オレの話を、三人は弁当も食べずに真剣に聞いてくれていた。そゆとこ、こいつらのすごいところだと思う。口に出して言わないけど、友情とか信頼とか、そーいーう感じかなあ、なんて。

「…うー、ん。」

話し終わると智史が腕組しながら唸った。

「…栄子ちゃんのストーリーカー問題といい解決したけどおれのストーリーカー事件といい、最近生徒会、災難続きだなあ…」

「なんにもないのオレだけか…。てかなんで急にそんなことに？ 逸、女の子のタコ足配線、ショートしたんじゃないの？」

「…タコ足じゃすまないでしょ逸くんの場合…。ムカデでも足りなかったりして…」

「…栄子ちゃん、言い過ぎ。」

散々な言われようなのに反撃する元気もない…。再び大きな溜息が自然と出てくる。

「なんも心当たりないからわけわかんないんじゃない…。」

言ってて涙出そうになる。こんなにへこむこともなかなかないぞ…。ぐったり、机の上に突っ伏してしまう。

その時だった。

「逸先輩っ！ 逸先輩いますかっ？っ？！！」

ボタンっ！ ノックもなしに突然ドアが開いて、大騒ぎで志信ちゃんと比呂美ちゃんが生徒会室に入ってきた。ビクリして急に体を起こしたもんだから背中が引きつった。い、痛い。

#### #4 マチブセ (4)

「どうしたの志信ちゃん比呂美ちゃん、そんなに慌てて…。」

オレの代わりにきよとした表情で律が問う。志信ちゃんと比呂美ちゃんはどこから走ってきたのか、苦しそうに顔を歪めながらかなり激しく荒れていた息を整えて、細切れに話し始める。

「逸先輩…、昨日、…理奈たちと…カラオケ…行き、ました？」

志信ちゃんの台詞を頭の中でもう一度繰り返す。そうしないと今のオレのボーっとした頭は反応してくれない。…昨日…？ 理奈ちゃんたち…、カラオケ…？

志信ちゃんと比呂美ちゃん、そして律、智史、栄子ちゃんがオレに注目。オレが口を開くまで…昨日の記憶をひっぱり出すまで、三十秒ほどかった。

「…行つた、けど？」

うん、確かに行つた。理奈ちゃんと聖子ちゃんとのぞみちゃんと…三人連れてカラオケ行つたのは間違いない。でも、それが？ なんで志信ちゃんたちが血相変えて飛んできてるわけ？

わけわかんない顔…オレだけじゃなく、律も、智史と栄子ちゃんも。みんな疑問顔で、だいぶ普通の呼吸に戻ってきた二人を見る。二人はやっぱ…と言わんばかりに頷きあつてる。

代表して話し始めたのは比呂美ちゃんだ。

「昨日理奈たち、逸先輩と別れた後…それぞれ襲われてるんです。」

「襲われてる…って？」

「はい。三人ばらばらになった後みたいなんですけど…、理奈は駅のホームから突き落とされて、聖子は別の駅の階段で突き落とされて、のぞみは信号待ちしてた時に押されて道路に…。幸い三人とも怪我はすり傷程度で、軽かったらしいですけど…。」

「他にも、最近逸先輩と遊んだ帰りにそういう被害に遭ってる子がいて…。噂では、後ろからカッターで切りつけられたりとかした子もいるって…。誰が犯人かはわからないんですけど、恐らく逸先輩のファンの一人かと…。」

「犯人の姿を誰も見てないから、逸先輩が好きで亡くなった女の子の霊の仕業だって言ってる子たちもいます。」

比呂美ちゃんと志信ちゃんが交互に話をする。話を聞いていて、何となくわかってきた。最近人気が落ちてきたと思っただ理由は…。

「…つまり、逸と遊ぶと襲われる、ってことか。それで女の子たちが逸のことを避け始めた、と。」

オレが思ったことを智史が綺麗にまとめてくれた。

「じゃ、逸の人气が落ちてきたからじゃないんだ。よかったじゃん。」

律がオレの肩をたたく。よかったじゃん…よかった、か？ まあオレがなんかしたから、ってわけじゃなさそうだけど…。

「逸くんのストーカーってわけね…。独り占めしたいから、他の女の子を攻撃してる…。」

栄子ちゃんがそう言うのと、志信ちゃんと比呂美ちゃんが頷く。

「他校の子たちからも情報集めてみます。…いつ直接犯人が先輩に近づいてくるかわからないんで、気をつけてくださいね。」

「でも、情報集めてみるって志信ちゃん…。」

律がちよつと心配そうに志信ちゃん、そして比呂美ちゃんを見る。律の思いはオレにもわかる…ってかオレも同じだ。そんなこととしてたら、志信ちゃんたちも狙われるんじゃないか？話を聞いてるとそのストーカー、かなり危険だぞ…。

「あたしたち、逸先輩のファンクラブの代表なんです。ウチの学校だけじゃなく、他校のファンクラブも仕切ってますから、情報はかなり入ってくるんです。」

「それに逸先輩ファンクラブの間には…ううんファンクラブの会員じゃなくても、逸先輩を独り占めしない、逸先輩は公共のモノ、っていう暗黙の掟があるんです。それを破るなんて…ファンクラブの代表者として、許せません！」

…知らなかった。そんなファンクラブがあることも、暗黙の掟（えらく大袈裟だな…）があることも。なんかオレってすごい…？いや、すごいのは志信ちゃんと比呂美ちゃん…？ウチの学校だけ

じゃなくて、他校も仕切ってるなんて、ただのきやるんと可愛い中学生じゃなくて…見かけによらずかなりオオモノ…？

「…わかった。じゃあ、二人には情報集め、お願いしようよ。」

智史が静かに言った。え、でもそれじゃ二人が危なくないか…？

オレが智史を見る。と、同じ表情で律も智史を見ていた。鏡のように、眉をひそめて、智史の次の台詞を待つ。

「情報集めて、動くのはおれたちだ。おれや栄子ちゃんの時とは違う。もう既に先制攻撃されてるんだ。こっちから動いたっていいだろう？」

…いつもは温和な智史。でも本気になると、怖いんだよな…。

でも基本的にはオレも智史の言い分には賛成。このまま黙って見ているわけにはいかない。オレのファンなら…オレがどうにかしなきゃ。ファンの子たちを、危険な目になんか遭わせるわけにはいかない。

「智史の言う通りだ。オレのファンは、オレが守る。」



#### #4 マチブセ (5)

「聞きましたよ逸さん。逸さんのファンの子たち、狙われてるんですって?」

家に帰るやいなや、玄関先まで真咲が走ってきてオレに問う。大きな目が心配そうに曇ってる。情報早いなあ…噂って怖い…。…じやなかった。真咲は志信ちゃんたちと同じクラスだった。

「…智史のストーカーが解決したと思ったたらコレだよ…。勘弁してくれ、って感じ。」

はあう、大きなため息をつきながら靴を脱ぐ。

「もうすぐ夏休みだっていうのに、当分女の子たちと遊べないよ…。あ、真咲も私服ん時はオレと一緒に歩かないほうがいいかも。」

「え、何ですか? 僕女の子じゃないし…。」

「いや、私服なら女の子に間違われるよ、絶対。」

あんまり真咲が深刻な顔してたんで、からかってみる。すると真咲の表情が緩んでぶう、と膨れっ面になる。それを見てオレは笑ってみせる。…真咲は他に大変な問題抱えてるんだから、オレのことで余計な心配はかけさせたくない。よかった、とりあえず笑顔に戻った。

二人揃って居間に向かおうとすると、真咲の携帯が鳴る。

「あ、すみません。」

そう言つてオレに謝つて真咲は階段を昇つて自分の部屋に向つた。…湯浅さんからかな。最近、けっこう連絡多いみたい。遺産相続、もめてんのかな。

一人で居間に入ると、律が先に帰つてきていた。

「おう、おかえり。」

ソファからオレに向かつて何かを投げた。とつさに両手で掴み取ると、キンキンに冷えた缶コーヒーだった。しかも新発売でオレがまだ飲んでないヤツ。

「さんきゅ。」

…律なりの気の遣い方。微笑んでみせると、同じ表情が返つてきた。

「…志信ちゃんたちから、あれからメールあつた？」

オレが鞆を置いて律の横に座つて缶コーヒーを飲み始めると、律が尋ねる。

あれから…。昼休み以降、何件か志信ちゃんと比呂美ちゃんからメールは入ってきている。ポケットから携帯を取り出してみると、二人から合計十件をゆうに越えるメールが届いていた。

「未読メールばっかじゃん。」

横から携帯を覗き込んだ律が言う。そうなんだよな…一・二件目を通したけど、なんか犯人がすごい卑劣で腹が立つてくるので、残りはまだ見てなかったんだ。

「だってさ…。なんか、見たくなってきた。」

「どれどれ。」

コーヒーを飲み干してうなだれると、律がオレから携帯を取り上げて、オレの代わりにメールを見る。…しばらくメールを読んでみて、律はうーん…と唸る。

「…確かに、やり過ぎ…ってか、度を越してる。平気で犯罪じゃないのか、コレ。」

そう言って、オレに携帯を返す。

…律の言う通り、犯罪だと思う。後ろから突き飛ばしたり制服汚したり、自転車パンクさせたり…。しかも誰も目撃者がいない。満員電車の中とか、人込みとか、人の目につきにくいトコでの犯行。…誰かが一人、それを見て笑っている。女の口はみんな可愛くて好きだけど…そんな女にオレは好かれたくない。許せない。

しばらく二人、そのまま黙ってしまった。

…犯人を捕まえて、オレが説得したら、どうにかなるんだろうか？ オレのファンの子なら…オレが迷惑してるって言ったら、止めてもらえないだろうか…？

そのとき突然音楽が鳴った。携帯の着メロ…鞘根虹香の“つきのががみ”。一瞬オレの携帯かと思ったけど、今手に持っている携帯からの音ではない。

「あ、栄子からだ。」

律の携帯だったらしい。…紛らわしいなあ。

「お前着メロ“つきのががみ”？ オレと一緒にじゃん。変えろよ。」

「やだよ。…あ、もしもし？」

短く否定してから、律は電話に出る。栄子ちゃんから？ なんだ。ちよつと気にはなっただけど、オレはまだ見てなかったメールを見えることにする。

…見れば見るほど、嫌悪感。気分悪い。

はあ…と大きくため息をついてソファにどかっとな腰を下ろす。窓から入ってくる日差しがオレンジ色に輝いている。オレの心とはウラハラに、綺麗な夕焼けだなあ…。

何となく壁掛け時計を見える。午後六時ちょい前だ。

…時間を確認して、はた、と気付く。…あれ、そういえば、由は？

今日はピアノのレッスンの日はずけど…いつもこの時間なら、どんなに遅くても家に帰ってきているはずの由が、今日はいない。

…変な胸騒ぎ。携帯を、じっと見るめる。…ま、さか？

ちょうど栄子ちゃんとの電話を終えた律が、オレの表情に気付く。

「…どうかしたか？」

「…由。今日、帰り遅くないか？」

オレが携帯を見つめたまま問うと、律は壁掛け時計を見上げる。

「そう言われてみれば…ちょっと、遅い、か？」

オレと律、同じ表情で顔を見合わせる。考えていることは恐らく同じ。…できれば外れていて欲しい考え…。

…まさか…、由も？

#### #4 マチフセ (6)

「携帯！ 由の携帯！」

律が叫ぶ。オレは急いで由の携帯に電話しようと自分の携帯を開く。

そのときだ。

「ただいまあゝ。いつちゃあん、智史くん来てるよあゝ。」

「お邪魔しまーす…っと、あれ、二人とも、どした？」

玄関から買い物袋を持った由と智史がのほほん、とやってきた。オレと律はへにやへにやっと床に座り込む…。なんだよあう…心配したのに…。

「どうしても今日はエビフライが食えなくなっちゃって…スーパー寄ってきたの。そしたらそこで智史くんに会ったから、荷物持ってもらっちゃった。」

無邪気に笑う由。…まあ、何事もなくてよかったけど…。

「ちょっと帰り遅かったから…由も逸のストーカーにやられてんじゃないかと思ってさ…。」

律が短くため息をついて言う。うんうん、とオレも頷く。

「ああ、その話、わたしのクラスの女の子たちもしてたよ。いつちやんと一緒に帰った女の子たちが狙われてるんでしょ？」

「だからおれと一緒に帰ってきたってのもある。ま、それでなくても寄ろうと思ってたんだけどね。」

由はそう言つて智史から買い物袋を受け取り、冷蔵庫に入れるため台所へと向かう。智史はオレたちと一緒に居間のテーブルを囲む。

「ちよつと、気になった点があつてさ。」

智史が話し始める。なに？ とオレたち双子は身を乗り出して智史の話を聞く。

「…昼の志信ちゃんたちの話で、逸、おかしいと思わなかった？」

「…？ うーんと？」

首をかしげる。と、智史が続ける。

「理奈ちゃんと聖子ちゃんとのぞみちゃん…て言つたっけ？ 三人とも、それぞれバラバラになった後に一人ずつ襲われてるんだよね？ 逸、三人の住所わかる？」

「…はつきりは知らないけど…、理奈ちゃんはS市から来てるはずだよ。聖子ちゃんはT駅の近くつて言つてたと思う。のぞみちゃん…は…確かW小学校の出身…」

「ほんとにみんな見事にバラバラじゃん。」

律が口を挟む。と、智史が「それなんだよ」と頷く。

「それだけバラバラな帰り道にみんながみんな襲われてるってことは…犯人は一人じゃない、ってことじゃないか？」

…犯人は、一人じゃない？

智史の推理に驚くけど、言われてみればその通りだ。S市・T駅・W小学校：地図で見ると、恐らく綺麗に大きなトライアングルを作るんじゃないかって思えるくらいの距離。しかもオレたちが遊んでいたカラオケはちょうどその三角形の重心に当たるくらいの位置で…。そこから例えば理奈ちゃんを襲った後、聖子ちゃんを追いかけて襲い、さらにのぞみちゃんを追いかけて…なんて、ちょっと不可能だ。

ぞくつ。なんだか急に、悪寒が走った。夏なのに…。

犯人は、一人じゃない。

「…やっぱ捕まえないと気が済まないな…。」

律が舌打ちする。

「さっきさ、栄子から電話あったじゃん。」

突然律は今までの話からちょっと離れたかと思うようなことを言う。うん、確かにさっき、栄子ちゃんと電話で話してた。頷くと、律は続ける。

「栄子のストーカー、栄子の彼氏が捕まえたって。」



え？ マジで？ オレと智史は顔を見合わせる。

「栄子がいつもストーカーされてる駅から、栄子を一人で歩かせて、  
彼氏が後をこっそりつけてたら…案の定、ストーカーが現れて、確  
保。」

「それって前に律が言ってた捕獲作戦？ 栄子ちゃんの彼氏、協力  
してくれたんだ。」

智史がそう言ったのを聞いて思い出す。そういえばそんなこと言  
ってた…ってか、その作戦参加したいと思ってたのにい。

「…どんなヤツだったって？」

「…近所の小学生だったらしいよ。由と同年くらいだった。とり  
あえず止めるように言ったら、泣く泣く承諾したって。」

小学生…。つたく…最近のガキは…。

「だからさ、逸も捕獲作戦やりやいいんだよ。一人でもとっ捕まえ  
れば何らかの解決に繋がらないかなあ。」

「それだ！」

思わず立ち上がって叫んでしまった。その手だよ！ 捕まえて、  
オレが話せば、オレのファンだもん、オレの言うこと聞いてくれる  
…かも。

「…でもさ。」

オレが一人で盛り上がっていると、智史がぼそつと口を挟んだ。

「…栄子ちゃんの場合と違って、狙われてるのは逸じゃなくて逸と一緒にいた女の子だろ…？ おとりになってくれる女の子なんて、いるかな…。」

そうだ…噂が流れてしまっている今、狙われてるのわかってオレと一緒に歩いてくれる女の子なんていないかも…。唯一協力してくれてる志信ちゃんと比呂美ちゃんだって、ただでさえ情報仕入れてもらってるし、それ以上危険な目にあわせられないし…。あとは栄子ちゃんと由ぐらいしか…。いや、この二人も危ない目にあわせたくない…。

うー…。行き詰まってしまった。智史に助けを求める目を向けてみても、智史もむむうと唸ってしまっている。

…いい考えだと思ったんだけど…なあ。

## #5 クワダテ (1)

次の日の昼休み。いつものように生徒会室。

「そんなの簡単じゃない。あたしにいい案があるわ。」

ストーカーを捕まえてスッキリしたのか、オレたち三人が昨日行き詰まってしまった捕獲作戦のことを話すと、栄子ちゃんはある程度あっけらかんとそう答えた。

「要するに危険な状況でも対応できる女の子がいればいいんでしょ？ そーいう女の子、心当たりがある。」

にこにこ、微笑みながらお弁当の卵焼きを口に運ぶ。うん、さすが栄子ちゃん、天使の微笑みってこんな感じ？ 惚れ惚れする、よなあ。

…それはともかく。

「で、いつその作戦実行するの？」

栄子ちゃんが問う。ので、オレと律と智史は顔を見合わせる。昨日はおとり役の件でつまづいてしまったので、それ以上のことは何も話してないんだ。

「…早いほうがいいよな。」

律が呟く。智史も頷く。まあね、できることなら夏休みに入る前に女の子たちの誤解を解きたい。暇を持て余す夏休みなんて、まっ

ぴらゴメンだ。

「じゃあ明日は？ “おとり”の準備があるから、今日すぐってわけにはいかないけど、明日ならいいよ。」

栄子ちゃんがにこにこ笑顔のまま言う。

「…その彼女、快く協力してくれるかなあ…？」

急な話だし、ましてや危険な目に遭うのわかってて手伝ってくれ  
る女の子なんて…いるのか？ やけに栄子ちゃんは自信满满だけど  
…。栄子ちゃん、まさかその子の弱み握ってたりする…？

「大丈夫大丈夫。快く、はちよつと難しいかもだけど、なんとかするから。話、進めて？」

栄子ちゃんがそう言うので、オレたちは作戦を練ることにする。

こういう頭を使うことは智史に任せるのが一番。オレと律は智史  
が口を開くのを待っている。オレたち双子に期待のまなざしで見つ  
められた智史は、むう、と眉間にしわを寄せてちよつと考えて、ポ  
カリスエットを一口飲んでから、話し出す。

「こーいのはどう？ あらかじめ志信ちゃんたちに逸と彼女がど  
こでデートするって噂を流してもらう。あの二人なら他校のネ  
ットワークも持ってるから、犯人グループにも噂はすぐ耳に入るだ  
ろう。で、逸は彼女を連れて予告どおりその場所ですばらくデート  
をしてから、別れる。彼女を一人で歩かせて、犯人が狙ってくるの  
を待つ。犯人が迫ってきたら、後ろからみんなで…。」

がつつ、と智史は腕をすばやく前に回して、捕まえる素振りをする。

おおお。オレと律、そして栄子ちゃんは拍手。さすが智史、バツチリじゃん。

「よし、じゃ、明日、その作戦で犯人捕まえてやる！」

なんか元気になってきた。まだ実行してないけど、なんだか上手いきそうな気がする。犯人さつさと捕まえて、楽しい夏休みを送るんだっ。

オレが一人犯人確保に燃えて（？）いる横で、自分で作戦を考えておきながら智史はまだ少し不安そうだ。

「…栄子ちゃん、ほんとにその彼女、おとり役引き受けてくれるかな…。」

「大丈夫よ大石くん。あたしに任せてっで。」

栄子ちゃんが胸を張って言い切るので、智史も安心したのか、微笑んで頷く。

「…そんな適任、栄子の友達にいるっけ…？」

その傍らで律は一人首をかしげていた…。

## #5 クワダテ (2)

「あゝ、早く明日の放課後にならないかなあ。」

その日の夜、オレはワクワクしながら明日を待つ。志信ちゃんと比呂美ちゃん、うまく噂を流してくれたかなあ…。ああ楽しみだつ。

いつも楽しみに見ているテレビの歌番組も、今日はあまり見てる気がしない。今日は鞘根虹香も Diana T o M o o n も出るつてのに。

…昨日とはあまりにテンションが違いすぎるので、律も由も、半ばあきれ返っている。真咲は…あれ、そういえばいない。また、湯浅さんと電話かなあ。

「なあ律、明日のおとり役の女の子って、どんな子が知ってる？  
可愛いかなあ？ 可愛いといいなあ…つてか女の子はみんな可愛いけどねつ。」

はあう、と律は大きなため息で返してくれる。

「…多分、オレの知らない栄子の友達なんだろうなあ…。オレには見当もつかないから。…てかなんかいやーな感じがするのは気のせいだろうか…」

オレと違ってなんか律のテンションは低め。何でだろ。まあいいけど。

「あ。次、虹香ちゃん出るよ。真咲くん呼んできてあげよつか。」

テレビを見ながら由が言う。CM挟んで次は真咲の好きな鞘根虹香。オレも好きだけど。

「よし、オレ呼んできてやるよ。」

オレは立ち上がって居間を出る。るんたった、階段を昇る足も軽い。

“つきのかがみ”を鼻歌で歌いながら、真咲の部屋に近づく。…話し声が聞こえる。あ、やっぱり湯浅さんと電話中かな…？

そう思っただけで開いているドアを覗こうとしたその瞬間。

「…今更なに言ってるの？駄目だよ。駄目に決まってるじゃない。」

え？

耳を、疑った。…真咲の声、だよな？

…真咲の声。でも…オレが知ってる真咲の口調とは、明らかに違う。声を荒げているわけではないけど、冷たい…氷の針のような、冷酷な声…。いつも聞いている、あの人懐っこい真咲の声とは、まるで真逆…。

「今更そんなこと言わないでよ。じゃあ、切るよ。」

その冷酷な声が一方的に電話を切る。相手は…湯浅さん？ 真咲

と湯浅さんは…まあ言ってみれば主従関係だから…真咲がそういう口調でも別におかしくないのかもしれない。でも…。

違和感が、ありすぎる。

しばらく廊下で突っ立っていた。と、真咲が部屋から出てきた。

「つつ逸さん！　こんなところでなにを？」

「あつ…ああ、いつ、今からテレビに鞘根虹香が出るからさ、真咲呼びに来たんだ。」

平常心を心がけて、立ち聞きしてたことを真咲に悟られないように言う。…バレて、ないよな。

「あ、ありがとうございます。トイレ行ってから行きますね。」

真咲はいつもどおりの声でにつこりオレに笑いかける。…いつのどおり、の真咲だ。

…オレの気のせい…？

いや、でも確かに聞いたのは、冷たい声。真咲の…声。

腑に落ちない気持ちを抱きつつ、オレは居間に戻る。CM明けて既に鞘根虹香はトークを終え、歌のイントロが流れていた。

「どした？　さっきよりテンション落ちてない？」

律が戻ってきたオレに気付いて問う。



「ん、そんなことねえよ。トーク間に合わなかったからさ。」

ちっ、と冗談混じりに舌打ちを試みせる。

テレビの画面には青白く光るスポットライトの中に立つ鞘根虹香。ライトと同じように青白いドレス…まるで本当に月の妖精みたいで…今日も可愛いなあやっぱり。

『それはそれは このうえなくまるいつき

あわくしろく ふたりをてらす

さよならなんて そんなことばは

せいなるひかりに じょうかされてく

たとえたとえ てんとちほどおくても

いつかきつと ふたりはであう

つぎのみちかけ くりかえすたび

せいなるひかりに みちびかれてく

つきのかがみ

あなたのすがた うつして

とおくにいても わかるように

つきのかがみ

わたしのすがた てらして

あなたをすぐに さがせるように……』

しっとりした静かな旋律に、透き通るような歌声。可愛いだけじゃなく、歌も抜群に上手いから、アイドル好きの男たちだけでなく、女の子たちの人気もある。プロフィールが一切公表されていないのも、ミステリアスな魅力なのかも。

…間奏が流れてサビの部分の繰り返しの際にようやく真咲が居間に現れた。さっきの冷たい真咲が気になって、テレビの画面を見つつ横目で真咲を視野に入れる。

…目を疑う。思わず、二度見してしまった。

真咲の表情。おおよそ、鞘根虹香のファンだとは思えないような…硬い表情。眉間にしわを寄せて、画面の鞘根虹香を凝視している。

さっきの冷淡な真咲の声が蘇る。…一体、あの電話で何があった

んだ…？

オレが見つめていることに真咲が気付く。途端に、いつもの柔和な表情に変わる。につこり、オレに微笑みかける。思わずその笑顔につられて、微笑み返すけど…オレ、変に思われてないか？ 大丈夫か？

「逸？」

オレの様子に気付いた律が不思議そうな顔をする。律にもオレは微笑み返す。まるで、微笑むことで今見たことを頭から消去するかのよう。

真咲…一体？

## #5 クワダテ (3)

何となく不可解なしこりを心に残しながらも、待ちに待った捕獲作戦実行の日がやってきた。

真咲にあれ以来変化はない。いつもどおりの様子で朝も家を出てったし。何かおかしいな様子があったら同じクラスの志信ちゃんたちが気付いて教えてくれるだろうし。気のせい、と思うしかないのか。

それより今は“おとり”の女の子がどんな子なのかと、作戦が成功することに集中しようと思う。

放課後、オレたちは栄子ちゃん指定のカフェで待ち合わせ。栄子ちゃん指定なだけあって、駅近だけど隠れスポットっぽい、かなりオシャレなお店。今度ここぞ、というデイトで使わせてもらおう。ま、今日ちゃんと犯人捕まえて、噂がなくなってからになるけど…。

とりあえず今集まっているのはオレと智史。オシャレなソファタイプの椅子に腰掛けて、これまたオシャレでシックなカフェエプロンのお姉さんに出された水を飲んでる。

「昨日Diana To Moon出てたね。見た？ あれって、新曲？」

「や、この前出たアルバム収録曲。…って昨日その番組でYUTAさんがそう言ったけど？ 逸、見てたんだろ？」

そうだったっけ…？ 真咲の表情が気になってて、あんまりトクちゃん聞いてなかった。ちなみにYUTAってのはDiana To Moonのギタリストだ。

「見てたよ。言ってたっけ？ …でも曲は覚えてるよ。なんだっけ、Powerじゃない Moneyじゃない そんなんじゃ 手に入らない 君の愛 …題名…“光の…”なんだっけ？」

「“光の束”。」

「そうそう！ アップテンポでノリのいい、いい曲だねえ。」

なんて話しながら律と栄子ちゃんが来るのを待っている…んだけど。

「…律と栄子ちゃん、遅いね。」

智史が呟く。…確かに…待ち合わせの時間から、既に十五分経過。

「…おとり役の女の子の説得に時間がかかってるのかも…。」

大いに有り得る、と、二人してうなずき合ってしまった。

ちょうどその時。

「ゴメンゴメン遅くなっちゃって。お待たせしましたあ。」

入口のドアを開けて、すぐさまオレたちに気付いた栄子ちゃんが手を振って駆け寄ってくる。…栄子ちゃんの後ろには、恐らくおと

り役の女の子。思わずそっちに目が行ってしまっ。

…すらりと長い手足。女の子のわりにスレンダー…っか、モデル体型っていうのかな？ 白いレースをあしらった甘すぎないナチュラル風のキャミワンピースが、その肢体をさらに綺麗に見せている。まだ顔はよく見えないけど、それだけでもオレにはかなり高得点。

栄子ちゃんが極上の笑顔でオレと智史の座っている席まで来て、ようやく彼女の顔も見えた。…少しうつむいているので全体は見えてないけど、さらさらの長い髪から見え隠れする切れ長の目。可愛い、というより美人、て感じの、整った顔…。かなり、じゃない。ストリート直球に好みのタイプにストライク、かも…。

ほう…。思わず見とれてため息が出ってしまった。栄子ちゃん、なんでもっと早く彼女を紹介してくれないかなあ…。こんな綺麗な子、今まで見たことない…。

「…あれ、栄子ちゃん、律は？ 一緒じゃないの？」

オレが惚けているのを横に、智史が尋ねる。あれ、そーいえば律がない。てつきり栄子ちゃんと一緒に来ると思ってたのに…。

「…ここにいるんですけど。」

律の声がした。かなり不機嫌そうな声。オレと智史はきよろきよろ、周囲を見回す。…でもここには栄子ちゃんと彼女、それ以外に店の中には誰もいない。あ、店員のお姉さんはいるけど。

智史と二人、首をかしげる。と。

「だあかあ、ここにいてば！」

バンっっっ！……… …… キャミワンピースのスレンダー美人が、テーブルを両手で叩く。

…え？

…まさか？？

…嘘だろ？？？

## #5 クワダテ (4)

「ひょ…つつつとして…り、つ？」

声にならないような声が、喉の奥からかすれて出てきた。うつむいていた彼女が腕を組んでふんぞり返っている…。顔が、やっとよおおく見えた。…化粧してて、かなり変わっているけど…律の、顔だ。

「…栄子ちゃんの言ってた“心当たりがある、危険な状況でも対応できる女の子”って…律のことだったの？」

智史が呆然としたまま栄子ちゃんに尋ねると、栄子ちゃんはまず極上の笑みをふりまいて頷く。

「いい出来でしょ？ このために昨日いろんなお店探しまくって律に似合うワンピースとサンダル調達したんだからあ。ほんと髪もエクステにしたかったんだけど、時間ないし律嫌がるし、仕方ないから演劇部でカツラ借りてきたの。」

…栄子ちゃん、めちゃくちゃ楽しそう。

「なんでオレがこんなこと…。」

「律、言葉づかいちゃんとして。」

思いつきり不機嫌な律にぴしゃりと栄子ちゃんが言い放つ。ぶつぶつ文句を言う律。様子はいつもと変わらないのに。



「律さあ…女の子っぱくすればかなりモテるよ。女の子にじゃなくて、男に。」

智史がしみじみと言う。…ほんとに…。確かに律はオレの双子の妹なんだし、由の姉なんだから、美人なのには間違いないんだ。でもここまでオレの好みにハマってるとは…ヤバイ。オレって、ナルシスト？

「じゃあたしと大石くんはここ出て様子を見てるね。」

「逸と律はしばらくここでお茶して、テキトーにデートして、駅で別れるってことで。」

そういつて智史と栄子ちゃんはお店を出て行く。律は智史が座っていたソファに座る。足閉じてよ、と栄子ちゃんに釘を刺されながら。

…なんだか、なあ…。キンチョーなんて、何でしてんだろ、オレ。

しばらくオレと律はよそよそしく黙ったまんま。お店のお姉さんがオーダーを聞きに来て、二人してアイステイーを頼んでしまう。

「…落ちつかねえ…。」

ぽそつと、律が呟く。うん、オレも。

「でも、なかなか似合うと思うけど。さすがはオレの妹だな。」

キンチョーばっかしてても進まないの、平常心を心がけてそう言う。ぶすつとしたまま律は長い髪をかきあげる。カツラだけ。

…それがまた絵になっちゃっている。

「スカートすーすーするし、ヒールって歩けねえよ…。よくみんなこんなんで平気に歩ってんなあ…。」

「慣れじゃねえ？ ……ってか、ちよつと言葉もそれらしくしてみてもよ。」

そう言つと、律は店員さんが持ってきてくれたアイステイーを一口飲んでめんどくさそーな顔をする。

「な、この後どこ行く？」

話を振つてわくわく顔で見つめていると、律はしゃーねえな、と言わんばかりに嘆息する。

「…わたし、はどこでも。逸がいつも女の子とデートしてるコースでいいわ。そのほうが、犯人も追いやすいでしょ？」

「おおお〜！ やれば出来るんじゃない！」

思わず感嘆の声をあげてしまった。ってか、フツーに女の子じゃん！ 智史の言うように、男にモテまくると思うぞ。ひよつとしたら栄子ちゃん以上？ ま、ちよつと栄子ちゃんとはタイプが違うから何とも言えないけど。あー…でもこんな律なら寄ってくる男みんなオレが排除してしまえそう…可愛い娘を持った父親の如く。心配で仕方なくなる。ってか、妹にしておくのが惜しい…って、オレ何言ってたんだか。

変な感じで律に見惚れつつアイステイーを飲み干して、とりあえ

ず作戦を遂行するために立ち上がる。

「で、どこ行く？」

律が尋ねる。

「うん…とりあえず、ゲーセン。」

「ゲーセン？ …逸、いつもデートでそんなところ行ってんのか？」

「たまにはね。今日は、律とプリクラ撮りたいから」

…あからさまに嫌々顔をする律。そんな律は無視して、お会計済まして、いざ出発！

駅周辺を二人で歩く。変な感じ。いつも律と歩く時は気にしないのに、女の子たちと歩く時みたいに、歩くペースがゆっくりになる…無理もない。律は履き慣れないヒールのあるサンダルに悪戦苦闘しながらオレについて来る。

「…歩きにくい…」

律が不満を口にする。しゃーねえなあ…。

オレは律の腕に手を回す。

「つかまれ。」

え…とまた嫌々顔をする律。無理やりオレの腕をつかませて歩き始めると、思いのほか楽になったんだろう、律も観念して、オ

レの腕に体重をかけてくる。

…ハタから見れば、間違いなく素敵なカップルなんだろうなあ…。それを裏付けるかのようにすれ違う人がみんなオレたちを見ていく。双子だなんて、思わないだろう。

しばらく歩いて、ゲーセンでプリクラ撮って、いいかげんもういいだろ、と律が言うので駅まで戻る。もうちょっとデエトしたかったなあーんで。

駅でオレたちは別れて、律は一人で改札をくぐる。

「…気をつけて。」

思わずオレはそう言っていた。志信ちゃんたちにも噂を撒いてもらっているし、これだけ派手に（？）デートしたんだ。必ず犯人は律を狙いに来る。

「大丈夫。」

律はにっとう笑ってそう言ってホームに入っていく。ホームには、先回りして智史と栄子ちゃんがスタンバっている。オレも、少し時間をおいて二人と合流する。

律はホームで電車を待つ。少し離れたところで、オレたちは律を見守る。…ホームにあまり人はいない。ぽつりぽつり、学生がいるくらい。

「ここでは来ないかも…。」

智史が呟く。犯人は人混みを狙っているはず。栄子ちゃんが律にメールする。

「電車乗って、Y駅まで行ってみて、っと。」

Y駅はこの辺ではけっこう繁華街だから、ここよりも混みあっているはずだ。

律が携帯を取り出して見ている。メッセージは伝わった。

それからすぐに電車が来る。乗り込む律を見失わないように、隣の車両に乗り込む。…電車内も、それほど混んではない。…ここも来ないかな…。

律は何事もなくY駅に到着。電車を降りる。オレたち三人も後に続く。改札へ向かうために陸橋になった階段を昇っていく。昇って線路を越えて、また階段を降りていこうとしたその時だった。

律の後ろに、女の子の人影が近づいていくのをオレは見逃さなかった。

混みあった階段。歩きにくそうな律の背後。…女の子の、腕。

…突き飛ばそうとしている?!

「律っつ!」

オレが叫んで律に駆け寄ると、その腕が律の背中を強く押すのと、律がオレの声に反応して振り返ると、全てが同時だったと思

う。

ガタン！！！！

大きな音がした。

…律！！！！

## #5 クワダテ (5)

気が気じゃなかった。犯人、絶対許さないと思った。絶対逃がさない！

誰より早く律の元に飛んでいくと、階段の下に、律が、…律と、もう一人女の子が、倒れていた。

「律！」

オレが叫んで降りていくと、律は苦笑いでオレに応える。…よかった。無事だった。

智史と栄子ちゃんもすぐオレのあと駆けつける。

「…犯人、捕まえた。」

律がそう言って手を上げると、一緒に倒れていた女の子の腕も一緒についてきた。律が、その子の腕を、しっかりと掴んでいた。

「逸が叫んだから、振り返って、オレを押しそうとしていたこの子の腕を咄嗟に掴んだんだ。絶対離すもんか、ってね。」

にやり、と笑う律。階段を落ちた衝撃でカッラ取れちゃってるよ…。女の子らしいキャミワンピースのその格好にその不敵な笑みは不似合いだけど…律らしいというか、化粧してはいるけれど、いつもの、自然な律。やっぱりこっちのほうがいい。

「大丈夫？ 犯人さん。」

栄子ちゃんが彼女に問い掛ける。逃げようとする彼女の腕を、律はぐぐいとひっぱって、離さない。

「諦めて話聞かせてくれないかなあ？」

智史が言っても、彼女はうつむいたまま。…ここはオレの出番か。

「今までの犯行も、全部キミの仕業？」

オレが問うと、やっと顔を上げてくれた。やっぱり腐っても（失礼だな）オレのファンだもんなあ。オレの声には反応するよなあ…。

って、その子を見たこともない女の子だった。あれ？

「…オレのファン…？」

オレの顔を見てもきょとん、としている彼女。この子…オレのファン…じゃない？

一瞬わけわからなくって混乱したけど、オレのファンじゃないにしろ、律を階段から突き飛ばそうとしたのは事実だ。

「…なんで、こんなことすんの？」

オレが尋ねてじいっと彼女の目を見つめると、彼女はふい、と目を逸らして短く溜息をついた。…観念したかのように。

「…とりあえず、ここじゃなんだから、場所、移動しよう。」



栄子ちゃんが提案してくれる。確かに、この人通りの多い駅の構内で、わあわあやってるのは他の人たちに迷惑だ。

「確かここ、駅前にガストあったよね。」

智史のこのひとことで、ガストに移動することに決定。

律が彼女の腕を掴んだまま立ち上がる。と、彼女がやっと声を出す。

「…逃げないから、離してくんない？」

「あ、ゴメン。」

律も素直に手を離す。

彼女を含めて五人でガストに到着。店内はオレたちと同じくらいの学生で賑わっている。窓際の大きなテーブルが空いていたのでよかった。そこに座ると同時に、栄子ちゃんと律がメニューを見始める。

「あたしベルギーショコラ生クリーム添えとドリンクバーね。」

「ええっとじゃあオレはチーズケーキストロベリーソース掛けとドリンクバー。」

「あ、律それ半分こしない？ チーズケーキも気になってたんだ。」

「じゃあねえな…。いいよ、半分ずつ。」

今までの流れを無視したかのように二人はそんなことを言っている。…捕まえた彼女も啞然としてるんですけど…。

「…あ、あなたも好きなもの頼んじやいなさいよ。逸くんのおごりなんだから。」

栄子ちゃんが彼女にそう言う。…ええ？　いつからオレのおごりになってんの？

「あ、逸のおごりなんだ。じゃあおれもチョコバナナパフェとか頼んじゃおうかなあ…。」

智史まで？！

「…わあったよ。いいよ。全部おごっちゃる！…！」

ヤケクソで叫んでやる。犯人確保に協力してもらったっていえばその通りだし、お礼にということなら、まあよかるう。

わあい、と一同拍手して喜ぶ。…こいつら…最初からそのつもりだったなっ。

「…じゃあ晩御飯とかも喰っちゃう？」

律が調子に乗って言い放つ。

「そこまでは面倒見切れん！！！！デザートまでっつ！！！！」

…ちゅーわけで五人分のデザートとドリンクバーを注文し、わあ

わあバカ言っても先に進まないの、早速本題に入る。

「…で、なんで律の背中押したの？ 今までの女の子たちへの嫌がらせも、全部関与してるの？」

できるだけ優しく尋ねる。彼女のやったことは許せないけど…逆上しても真実にはたどりつけない。非難するんじゃなくて、止めてもらうのが本意だし。

すると彼女はゆっくりと口を開く。

「…最近流行りの、いいバイトなんだよね…。」

「バイト？」

意外な答えに驚きつつ、うつむいてる彼女の顔を覗き込む。何度見てもその辺にいるフツの女子高生。

彼女は続ける。

「…バイトってか…ゲーム？ ケータイにメールで画像送られてきて、そのターゲット捜して見つけて“指令”に従えば、一回成功につき一万円。」

「…なにそれ。」

想像すらしていなかった答えにオレたちは全員絶句。

「けっこうここ二・三日は“指令”メール来てなかったんで、そんなオイシイ話もう終わってたんかなって思ってたんだけど…今日久し

ぶりに来て、見てたらそこにターゲットがいたから…。」

ターゲット。そう言って彼女は律を見る。

「…それって…誰からメールが来るの？」

智史が彼女に尋ねる。と、彼女は一枚の名刺をポーチから取り出した。

「ちょっと前に友達とゲーセンふらふらしてたらこの人が寄ってきて、いいバイトあるからやんない？って。最初はなんかヤバそうって思ったんだけど、“ウリ”ってわけじゃないし、まあヤバくなったらやめりゃいいしって…。」

名刺はいたって普通の会社の名刺っぽい。

…ZEROPROJECT 加藤達弘。

そう書かれていて、右下には顔写真。何処にでもあるような、シンプルなものだ。写真の顔はちょっと軽薄そうな感じの、二十代後半くらいの男。

「ZEROPROJECTって…聞いたことある…。どこで、聞いたんだっけ…。」

智史が呟く。必死に、記憶の糸を手繰り寄せているようだ。

「これって、ちゃんとお金もらえんの？ そういつ信用はあんの？」

律が彼女に問うと、彼女は頷く。

「アタシは一回もターゲット見つけれなかった…今回が初めてだったからお金はもらったことないけど、友達は二・三万稼いだって言ってた。メールで銀行の口座番号聞かれて送ったら、けっこうすぐに振込みあったらしいよ。」

「思い出した。」

彼女が言い終わるか終わらないかのタイミングで智史が声を上げる。

「ZERO PROJECT…ゼロプロっていったら、鞘根虹香の所属事務所だ。」

「鞘根虹香？　じゃあ、音楽事務所？」

「…いや、芸能全般…だったと思う。かなり大きい組織だよ。」

…なんでそんな芸能の大きい会社が、オレの周りの女の子を狙ってんだ…？　ますますわけがわからない。はっ、まさかオレをスカウトするために、周りの女の子退けてから…ってまわりくど過ぎるよなあ…。それだったら直でオレに声掛けりゃいいんだし。

…わけはわからないけど、でも、ひとつだけわかることは。

「…なんにしても、関わらないほうがいいよ。充分犯罪になるわけだし。」

オレは彼女にそう言う。と、栄子ちゃんもたった今運ばれてきたベルギーシヨコラにフォークを刺しながら、言った。

「今は“ウリ”と関係なくても、そのうちなんかさせられるよ。芸能会社でしょ？ 素人とか、好きそうじゃない。」

「ああ、そーいうビデオとか？」

律がつけ足す。なるほど、ありがち。

「…この名刺、もらっていい？ほんとにゼロプロにこの人が存在するかどうかも気になるし…君にはもう必要ないわけだし。」

智史が名刺をひらつかせて彼女に問う。彼女はさっきの栄子ちゃんと律の台詞を気にしたのか、大急ぎで頷いてみせる。よかった、この子、根が素直な子で。

…本当の解決にはまだほど遠いけど、とりあえず糸口が見つかったような気もする。…全員のオーダーも全て運ばれてきたことだし…。

「じゃ、まあとりあえず解決ってことで、あとはデザート楽しみますかっ。」

オレはいち早くドリンクバーへと駆け寄っていく。

## #6 タガタメ (1)

昨日の一件で見つかった糸口。でもまだまだそれを手繰り寄せても真相は見えてこない。てーか手繰り寄せたら糸切れちゃいそうなくらい、ごくごく細い糸口。まあでも全く何も無いよりはいいか。

今日もオレの周囲は静かだ。相変わらず女の子たちはオレに近づくのに躊躇してるみたい。…ちょっと慣れてきた自分が嫌かも…。

一応志信ちゃんとひろみちゃんには昨日の報告をして、彼女たちのネットワークに、変なバイト(ってかゲーム?)には乗らないよう注意を呼びかけてもらった。…今オレに近づいてくる女の子がいないから、狙われることも狙うこともないだろうけど。

女の子たちが寄ってこないのも、無駄に学校にいても仕方ない。さつさと家に帰ってゲームでもするか…と靴箱で靴を履き替えていると、靴箱の裏で聞き慣れた声がした。

「…あ、じゃあ今事務所にいるんですか？ それなら今から向かいます。…え、わかってますよ！ 別にそのために行くんじゃないですって！…！」

…智史だ。

くるりと靴箱を周って声のするほうに行ってみると、智史が携帯で誰かと話している。

…事務所？ ひょっとして、ゼロプロ…なわけないか。きっと、

相手は智史の叔母さん…紫さんだ。ってことは事務所ってKMミュージックプロダクツ。え、今から行くの？

通話を終えた智史ににこにこして近づいてみる。気づいた智史は苦笑い。

「…KMミュージックプロダクツ今から行くの？」

「うん、昨日のゼロプロの件で…紫さんが知ってる人なわけないだろうけど、なんか手がかりないかなあと思って…。」

うんうん、やっぱり？ オレはにこにこしたまま智史を見つめる。尻尾振り振りってイメージで。

「…連れてってやってもいいけど、Diana Tom Moonのメンバーはいないよ。」

オレの思考を完全に読み取って、智史はそう言った。…なんだあ…SHIYAちゃんもCHISAちゃんもいないんだ。残念…。

「でも行く。ゲノー事務所なんて行ったことないし。スカウトされちゃったりして」

きゃぴっ、と笑うと智史は溜息。

「…ありえない。」

…まあそんなわけで智史とともにKMミュージックプロダクツに向かうことに。



…そこは思ったより小さな事務所だった。雑居ビルのワンフロア。こじんまり…というより、せまっ！…！…って感じ？ 山のようなダンボールや雑誌、その他いろんなグッズなどが所狭しと積み上げられている。なんか、イメージと違う…。

「…そんないいもんじゃないだろ？」

智史がオレの心を悟ったかのように、つぶやくように言った。うん…そーかも。

その、山のようなダンボールの中のデスクで、オレたちが来たところにも気づかず一心不乱にパソコンに向かって何か仕事をしている後姿の女性が一人。…長い黒髪を無造作に束ねて、ポロシャツにジーンズといった、ラフすぎる格好。

「こんにちはー。」

智史がその女性に声をかける。ってことはこの人が紫さん…Diana To Moonの敏腕マネージャー？

「ああビックリした！ もう来たの？」

本当に驚いた、って感じで振り返る。智史の叔母さん…ってことは智史のお父さんの妹さん…だよな？ 兄妹、年離れてんのかな…。それともゲーノーカイの水ってヤツ？ 叔母さんなんて言うのは失礼なくらい、若々しい。きつとこんなラフな格好だから、メイクもしてないと思われるけど…全然気にならない。

「紫さん一人なんだ。」

「そおよう。今日はみいんなオフなよう。私だけ仕事溜まっちゃっててさあ…やな感じよねえ。」

「ぶー、と子供のようにふくれる紫さん。そしてその時智史の背後にいたオレに気づいたみたい。」

「あれ、智史のお友達？」

「うん、幼なじみの…」

オレが紫さんに自己紹介をしようとした矢先に、紫さんが「ああ！」と大きな声を上げた。

「ウワサの自慢の幼なじみくん！ わあい会いたかったのよう〜！  
！！！」

じ…自慢？

「別に自慢なんかしてねえよっ！」

慌てて智史が訂正する。そおかあ…こいつオレのこと自慢なんだあ。その大急ぎの否定の仕方がCHISAちゃんのことをからかった時の反応と似ている。おもしれー。

「初めまして、新藤逸です。智史がいつもご迷惑かけてすみません。オレも会いたかったんですよ、紫さんに。」

オレが丁寧に紫さんに挨拶をすると、紫さんは嬉しそうにはしゃ

ぐ。

「きゃ〜かわいい!!! 確かにアイドル系だわあ…。ウチにもつとお金があつて、ジャーニーズみたいな事務所だったら即デビューなのにつつ!」

「マジっすか? オレ歌はS M A Pの中居くんより上手いですよ。」

「… K Mはバリバリロック系の音楽事務所じゃん…。 “エレキの神様” 京月冬夜<sup>きげふゆきとつや</sup>…社長さんの名前汚すなよ…。」

智史が溜息…。一人テンション低つ。

「冬夜はロックにこだわりすぎてんのよ。頭力タイったら。きよーびロックだけじゃ売れないって。」

「… 京月冬夜のおっかけの果てに無理やりのようにこの事務所に就職したくせに!。」

「なっ…なんで知ってんのよ! 兄貴のヤツ、息子にそんなことまで話してんの?!」

智史と紫さんの掛け合い…マンザイみたいでおもしろい。思わず吹き出してしまった。

「…それはともかく、紫さん忙しいんですね? さつさと本題入りますよ。」

そう切り替えて智史はポケットから例の名刺を取り出す。紫さんが覗き込む。

「この名刺って、本物ですかね？」

「なあに、これ。」

「実は昨日…」

智史が事情を説明し始めようとするが、オレが割って入る。智史は本当のことを話すつもりだ。なんか、それじゃマズい気がする。

「実は昨日、オレ、この人にスカウトされたんですよー。でもこんな名刺一枚なんて誰でも作れるじゃないですかあ。変なコトに巻き込まれんのやだし…紫さんなら本物かどうかわかるかなあと思って、智史に頼んだんです。」

呆然とオレを見る智史に心の中で任せとけって言って頷いてみせる。智史はそのまま黙る。

紫さんは智史から名刺を受け取ってまじまじと見る。

「…この人…」

右下の顔写真に紫さんが反応する。…見たことある人…？

しばらく間を置いて、紫さんが目を上げる。そして、オレと智史に告げる。

「この人、ゼロプロの人に間違いないわ。しかも…よく見たことある。」

その続きの台詞を聞いて、唯一のこの糸口が、ますます先の見えない、絡まった状態になってしまった…。

「鞘根虹香のサブマネージャー…ってかお付きの人、って言ったほうが近いのかな？ とにかく、いつも鞘根虹香の傍にいる子よ。間違いないわ。」

## #6 タガタメ (2)

「…相変わらず嘘八百上手いな。」

KMミュージックプロダクツのビルを出て、最寄の地下鉄の駅まで歩き出した時、智史がポツリと呟くように言った。

「だってさあ…ついクセで…。」

ぺろつと舌を出しておどけてみせるが、改めて言い直す。

「…じゃなくて。紫さんにあんま変な心配させたくないじゃん。智史のストーリーカーからの手紙の件でだってメーワクかけちゃってるし…。」

もうこれ以上誰かを巻き込みたくない。それが本音。

「そつだな。」

智史が頷く。やっぱ、即座にオレの気持ちをわかってくれている。さすがは十年以上の付き合いだ。律の次に長い付き合いだからなあ。

「…でもますますわけわかんないよな…。この人、マジでゼロプロに存在してる人ってだけじゃなくて…鞘根虹香のお付きの人だななんてさ。」

大きな溜息をついてオレは空を見上げる。夏らしい、綺麗な青空。夕方とはいえ容赦ない太陽の光に照らされた入道雲が眩しすぎる。

「逸、まさか鞘根虹香と知り合い…？」

「んなわけねえだろ。もしそうだったら自慢しまくってる。」

「…だよな。」

手にした糸口、切れないようにそおつと手繰り寄せてはみたものの、なんか別の謎をどんどん引き寄せている…。しかもその先で複雑に絡みあっているような…。

二人してお手上げ、と肩を落としてしばらく無言で歩いてた時だった。

ブブブ、ブブブ…と制服の胸ポケットが震え出す。お、携帯が鳴ってる。

「誰だろ。」

ポケットから携帯を取り出して表示を見る。

「…真咲？」

何だろう…？と思ってふとこの前の様子がおかしかった真咲のことを思い出す。あの時の真咲の表情…なんか、嫌な胸騒ぎがする。

「もしもし？」

もちろん平静を保って電話に出る。嫌な胸騒ぎなんて気のせいかもしれないし…。

『逸さん？ 今、お話しても大丈夫ですか？』

ちよつと慌てているような…興奮しているような…そんな真咲の  
声が耳に届く。まあでも、別にとりたてていつもと違う感じはしな  
い。

「ああ、いいよ。どうかした？」

とりあえずオレはその場で立ち止まる。智史もオレの横で止まっ  
て、真咲とオレの会話を待つ。

『あの…今、一人ですか？ 何処にいますか？』

「いや、智史と一緒にだけど。地下鉄の…K駅の近く。」

オレがそう言うつと受話器の向こうが少し静かになる。ほんの数秒  
黙ったあと、真咲が続ける。

『…智史さんには内緒で…今からS駅前のスタバまで来れますか？』

「え？」

聞き返す。智史には内緒で…って？

すると真咲はもう少し具体的に話し始める。

『先日…逸さんに僕、姉の話をしたじゃないですか。その…姉のこ  
とで、折り入って相談があるんですけど…。姉のことを知っている  
のは逸さんだけなので…。』



真咲のお姉さん…。もちろん覚えている。絶対美少女だもん。確か三年前に失踪したって言ってたっけ…。あ、もしかして見つかったのか？！

頭の中で真咲を女の子にしてみる…。おお！間違はなく可愛い！！！ 鞘根虹香似の、おめめパツチリ美少女！！！ あ、もしオレより年上だったとしても、全然問題ないっしょ。美少女が美女に変わるだけだ。

…このオレが行かずにいられるわけがない。二つ返事で了解したところだが、ここは智史の目もあるので普通に対応する。

「わかった。じゃ、今から向かうから。」

真咲のありがとうございますって声を聞いてから、オレは携帯を切る。さて問題はこれからだ。今からどうやって智史に内緒でS駅前スタバまで行こうか。

「…真咲？　なんかあったの？」

案の定智史がオレに問う。…そーだ。こついう時の嘘八百だ。

「んー、なんか財布落としたみたいでさ。迎えに行ってくるわ。」

「おれも行こうか？」

「あー、いいいい。けっこ遠いし。」

なんだかんだで誤魔化して、とりあえず地下鉄に乗る。智史とは

途中まで一緒だったけど、乗り換えのため一人になることができた。

一人になって、また頭の中で真咲のお姉さんを想像して、にやついてしまう。…電車の中で一人でにやけてたらちよっとおかしい人だよな。いかんいかん。それに今から会えるとは限らないんだった。

## #6 タガタメ (3)

二十分ほどでS駅に到着。人通りの多いスクランブル交差点の向こう、真咲に指定されたスタバが見える。けっこう人がいるなあ…。

信号が青になる。オレはまっすぐスタバを目指して歩く。ようやく太陽の日差しも西に傾きかけ、幾分涼しい風が交差点を通り抜ける。

店内は混み合っていて、席もなさそうだ。とりあえずオレは真咲の姿を捜す。…店内ぐるりと見渡してはみたものの、真咲の姿は見当たらない。

…まだ着いてないのかな？

そう思った、その時。

「…新藤逸様、ですね？」

大人の男の人の声と共に、肩を叩かれてオレは振り返る。オレを呼んだ男の人は、このクソ暑いのにぴしっとスーツを着こなした、落ち着いた感じの…ああ、この人見たことある…何処で会ったんだっけ…。

思い出せずにばかんとしていると、その人は困ったように微笑んで口を開く。

「ああ、すみません。小林真咲の後見人の、湯浅と申します。一度、

お会いしましたよね？」

…思い出した。真咲の後見人…前に、智史がストーカーと間違えて捕まえた人だ。

「覚えてます。その節は、失礼しました。」

今更だけど慌てて謝罪すると、湯浅さんはまた微笑んで首を左右に振る。…なんつか、温和な人、だなあ…。

「お呼びだてしてしまつてすみません。真咲様もうすぐこちらに到着すると思うのですが…。」

湯浅さんはオレに申し訳なさそうに言う。あんまり丁寧なので、こちらこそ先に着いてしまつてすみませんと謝つてしまいそうになる。

目の前の席が空いたので、とりあえずオレと湯浅さんはそこに座る。湯浅さんはオレに注文を聞くと、ぱきぱきとカウンターにオーダーしに行く。うゝん、真咲、いつもこんな待遇なのかあ…なんか、どっかの王子様みたいだな。

しかし…。

オレはぼんやりと店の外を眺める。学生やらサラリーマンやら買い物中の女の人とか…あらゆる種類の人々が、スクランブル交差点を横切つてゆく。

…湯浅さんまで来るってことは、真咲の言う「姉のことで相談」って何だろう…。よほど大事な話なんじゃないのか…？ お姉さん

に会える ……なんて浮かれてる場合じゃないのかも…。

さっきまでの自分をちょっと反省していると、湯浅さんが戻ってきた。オレの頼んだアイスのキャラメルマキートをオレの前に置いて、自分のエスプレッソをテーブルに置きつつ、座る。

「飲んで、待ってましょうか。」

につこり、湯浅さんがまた微笑む。柔らかい表情は、人を和ませる力がある。

オレはキャラメルマキートを一口飲む。が、あまりに暑かったので、すぐに半分以上一気に飲んでしまった。喉が渴いていたのだ。

湯浅さんは柔和な顔のまま何も語らずそんなオレを見ている。

…あれ…、おかしいなあ……なんか、急に、眠気が…？

こんな時になんでオレ、眠くなっちゃうかなあ…。ぶんぶんぶん…と頭を振って睡魔を追い出そうとするが、到底かなわない。

「すみ…ません…、なんか、…眠くて…」

コーヒーって、目を覚まさせる効力があんじゃないのか？ でも全く正反対に、オレの瞼は今にも勝手に閉じようとする。

「真咲様が来るまで、少しお休みになっではいかがですか？」

湯浅さんの優しくささやくような声が、どんどんフェードアウトしていく…。

とうとう、オレは、意識を手放した…。それ以降のことは、次に目を覚ますまで、何も覚えていない…。

逸の腕がだらり、とスタバのソファの外に落ちる。…すっかり熟睡しているようだ。湯浅は逸の腕を戻してやる。が、全く起きる気配はない。

につこり。湯浅はその口元にまた笑みを浮かべ、自分の胸のポケットから携帯を取り出し、どこかへ掛ける。

「…加藤？ 大至急、車を回してくれますか？ …そう。S 駅前のスターボックスまで。」

「栄子、あれ…お前の友達じゃないか？」

時は十数分後、S 駅前スクランブル交差点、スターボックスの横の雑貨屋でローズクォーツの指輪に目を奪われて手にとって見ていた栄子は、彼氏のその声に振り返る。

「え？ なに？」

栄子が指輪を元あった場所に戻して彼のそばに行くと、彼はスターボックスの入口付近に目を向けている。つられて栄子もそのほうに目をやる。

「…逸くん？」

…制服は、稜星の制服。うなだれているので顔はよくわからないが、褐色がかった茶色い髪の色とかほっそりとした体のラインとか…逸に似ているといえば似ている。かちつとしたスーツ姿の三十代半ばの男性が、その肢体を抱えている。もう一人の、スーツの男性…こちらはノーネクタイで、ちょっと堅気っぽくはない感じの男が、横付けしてあるワンボックスの車のドアを開けている。

「意識、ないような感じだな…。」

栄子の彼氏が呟く。…妙な胸騒ぎが、栄子の体を駆け巡る。…なにが、起こったの？

はつとして栄子は逸の元へと駆け寄っていく。しかし逸はワンボックスカーに乗せられて、車は発進していつてしまった。

「なんか、嫌な予感がする…。」

栄子は去っていったしまった車の方向…綺麗過ぎる夕焼けの方向を見つめて、そう呟いた。

## #6 タガタメ (4)

突然鳴り響く携帯の呼び出しのメロディ…鞘根虹香の“つきのかみ”。律は、アイスの棒をくわえたまま、テーブルに置いてあった自分の携帯に手を伸ばす。

「はいはい…栄子？」

受話器を耳にして、ごろんとソファに横になる。テーブルを挟んだ向こうでは、由がピアノの練習をしている。

「…なに？ 早口すぎてわかんね。もちよつとゆっくり…」

『逸くん今何処にいてるかって聞いてるの！』

怒ったような栄子の声が、律の耳に突き刺さる。へ？ 当然律はまだ状況を把握できていない。

「さあ…、ウチにはまだ帰ってないみたいだけど？」

『逸くん、何者かにさらわれたかもしれない！ S 駅前のスタバで、男二人組に車に乗せられてた！ 多分逸くんだと思っただけ…携帯に電話しても、全然出ないし！』

「ハア？ なにそれ。」

『意識ないみたいを感じだった！』

矢継ぎ早にまくし立てる栄子の声に、律もさすがにこれはなんか



あつたに違いない…と思った。

「ちよつと待つて…由、逸つて、どこに行つてるか知つてる？」

律はとりあえず由にそう聞いてみる。と、由はピアノを弾く手を止めて、しばらく首を傾げてから言う。

「帰る時に、靴箱のところで智史くんと一緒にいたのは見たよ。そのあとは知らないけど…」

律はさんきゅ、と短く由に言つて、栄子との電話に戻る。

「とりあえず、智史に聞いてみるよ。なんかわかつたら連絡する。」

通話を終え、アイスの棒をゴミ箱に投げ入れて、すぐさま律は智史に電話をする。

「もしもし、智史？ お前、今逸と一緒にいる？」

「逸？ …ううん、今は一緒じゃないけど？」

「今は？ いつまで一緒だった？」

律が問い掛けると智史は考えて、素直に答える。

『一時間半くらい前まで？ 逸、真咲から電話があつて、なんか財布落としたみたいだから迎えに行つてくるつて、地下鉄のT駅で別れたよ。…なに？ なんかあつたの？』

真咲からの電話で…？ 律は首をかしげる。さっきの栄子の電話

では、真咲のことは全く話に出ていない。逸は、真咲に会ったのか？ それとも…？

「智史、今何処にいる？」

『家。』

「わかった。今からそっち行くから。行ってから、詳しく話す。」

律は手短に電話を切る。由が、そんな律の様子を不安げに見ていた。

「…いっちゃん、なにか、あったの？」

わけもわからずおろおろしている妹の頭を優しく撫でて、律は笑って見せる。

「…なんもないと思うけど？ とりあえず智史のそこ行ってくるから、もし逸から連絡あったら電話して。あ、真咲から連絡あったりとか、帰ってきたりでも。」

そう言い残して、律は智史の家に走る。

「なんだかわかんないけど、とりあえず逸と真咲の携帯に掛けてみた。二人とも出なかったけど…。」

律が智史の家に着くと、智史がそう言いながら出迎えてくれた。やっぱり、なにかあったんだ。律は確信する。

徒歩で五分の道程をダッシュで三分でやってきた律は、苦しそうな息を整えてから、そのまま玄関先でようやく智史に事情を告げる。

「実はさ、…さっき栄子から電話があって…」

律の話を最後まで聞いて、智史は即座に思ったことを口にする。

「ゼロプロ…?」

「…って、あの名刺のヤツ?」

「うん、逸と別れる前、二人で紫さんに会いに行ってたんだ。ひよっとしてあの名刺の人知ってたりしないかなって…確率はゼロに近いと思ってたんだけど。」

智史は逸とKMミュージックプロダクツに行って掴んだ情報を律に聞かせる。

「…嘘…マジで? あの名刺のヤツ…鞘根虹香の…?」

「なんで逸に目をつけてんのかはわからないけど…女の子たち使ってたあんなバイトさせて…逸の周りに女の子たちがいなくなったら、最後は逸に接触するのは間違いない。」

「でも…じゃあ真咲は? 真咲から電話があって、逸は行っただろ?」

「うーん、と智史が渋い顔をする。律はまさか、とさらに眉をしかめる。」

「…真咲は真咲で、遺産の関係で危ない目にあつてたり…？」

律が最悪な想像をしたその瞬間、律の持っている携帯が鳴り響く。場違いか、そうでないのかわからないが、鞘根虹香の“つきのかがみ”。逸か？ それとも真咲？ 淡い期待を抱いて律は電話に出る。

「はい…あ、志信ちゃん？」

予想外の相手だった。

『律先輩、逸先輩って、今一緒ですか?!』

血相を変えていそうな電話の向こうの声…栄子の時と一緒にだ。

「逸を、どっかで目撃したの?!」

なるべく冷静には思ったものの、語尾は荒々しくなってしまった。

『見たのはあたしじゃないんですけど…S駅前のスタバで、倒れたの運ばれてるの見たとか、S区のビルに、担ぎ込まれるの見たとか、そういう情報がいつぱいきてて…。例の、ストーカーの事件と絡んでるんじゃないかと思って…。』

「S区のビル?! …詳しくビルの名前とか位置とか、わかる？」

律が尋ねると、受話器の向こうで志信はすぐに答える。

『S区の…環状線沿いの、喜多岡ビルっていう所らしいです!』

「ありがと！　またなんかあったら連絡して！　あ、志信ちゃん、真咲は？　真咲はどっかで見なかった？」

『…小林くん？　小林くんは…わかんないです。小林くんも、なんかあったんですか？！』

「いや、いい。ありがとね！」

律は電話を切って智史と顔を見あわせる。S区、環状線沿い、喜多岡ビル。

「とにかく急げ！！！」

二人同時に、家を飛び出す。

## # 6 タガタメ (5)

…頭が、ガンガンする。

朦朧とした意識の中で、痛みの感覚がまず襲ってきた。

えっと…、オレ、何してたんだっけ…。

意識を手繰り寄せようとすると、余計頭が痛い。

感覚があまりハッキリしないけど…う…ん、オレ、今…寝てる？  
何処かに…横たわってる…硬いところじゃない…ベッドかソファ  
か…そんな感覚。

目を開けようとする。ここ…暗闇なのか…？ ううん、多分…違  
う。…ただ、ひどい頭痛が伴って、目を開くことができない。

五感が完全には戻らない、そんな状態で、扉か何かが開く音と、  
女の人…女の子なのかも…の声が聞こえた。

「…加藤さん？ …！」

どこかで聞いたことのあるような…でも頭が痛くて思い出せない  
…。とにかく、名前を呼んだ後に、驚いて息を飲む、そんなかすか  
な音がした。

なんだろう。思った矢先、今度は男の人…というかこれはどっち  
かという男の子っぽい声がある。

「久しぶり…やっと会えたね、香居。」

この声も聞いたことがある…っていうか、これ…この冷たい氷のように刺さる声…いつも聞いている声とは真逆だけど…この声、まさか…。

「…真、咲…」

オレがまさかと思った声の主の名前を、さっきの女性の声がかすれた息のように呟いた。

少しずつではあるけれど、頭痛が治まってくる。と同時に、だんだん思い出してきた。オレ…S 駅前のスタバで、湯浅さんと会って…。その前に、何でスタバに？ …ああ、そうだ、真咲。…ってことは…この女性の声は、真咲のお姉さん…？

「ハッピーバースデー。約束どおり、プレゼントを持ってきたよ。」

真咲の声。ほんとに…真咲の声か？ そう思うほど、いつもの穏やかで人懐っこい声とは正反対の、冷淡な声。

「…もう…やめてって…言っただじゃない…。」

力ないお姉さんらしき女性の声。震えている…綺麗な声。この声…何処で聞いたんだっけ…。

その声を見殺すようにまた真咲の声。

「香居、ここ久しぶりなんじゃない？ 懐かしいでしょ、かつての

居場所。…もうここも僕のモノだけだね。…知ってた？ 香居はまだ、“小林”の庭から、抜け出せてはいないんだよ。」

くすくす…冷酷な笑い。

「どう…いう、こ、と？」

震えたままの声。聞き取れるかどうかの、小さな声。

「…香居がここから今の所に移ったのも、今いる香居のポジションも、みいんな“小林”の力によるものだってこと。」

笑ったまま真咲が答える。

…一体…どういう状況なんだ…？ わけが、わからない。考えようとすると、治まってきた頭痛がぶり返すけど…好奇心のほうがつてくる。

オレは再び目を開けようとする。が、やはり頭痛に襲われる。…だいぶ視覚以外の感覚は戻ってきた。…でもおんと尋常じゃないだるさ…なんだ、これ。体を動かそうとしても、力が入らない。ていうか、コントロールできてない？

やっこの思いで口を開いてみる。息ができた。なんとか、動く、か？

「あー…」

声が出せた。ちょっとかすれて出にくい。喉が、カラカラすぎてイガイガする。



「真咲様、逸様がお目覚めのようです。」

この声は…湯浅さんだな。オレの声に気づいたようだ。…近くに  
いるのか？ 人の気配を感じる。

「ちょうどよかった。でもまだ具合悪いよね、きつと。」

次になんとか目を薄く開くことができた。…うわ、眩しい…。蛍  
光灯の光？ チカチカしてまた頭痛が…。

「手荒な真似をして申し訳ございません。もうしばらくすると頭痛  
もなくなりますから。急に動いたりせずに、しばらく横になってい  
たほうが…。今、お水をお持ちいたしますので。」

湯浅さんの声がそう言って、オレから離れていく気配。なんなん  
だろ…一体…どういう状況に、オレはいるんだろ…。わけがわか  
らない。混乱。

ゆっくりと、目が慣れてくる。頭痛もましになってくる。最初に  
目に入ったのは天井。そして目を下ろすと、がらんとした事務所の  
ような部屋…今は使われていないみたいで、家具っぽいものはない  
からうじてあるのは、オレが横たわっている三人がけの古ぼけたソ  
ファと、真咲が座っているこれまた古ぼけた肘掛付きのソファだけ。  
テーブルはない。床は今の時代には珍しく、板張りだ。あちこち磨  
り減っていて、廃校の教室のよう。窓の外はもう薄暗く、周りには  
林立するビル群。街のネオンがきらめきはじめている。ここだけ、  
何十年も前にタイムスリップしたみたいな部屋だ。

まだボーっとする頭であれ、と疑問に思う。真咲はそこにいるん

だけど…あの女性…お姉さんは？　どこかで聞いたことのある綺麗な声の持ち主が、視界に入っていない。

ああ、首を動かせばいいんだ。オレは少し体を起こしてゆっくりと振り返る。

…声の主は、真後ろにいた。

息が、止まるかと思った。

声、聞いたことがあるはずだ…。

そこにいたのは…テレビでしか見たことがないけど、間違いない。見間違えるわけなんかない。

…鞘根、虹香。ホンモノだ…。

同じ頃、律と智史は志信から聞いた場所、喜多岡ビルの前にいた。

「…なんかすっごいレトロなビルだな…。」

「うん。昭和三十年代っぽいよな…。ほんとにここに、逸がいるのか？」

周囲のビルとは明らかに違う、レトロと言えば聞こえは良いが、ビル…と言っには貧相なビル。両隣のビルに挟まれて、今にもつぶされそうだ。

律は建物を見上げる。四階建ての、三階に灯りがついている。それ以外は暗い。もう使われていないのだろうか…。

「いるとしたら、三階だよな。」

律が言うと、智史も頷く。建物の入口を覗き込み、ポストがあるのに気づく。

「三階：何だろう、何か書いてあって、後から消した跡がある…読めないな…。」

「とにかく行くしかないだろ。」

律はそう言っ、建物へと入っていく。智史も後を追いかける。

古い階段を登っていく。電気はついていない。ミシミシと嫌な音がする。まだそれほど真っ暗ってわけではないが、肝試しのようだ。

三階にたどり着いた二人は、電気のついた部屋があるのに気づく。いるとしたらそこだ。律と智史は目配せをする。

「…でも、どうやって入るんだよ…。」

智史が困惑しているのをよそに、律は躊躇することなく行動に出る。

ドアの前まですたと歩いていって、大声を出した。

「こんにちはあゝ！ 宅配ピザでえす！…！」



## #6 タガタメ (6)

わけがわからないピークの状態で、それでもホンモノの鞘根虹香に見惚れていた矢先、彼女が立っている背後のドアの向こうで、大きな声がした。

この声…律？

「…逸さんの携帯って…GPSとかで律さんと繋がってます？」

真咲が呆れたような表情でオレに問う。そんなもん繋がってるわけないだろ！ 小さい子供と親じゃあるまいし…。

「加藤、いいから開けて。」

真咲がドアの横に立っていた男にそう言う。オレはその時初めて鞘根虹香の隣りに人が立っていたことに気づく。この男の顔…加藤って…！

繋がった。名刺の男！ ゼロプロの、加藤達弘！ 鞘根虹香のお付きの人！

「いらっしゃい律さん。ああ、智史さんも一緒なんですね。」

「真咲…と、ええっ？…！」

「鞘根…虹香？…！」

部屋に入るなり律と智史が叫ぶ。でもこいつらなんでここに…？  
もう、わからないことだらけだ。ピークなんかとづくに越えてる  
っての。

「真咲…これ、どういうこと？ 説明してくれよ。」

とうとうオレは真咲にそう言っていた。手繰り寄せた糸は予想外の  
ところで繋がったけど…なんでここで繋がってるんだ？ 絡むは  
ずのない真咲がなんで、絡んでるんだ？

「いいですよ。」

真咲が微笑む。いつもの柔らかい微笑み方じゃない。権力者のよ  
うに、勝ち誇ったような、優越の笑み。これが…真咲？ 間違いな  
く真咲の顔なんだけど…別人。いつもの真咲が水なら、この真咲は  
火。陰と陽…両極にある双子の兄弟のようだ…。

「何から話そうかな。あ、香居、もう少し中に入ったら？ 律さん  
と智史さんが入れない。」

真咲に“香居”と呼ばれた鞘根虹香が、おずおずと真咲の近くに  
歩み寄る。律と智史が、オレの近くに寄ってくる。オレは体を起こ  
して座り直す。

「ああ、まずはじめに紹介します。彼女は鞘根虹香…はご存知です  
ね。本名を小林香居といって、僕の、今現在唯一血の繋がった肉親  
…たった一人の姉です。」

律と智史が声も出せないほど驚いている。オレもそうだ。まさか、  
まさか真咲のお姉さんが鞘根虹香だなんて…想像すらしてなかった。

確かに、似てるよねって話はしたけど…まさか姉弟だなんて…。

「僕の家、今遺産相続で揉めているって話、ご存知ですよね。」

真咲が話し始める。それは、知っている。ウチに真咲が暮らすことになったそもその理由はそれだった。

「亡くなった祖父の遺産は、僕と姉、この二人しか相続人がいないんです。なのに祖父は、全ての遺産を僕にという遺言状を残して逝ってしまった。…香居にも相続権があるのに。法律上では、遺言状にたとえそう書かれていても、遺留分について、割合は減るんだけど、香居には遺産を受け取る権利がある。だから香居にその遺産を受け取るように言ったのに…香居は相続を放棄してしまったんです。」

真咲がそこまで言い終えると、虹香ちゃん…香居ちゃん、というべきなのか？ 彼女が真咲を睨みつけて、言う。その瞳には憎しみすら感じられる。…姉弟なのに…？ …こんな鞘根虹香の表情…テレビでは見たことがない。いつも清楚で可憐なイメージの歌姫・鞘根虹香…。でも今は、違うんだ。鞘根虹香じゃなくて、真咲の姉、小林香居の表情。

「…知らないわよ、お祖父さまの遺産なんか。どうせ血生臭い手段で築き上げた汚れたお金…。それに…あたし、知ってるんだから。お祖父さまが真咲にだけ遺産を残したい本当の理由。…湯浅さんは知っているんでしょう？」

香居ちゃん、は、意味ありげに湯浅さんにそのままの視線を向ける。湯浅さんは相変わらぬ柔和な微笑で首をかしげる。…今になっと思う。この人…温和で優しい人なんかじゃない。柔らかいのは、

表情だけだ。内面は違う。

香居ちゃんは再び真咲に視線を戻し、吐き捨てるように言う。

「あの男は…小林真鉦<sup>まさかね</sup>は、あたしにとっては祖父だけど、真咲、あなたにとっては祖父なんかじゃない！ 戸籍上は祖父になっているけど…本当は父親よ！」

…は？ ちょっと、待って。それは、どういうこと？

意味がわからないまま、話が進んでいく。

「…なんだ、香居、知ってたの。」

真咲が短く溜息をつく。そして香居ちゃんに、冷たく微笑みながら尋ねる。

「…いつから知ってた？」

香居ちゃんは唇を噛み締めて、少しの間黙っていた。そうして、大きく嘆息して、答える。

「お母さまが亡くなって二年くらい経った頃…お母さまの部屋で、鍵つきの古い日記を見つけたの。すぐに思い出したわ。お母さまが亡くなる直前に、誰にも内緒で、ってあたしに鍵型のネックレスをくれたこと…。それがその日記の鍵だったのよ。…読み始めて、愕然としたわ。お祖父さまは…あの男は、…自分の息子の妻を…。考えただけで吐き気がするわ。もともとあたしは、お祖父さまのこと、苦手だった。真咲はよくなついていたし、お祖父さまもものすごく可愛がっていたけど…あたしは氣に入られてなかったし、あたしもお



祖父さまのこと、好きじゃなかった。その理由が、はつきりわかった。気がついたらその日記とお財布だけ持って、家を飛び出してた。」

「だんだん、なんとなく、わかってきた。昼ドラにあるようなことって…ほんとにあるんだ…。」

「お父さま…真咲、あなたにとってはお兄さま、ね。小林真俊まさとしが事故で亡くなったのも…本当に事故だったのかどうか、疑問だわね。」

ニヒルに笑ってみせる香居ちゃん。こんな表情も…初めて見る。決して、鞘根虹香のときには見せない顔…これが、ほんとの、素顔、なんだろう…。」

「…あの男は、自分が欲しいものはなんだって、どんな汚い手を使ったって手に入れてきた。そんな風にして培った遺産なんて、あたしはいらない！ 真咲、あなたの本心はわかってる。あなたはあの男と同じ。お金や地位や名誉、それだけあれば世界は動くと思ってる。」

「だってその通りじゃない。さつきも言ったでしょ、香居。香居はそんな“小林”を嫌って家を出たけど、結局は“小林”から逃れられていない。香居が所属した最初の事務所…この場所、この部屋に在った今はなき八坂プロを、ゼロプロが吸収合併したから今の鞘根虹香があるわけでしょ？ ゼロプロに八坂を吸収するよう手を引いたの、“小林”だよ。」

「…嘘…。」

香居ちゃんが絶句する。真咲は続ける。

「香居が行方不明になってから、僕一生懸命探したんだよ。八坂の社長さん、お父さまとお母さまの古い友人らしいね。どうやって香居がそこにたどり着いたのか、今までわからなかったけど…そうか、お母さまの日記、だったんだ。そこに八坂のアドレスが乗ってたんだね。」

「社長は…生前お母さまからあたしの歌のことを聞いてたらしくて…あたしのこと、ほんとの娘のように可愛がってくれた…。それなのに、ゼロプロに吸収合併されて…行方がわからない…まさか社長も、お父さまみたいに…」

大粒の涙が、香居ちゃんの瞳に今にも落ちそうに溜まっている。

「八坂さんは多分どこかで生きてるよ。探そうか？ でも結果的にはゼロプロに吸収されてよかったじゃない。香居は一躍有名になって、今じゃ日本を代表する歌姫…。八坂じゃここまでの伸びはありえないよ。こんな小さな事務所じゃ無理無理。ま、ゼロプロにいてだけでも、鞘根虹香はここまでにはなっていないかな。やつぱり“小林”のバックアップがあったからね。マネージャーの清水も、そこにいる加藤も、香居の周りの人間は、みいんな“小林”の息がかかってる。」

くすくすくす…真咲がおもしろそうに笑う。そして香居ちゃんに追い討ちをかける。

「ね、お金・地位・名誉。それがなきゃ、香居、今の香居…鞘根虹香はいないんだよ。香居が嫌悪したものが全て。それで世の中は動いている。」

…とうとう香居ちゃんの目から涙が流れ落ちた。

「ほんとに…真咲、あなたはあの男と同じなのね…。お金・地位・名誉…そんなものですぐ人の心を動かそうとする…。だから相続放棄したあたしにだって、何でも欲しいものをあげるとか、そういうことを平気で言うのよ！ “お礼” だなんて言って、要するにホントはあたしに対する“見返り” なんじゃない！！」

血を吐くような香居ちゃんの声が、何もないこの部屋に響きわたる。…つかの間の静寂。

「…だけど香居。香居だって、僕のその提案に、乗ったじゃない。」  
くすり。真咲が冷たく言い放つ。

「…ひよつとして…」

ずっと腕組しながら二人の話を聞いていた智史が、静かに口を挟む。

「虹香ちゃんの欲しいものって…逸？」

ええ?! オレはびっくりして智史を見る。同じ表情で、律も智史を見ていた。

「…さすが智史さん。その通りです。」

につこり、真咲がいつもの可愛らしい表情で智史に笑いかける。

確かに…今の真咲と香居ちゃんの話が、なんでオレに関わってく

るんだろうつて、わけわかんなかった。つまり…香居ちゃんが相続を放棄した代償として、真咲はオレを香居ちゃんにプレゼントしようとした…そういうこと、か？

「…だからあの子…逸の周りの女の子たちを狙った子が、鞘根虹香のサブマネージャーの名刺を持ってたんだ…。」

律がそこにいるゼロプロの加藤達弘を横目で見る。

## #6 タガタメ (7)

絡まってた糸がだんだんほぐれてくる。あまりの衝撃に…怒りすら、吹っ飛んでる。オレのファンの子たちやバイトと称して犯罪まがいのことをさせられていた子たちのことを考えたら…怒らずにいられるかよっつって状況なのに。なんか、頭がパンクしそうだ。

「…あれは…女の子たちを狙ったのは…まさか真咲が考えた…のか？」

オレが途切れ途切れにやっとそう尋ねると、真咲は満足そうに頷く。

「ああいう子たちって、噂話大好きだし、芸能プロダクションとかも好きでしょ？ それにお金はもっと好き。いい案だと思ったんだ。佐々西さんと森さんのネットワークからもヒントを得たし…。いろいろ勉強になりましたよ。」

…本当に、これが真咲なのか？ オレも律も智史も、信じられないという表情しか出てこない。

しばらく沈黙が流れた後、再び口を開いたのは、やっぱり智史だった。

「…でも…どうして虹香ちゃんが逸のことを知ってたの？ 逸、虹香ちゃんと知り合いじゃないって言ったよな？」

オレが返事をする前に律が割って入る。

「当たり前だ。もし知り合いだったら自慢しまくりでうるさいぞ。」

…その通りだけど腹立つなあ…。

すると香居ちゃんがオレを真っ直ぐに見つめる。さ、鞘根虹香がオレを見てる…。思わずドキドキしてしまう。

「母が亡くなったすぐ後だったので…よく覚えています。五年前…一度お会いしましたよね？ あの時…あたし、あなたに救われたんです。あなたはあたしの初恋の人なんです…。そして偶然二カ月ほど前にあなたの姿を電車の中で見かけて…その時もいろいろ精神的につらい時だったので…また救ってくれるんじゃないか、なんて勝手に思っ…真咲に捜して欲しいって、頼んでしまっただけです。たった一度だけしか会ったこともないし、名前すらわからなかったのに…。」

香居ちゃんがオレに向かってそう言っている。…五年前に会った？ オレに…救われた？？ 二カ月前に…電車で？？ おかしいな、てんで記憶がない…。こんな可愛い子に会ったんなら、絶対覚えてるだろうし…鞘根虹香が電車に乗ってたら、間違いなくサインもらうと思うんだけど…。

「…それって、ほんとにオレ？」

首をかしげて尋ねてみる。香居ちゃんは大きく頷く。

「間違いないです。五年前の夏…満月の夜に…小林家の近くの丘で泣きながら歌っていたの…覚えてないですか？ あたしに…『この世にいらないものなんて、ないんだよ、きつと。』って…そう言っ

て、くれましたよね？」

記憶を一生懸命たどってみる。…うう…ん、やっぱり、思い出せない。五年前：小林家の近くで夏つていうと…多分智史んちの別荘に行った時、なんだろうけど…。頭の中の引き出しを必死に引っ張り出しては見てみる。でもそれらしき記憶は見当たらない。

…あかん、頭痛がぶり返してきた。眉をしかめた、その時。

「…それつてもしかして…オレだつたりして…。」

オレと全く同じ顔で、眉をしかめて律が呟くように言う。

「え？」

この部屋にいる一同、みんな啞然として律に注目する。う…んと記憶の糸をたどる律。

「…なんとなく…思い出してきた。そうだ、あの歌…なんか、英語の曲…。ムーン…リバー…ちゃくらららら…？」

律があいまいな歌詞を歌ってみる。と、香居ちゃんは大きく首を上下に振る。

「そうです！ 『ムーンリバー』…！！！」

すると律はその時のことを鮮明に思い出したようで、あー…と苦笑いをした。多分、律にとってはあまりいい思い出ではないみたい。照れが大幅に入った…そんな表情。

「なになに、なにがあつたの？」

律の表情があまりにも意味深なので、茶化して聞いてみる。律は明らかに嫌そうな顔をオレだけに向けて、ちよつと長めの溜息をついてから、話し始める。

「あの頃さ、…ちよつとオレも、いろいろ悩んで…。なんか、一人になりたくて、夜中に智史んちの別荘から抜け出したことがあつたんだ。月がめちゃくちや綺麗でさ。ああいう月を、ほんとに“つきのかがみ”って、いうんだろうな。“せいなるひかりに”じよつかされてく”って…まさにそんな感じ？ 月を見てたら、自分が悩んでることがすごくくだらないことに思えた。そんな時に、綺麗な歌声が聞こえたんだ。月と同じで、澄んだ透明な歌声…でも、ところどころ途切れてて…気になって、声のするほうまで行ってみた。そしたら虹香ちゃん…ううん香居ちゃんが、泣きながら歌ってた。」

「…歌い終わったら、ひとことだけ、言ってくれましたよね。今でもはつきりと覚えています。その台詞で…あたし、命拾ひしたんです。ほんとにあの時、死のうと思ってた。あたしなんかこの世に必要ないって…そう思ってたから…。」

香居ちゃんがさつきまでオレに向けていた眼差しを律に向けて、語る。律は照れ笑いをしながら首を振る。

「言ったこと…覚えてないからアレだけど…でも、多分…オレも君の歌を聞いて、余計自分が悩んでることが小さいことなんだって思つたから、そう言つたんだと思うよ。オレも、助けられたんだよ。」

律と香居ちゃんのやりとりを見てみると…なんでだろう。おもしろくない。てゆーか、腹立たしいって…なんで？ …香居ちゃんが



会いたがってた人がオレじゃなくて、律だったから？

…ううん、そうじゃない。今の話の律のこと…律が悩んでた時期のこと…なんでオレは知らないんだ？ 生まれてきた時から今までずっと一緒に…ずっと隣りにいた律のことでオレが知らないことがあったなんて…。信じられない。子供っぽい独占欲だとは思っけど…自分でも、わからないくらい悔しい。

当然だけど、そんなオレの心境は無視されたまま話は続く。律と香居ちゃんのやりとりを聞いていた真咲が、突然大笑いし始める。ただ見ていたオレも智史も、もちろん律も香居ちゃんも、その声に驚いて真咲に視線を集中させる。

「なあんだ、香居、はじめっから勘違いだらけだったんじゃない。たまたま律さんが逸さんを探してここまでたどりついてくれたからよかったものの…逸さんじゃなくて律さんだったなんて！」

あはははは、とさらに大声で笑う真咲。ただおもしろくて笑つてするというより、苦笑…というか、否定的な笑い。

「…はじめから…勘違い？」

智史がまた冷静に問う。智史はいつも端的にオレたちの知りたいことを代表して聞いてくれるのですごいと思う。便利なヤツだ。

すると智史の問いに真咲が笑うのをやめて答える。

「だって、最初は僕、香居が欲しがっているモノは、智史さん、あなただと思ってましたから。」

「…え？」

智史をはじめ、オレと律も、疑問顔。

「香居の手がかり、少なすぎて…。小林家の近くに別荘があつて、少なくとも五年前の夏、そこに来ていた中学生くらいの男の子で、二カ月前に\*\*線のE駅からS駅まで、女の子連れで乗車していた、稜星学園の制服の男の人…それだけの情報で捜してたものですから。」

…確かに…智史んちの別荘は真咲んちの近くだし、もちろん智史は稜星の生徒だし…。それだけの情報なら、智史にたどり着く？

「そこでとりあえず稜星にもぐりこめれば、智史さんに近づけると思つて。…いろんな人脈を調べていたら、たまたまウチの弁護士の子宮武に、同期の弁護士の子供が稜星に通っているって話を聞いたんです。」

それがオレんち…新藤家だった、って？

「智史さんのことは予想外にすぐ見つかったんですけど…写真を撮つて香居に送つたら、違うって言っじゃない。智史さんじゃなくて…たまたまその隣りに映っていた、逸さんだって。…びっくりしましたよ。」

…真咲はまたおもしろそうに笑う。…ちょっと待て。最初は…智史だと思つていた？

「まさか…あのストーカーは…」

智史が言いかけた言葉。あまりに信じられなくて、智史は途中で言いかけてやめたけど…オレも同じコトを考えていた。オレと律が目を含わせる。律も、同じコトを考えている。

オレたち三人の様子を上から目線で眺めている真咲。にんやりと、嫌な微笑を浮かべてその言いかけた言葉の続きを答える。

「そうですよ。智史さんのストーカーも、僕が指示したことです。あのストッキング、あまりにもわけもなくあつさり退いたでしょう？　そしてすぐに逸さんのファンの子たちが狙われ始めた。僕が、智史さんから逸さんにターゲットを変えたからですよ。」

…信じられないことだらけで、絶句してしまう。確かに…智史のストーカー事件も、ウチに真咲が来てからだった。でも…

「…真咲…走っている智史に憧れて、捜してたつてのは…。」

嘘だったんだ。残りの言葉は、出なかった。出せなかった。その代わりに、真っ直ぐに真咲の目を見る。真咲は目を細めている。

「智史さんが最近小林家の近くの競技場に遠征に来てたこととか、調べればわかることじゃないですか。自分が香居だったらどうやって智史さんに近付くか考えたら、憧れて、ってピッタリだなって…でも、捜してたのが智史さんじゃなくて逸さんだったって知った時にはちよつと慌てましたけど…作戦も大幅に変更しなきゃいけなかったし。逸さんの身边、智史さんよりはるかに派手ですから。」

律と智史、頷いてる…っておい！　そんな納得してる場合かよ！！

「やつと逸さんの周りの女の子排除して香居と引き合わせたら、実

際は律さんだっ たなんて… まだまだ僕も詰めが甘いのかな… ま、こ  
うして律さんは香居の目の前にいる訳だから、終わりよければ、っ  
てことになるのかなあ。 なんにしろ、まだ僕にも足りない部分もあ  
るんだって、今回は勉強になりましたよ。」

真咲はそう言ってひとりで頷いて、窓の外を眺める。 もう、とっ  
くに日は落ちて、夕焼けも消えかかっている。 宵の空を見上げて、  
真咲は腕時計で時間を確認した。

「…じゃあ僕はこれで。 香居、あとは好きにしていいいよ。」

そしてオレたちが呆気にとられているのも気にせず、湯浅さんと  
共に部屋を出て行こうとする。

「あ、逸さん律さん、お世話になりました。 僕の荷物は、明日撤収  
に行かせますから。」

そう言い残して、真咲は去っていく。 真咲の掌を返したような行  
動が、まだ、信じられなくて… オレも律も智史も… 誰も、引き止め  
ることはおろか、声を出すことすらできなかった。

## #6 タガタメ (8)

ボタン。扉が閉まってから、しばらくの間、変な沈黙が流れる。  
オレたち三人と…香居ちゃん…鞘根虹香と、ゼロプロの加藤…変  
な、組み合わせ。

「…虹香、八時から事務所で打ち合わせあるけど…。」

かなり長い間の沈黙を破ったのは、加藤のなんとなく興ざめなそ  
んな台詞だった。香居ちゃんはその瞬間に鞘根虹香に戻って、短く  
頷いた。

加藤の顔を見ると、なんか無性に腹が立ってきた。真咲と湯浅さ  
んが去ってしまった以上、この件に関しての腹立たしき、憤りの矛  
先は、加藤に向かってしまっても仕方がない。

「…加藤、さん。あんたは何で…女の子たちに…あんな犯罪まがい  
のことさせて…。全部、真咲の命令だったっていうのか？ 大人と  
して…考えれば止める方法くらい、いくらでもあつたんじゃねえの  
か？」

一応“さん”付けで問いかけ始めたけど…語尾はかなり、とげと  
げしくなっていた。

オレがにらみつけるように加藤を見てみると、加藤は軽く笑う。

「俺もあの女子高生達と同じだよ。小遣い稼ぎってヤツ？ 小林の  
坊ちゃんは何を考えてそんなことすんのかは俺には知ったこっちゃ

ない。雇い主に言いつけられて仕事をして金を貰う…それが世の中の常識なんだよ？ 社会は金で動いている。今回のことで、それがよくわかったんじゃない？」

加藤はまるで小さい子に言い聞かせるような口ぶりで言う。…世の中、金が全て…？ そうじゃないだろ？ そう思うのは青二才の考えだっていうのか？

Powerじゃない Moneyじゃない… っ、Dia na To Moonの曲が脳裏に鳴り響く…。それをかき消すように、加藤が駄目押しの言葉を付け加える。

「大人はみんな、そうやって生きてんだよ。そういう世の中なの。」

…ぶん殴ってやろうかと思った。それを思いとどまらせたのは、香居ちゃんの声。

「ごめんなさい！！！」

彼女は叫ぶようにそう言って、オレたちに深々と頭を下げる。

「…本当に…ごめんなさい！ あたしが悪いんです。なんて、お詫びをしたらいいか…。ごめんなさい！！！」

ごめんなさい、と、何度も何度もそう言って、頭を上げようとしていない。思わずオレは、そんな彼女の肩に優しく触れていた。…加藤に対する怒りは、どこかに飛んでいつてしまっていた。

「…香居ちゃん、が、謝ることじゃないよ。」

オレがそう言うと、律がオレが触れているのと反対側の香居ちゃんの肩に同じように手を置いて、続ける。

「そうそう。頭、上げて。」

香居ちゃんはゆっくりと顔を上げる。…涙で、くしゃくしゃになっている。こんな鞘根虹香、なかなか見れないよなあ…。

なんてコトを思っていると、今まで黙っていた智史が、急に香居ちゃんに尋ねる。

「虹香ちゃんて、どうして歌手になったの？」

…はい？ 思わず律と二人して智史の顔をまじまじと見る。何で今その質問なの？ 泣き顔の香居ちゃんも、予想外の質問に涙ながらにキョトンとしてしまっている。

「…いや、今のやりとり聞いてて…、小林家から離れたかったんなら、歌手なんて目立ちすぎるものにならないよなあ…って思ってた。だって、テレビとかポスターとか、街中に顔出るし、見つけてくさいつて言ってるようなもんじゃない。…それからDiana Thomas Moonの“光の束”思い出して…。浜田さん…CHISAが歌手になりたかったのは、ただ歌いたかっただけだから、って言うてた。」

智史もあの曲を思い出していたんだ。「オレも思い出してた、その曲。」と律がつぶやくように言った。なんだ、みんな同じこと思ってたんだな。

それはともかく、確かに…小林家が嫌で飛び出したんなら…本気

で失踪したいのなら…見つからないようにひっそりと生きていくのが普通だよな。でも香居ちゃんはそうしなかった。前の事務所のことはあまりよく知らないから、ゼロプロに入る前はたいして売れてなかったのかもしれないけど…それでもどこかに顔くらい出るだろう。いくら芸名で名前を伏せて、プロフィールも一切公開しなかったとしても…。

涙を拭って香居ちゃんがポツリと答える。

「…同じです。」

しゅん、と鼻のなる音。こんな時になんだけど、そんな表情も可愛い。

「…昔から、歌手になりたかった。歌いたかった。八坂さん…前の事務所の社長が、小林家から守ってくれて…約束してくれたから…。ゼロプロに所属してからは…しばらくびくびくしてたけど…連れ戻されそうな様子がなかったし…。なにより…歌えるだけで、幸せだったから…。」

歌えるだけで、幸せ。

その思いは、虹香ちゃんの歌声を聞いていればわかる。

そんな思い…お金じゃ買えない。やっぱり、世の中は金だけじゃない。

「だったら、真咲が、小林家が何をしてこようが、何を言ってこようが、関係ないよ。今の虹香ちゃんの位置に、小林家の力とか、ゼロプロの力とか、それはあったかもしれない。でもそんなの、どう



でもいいと思うよ。虹香ちゃんは虹香ちゃんのやりたいことをやればいい。歌えるだけで幸せって、すごいことだよ。」

智史のヤツ…いいこと言うなあ…。ちょっと悔しい。

「それと。虹香ちゃんの歌は、虹香ちゃん自身の為だけじゃなくて、それを聞いた人の為にもなってるってこと。そうじゃなきゃ鞘根虹香がこんなにも支持されてるなんて嘘だよ。みんな虹香ちゃんに癒されてる。昔オレが香居ちゃんの歌声を聞いて、癒されたように、ね。」

今度は律だ。ちくしょうみんないいこと言いやがって。こうなったらシメはオレか？

「だ・か・ら。真咲のことは気にせずに、今までどおり歌ってよ。オレたちはみんな、鞘根虹香の歌を待ってる。癒してくれるのを、待ってる。…それでもどうしても香居ちゃん自身が癒されないなあって感じたら、ここに連絡して。」

オレはそう言ってポケットから紙切れを出す。いつも女の子たちに配っている、オレの携帯番号とメアドの書いた紙。それについて、律の携帯番号とメアドも付け加えて、香居ちゃんに手渡す。

「こっちがオレので、こっち側がコイツのね。どっちも二十四時間受付だから。」

この辺は手馴れたもんで、ためらいがちな香居ちゃんの手の中に、ぎゅっとその紙切れを握らせて、ウインクしてみせる。

「…出たよ営業スマイル…。」

律がしらじらとそう言うが気にしない。それもいつものことってコトで。

「虹香、そろそろ時間。」

また加藤が興ざめなことを言う。でもほんとにタイムリミットらしく、香居ちゃんは虹香ちゃんに戻ってうん、と頷く。そうして、オレの手渡した紙をもう一度ぎゅっと握り締めて、この部屋を後にしようとする。

出て行くこうとして、香居ちゃんは振り返る。

「…あたしも…、先日歌番組の収録で、Diana To Moonさんと一緒に…。あの曲を初めて聴いて…気付いたの。あたしが真咲に頼んだことは、間違ってるって。そのあと真咲に止めるように電話したんだけど…間に合わなかった。本当に、ごめんなさい。」

そう言って、もう一度深々と頭を下げる香居ちゃんの顔は、完全に鞘根虹香の顔だった。

Powerじゃない Moneyじゃない そんなんじゃない 手に入らない 君の愛…

オレの頭の中に、再びその旋律が鳴り響く。きっと律の頭の中にも智史の頭の中にも、同じ旋律が流れていたことだろう。

「…コレにて一件落着、ってか？」

すっかり夜になってしまった空を見上げて大きく伸びをして、オレは言う。

「…さつきから携帯のバイブ鳴りまくり…うわ、栄子と由と志信ちゃんから連続で三十四件???」

律が携帯の画面を見てうんざり顔。

「逸の携帯なんてもつとすごいことになってると思うけど?」

智史が言う。え? でも全然ブルってなかったけど…?

オレはポケットから携帯を取り出して画面を見る。

「あ。」

「えらいことになってる?」

律がおもしろそうにオレの携帯を覗き込む。

「…充電切れてた…。」

ははは、とカラ笑い。すると律と智史が呆れ返る。

「いつからだよ! そんなに繋がらなかったのかよ!!!」

「…あーもう、なんか拍子抜け。」

笑って誤魔化すしかないので笑っとく。

「…とりあえずその三人にオレからメール送つとくわ。テキストに誤魔化して送つときゃいいだろ？　こーいう時の嘘八百、ってね。」

「あ、由と志信ちゃんにはテキストでいいけど、第一発見者は栄子だから、ちゃんと説明してやんなきゃ。また後で文句言われんのもやだし。オレから送つとくわ。」

そんな会話をしながら、ビルの階段を下りていく。…ボロい部屋だとは思っていたけど、ビルごとアンティークだったんだな…。

その日以来、真咲は新藤家には戻らなかった。由によると、その日の夜七時頃、親父からいきなり小林家のゴタゴタが片付いたので真咲は帰ることになったと連絡があったらしい。さすがというかなんというか、行動が早いもんだ。

次の日は終業式。終わって家に帰ったら、真咲の荷物は全てなくなっていた。

それより。

夏休みを前にして、ギリギリ女の子たちの変な噂というか誤解も解けて、予定通りの夏の予定を立てることが出来てよかったよう。明日からまたデート三昧で忙しい。嬉しいことだ。夏休みはこうでなくっちゃね。

…そのあと。

ワイドショーで虹香ちゃんが突然ニューヨークに留学するという  
ニュースを知ったのは、夏が終わる頃だった…。

## #7 エピローグ (1)

その日あたしは、空港の国際線出国ロビーのソファに座っていた。

ニューヨーク行きの手ケットを手にし、手続きを終えてから、まだ出発まで少し時間があるので、こうして座ってぼんやりと行きかう人々を眺めている。

夏の出国ラッシュもちょっと前に終わったし、平日だからか、そうたいして混雑はしていない。むしろ空いているほうなのだろう。

ほとんど荷物は全部先に送っちゃったし…およそ渡米するには身軽すぎるあたしの格好。いつもとは全然違う、つけまつげバリバリの気合いの入ったメイクして、金髪ショートウィッグつけて、さらにその髪の毛に蛍光ピンクのメッシュ入れて、白黒ボーダーのチユーブトップにショッキングピンクのシャツ合わせて、超ミニのデニムスカートとウエスタンブーツ、ヴィトンのモノグラムマルチカラーのショルダーっていう、普段のあたしからは想像できないスタイル。

本来の姿じゃないのに、これが一番落ち着く。こういう格好だと、あたしはあたしじゃなく、そこら中にいるただのちよつと派手な女の子の一人…その他大勢の中の一人に過ぎないから。

こうしていれば、あたしだって絶対バレない。誰一人、気に止める人もいない。

…はずなのに。

「あつ、いたいた！ 香居ちゃん！！！」

カオリちゃん…て、あたしの本名。カオリなんて名前、いくらでもいるから、あたしのことじゃないかもしれない…そもそも、今日この時間にあたしがここにいること、ごくごく限られた人しか知らないはず…。ていうか知れないように、今日にしたのに。

普通なら無視していたはずなのに、顔を上げたのは、この声に聞き覚えがあつたから。

まさかと思つたけど、その声の持ち主は、あたしの想像通りだった。

顔を上げたその真正面から、走ってくる…三人。あれ、四人？

「…逸さん、律さん、大石さん…？ なんで…？」

目の前には息を切らした三人と…初めて見る、綺麗な女の人…あたしより少し年上…逸さんたちと同じ年くらい？ その辺のアイドルなんかより全然可愛い…っていうか、清楚な感じ。何もかも謎に包まれていて陰のある鞘根虹香とは違う、正統派の、陽だまりのような可憐さ。

事態が飲み込めなくてあたしはソファから立ち上がって疑問顔で逸さんと律さんの顔を見る。二人とも息を整えて、同じように笑う。やっぱりそつくりだ、この二人…。間違っちゃうのも、無理はない…よね？

「昨日いきなり真咲からメールがあつてさ、香居ちゃんが今日のフ

ライトで発つから、よかつたら見送りに行つてやつてくれって。」

「ビックリしたよ。ワイドショーなんかの報道では、先週あたりに渡米したつて言つてたから、もうてつきり日本にはいないんだと思つてた…。」

「…ま、さき…が？」

二人の話を聞いてさらに驚く。真咲が…あたしに彼らを会わせるために？

「だつて…確かに真咲には今日のこと知られてると思うけど…。あたしこんな格好だし…今まで誰にもバレたことないのに…。どうして…？」

いろんな疑問が頭の中でぐるぐる回る。何から聞いていいのか、何を聞いていいのか、それすらわからない。

「真咲からの添付ファイル。多分こんな感じで空港にいるから、つて。」

そう言つて逸さん（？ 律さんかも…）が携帯を見せてくれる。その画面には、ちよつと前のイケイケな格好をしたあたしの画像。

「…これ…、清水さんにしか送つてないのに…。」

言つてから気付いた。そうだ、マネージャーの清水さんも、小林家の息のかかった人だったんだ。真咲がコレ持つてても、何の不思議もないんだ。



「コレ見て思い出した。電車でオレのこと見かけたって…覚えてるよ、この子なら。」

「…そんな電車でちよつと見かけただけの女の子のことよく覚えてるな…。さすが逸。」

「だって可愛かったから…まさか鞘根虹香だとは思ひもなかったけど。」

大石さんの呆れ顔にちろつと舌を出して肩をすくめて笑う逸さん（こつちが逸さんで合ってた）。そんな表情がまたカッコいい。

「ま、それはともかく。これが真咲から香居ちゃんへの、ほんとの誕生日プレゼントなのかも。…真咲、やり方は問題あるけど…香居ちゃんに、何かしてやりたいって気持ちは、ほんとなんだろうね。」

律さんがあたしに微笑んで言う。真咲が…あたしに？

「あれ以来真咲からメールなんか来たことなかったのに、昨日いきなりだもん、ビックリしたよ。鞘根虹香の渡米の話題は先週ワイドショーで見たばかりだったし、週刊誌でも見たしね。…またなんか畏かとも思ってたけど、今更もうなんか仕掛けてくるわけないかなあなんて。で、騙されたと思って来てみた。よかった、ちゃんと会えて。」

騙されたと思って…って。夏休みって八月三十一日まで、ですよ…？

「…平日のこんな時間…学校、授業中…じゃないんですか？」

いきなりあたしが現実的なことを口にしたら、三人…彼女を含めて四人、顔を見合わせて苦笑い。言ってから気付くあたしもあたしだけど、四人とも、私服だ。稜星って…私服オツケーの学校じゃ…ないよね確か。

「気にしない気にしない。香居ちゃんのためなら、一日くらいどつてことないよ。」

「でももしあたしがいなかったら…？」

「レストラン街でご飯でも食べて帰ったかなあ？」

「それにさつき律が言ったけど、真咲の香居ちゃんに対する思いは、まあやり方はどうであれ、ホンモノなんじゃないかなあって思つて真咲にとつて香居ちゃんは、この世で唯一の肉親だからね。おれたちに意味なくガセ掴ませるほど、真咲悪いヤツじゃないと思うし。」

大石さんがそう言つて笑う。なんて柔らかい表情…。真咲にあんなことされたのに、怒つてないの？ 逸さんも律さんも…どうして怒らないの？

あんまり全員穏やかに笑っているの、あたしはいたたまれなくなつてきた。あの時も全身全霊で謝つたけど、またさらに深く深く、頭を下げていた。

「…本当に…ごめんなさい！！…あの子の…真咲のしたことを思うとごめんなさいなんかですむわけはないんですけど…っ、ごめんなさい！」

もうこれ以上頭は下げれない。でも、こんなじゃ足りない。

「…もういいんだってば、香居ちゃん。」

優しい、逸さんの声。

「頭、上げようよ、ね？」

これは律さんの声。と、ゆっくりとあたしの体を起こす、優しい腕。

促されて顔を上げると、やっぱり皆さんは穏やかな表情。

「真咲はさ、そういうトコでそういう風に育てられたんだから…これからもそういうトコで生きていかなきゃなんだろうから…、こんな言葉で片付けたくはないけど、仕方ない、よね。」

「真咲のしたことは確かに許せない。でも、いつまでも怒っててもねえ。何も生み出さないし。」

「それよりさ、真咲のおかげでこうして香居ちゃんと出会えた。そちのほうが大きいよ。」

「たとえ演技だったとしても、真咲くんの表情って、優しかったよ。それって、ほんとに全く優しさのない人にできる表情じゃないと思うんだ。」

大石さん、律さん、逸さん、そして綺麗な顔の彼女が、続けてあたしに言ってくれる。彼女、真咲のこと知ってるんだ。っていうか、全部知ってるのね。

彼女のことをじいっと見ていると、ああ、と彼女が肩をすくめた。

「ごめんなさい、自己紹介してなかった。沢見栄子といいます。この三人とは友達で…。虹香ちゃんとじゃなく、香居ちゃんと友達になりたくて、ついて来ちゃいました。」

「ごめん、来なくていいって言ったんだけど。」

「なによ律！ あたしだって香居ちゃんと仲良くなりたいたんだもん！」

「ただのミーハーだろ？」

「違うわよ！ 虹香ちゃんとじゃなくって言ったでしょ！！！」

律さんと言い合う栄子さん。なんか、漫才の掛け合いのように息ピッタリ。

…ああ、そうか。そういうこと、なんだ。

納得したその時、あたしの乗るニューヨーク行きの便の搭乗を促すアナウンスが流れる。…でもまだもう少し、この人たちと一緒にいたい。

## #7 エピローグ (2)

「で、どうして突然ニューヨーク？ あんまり急だったから…スケジュールとか、大変だったんじゃない？」

逸さんがアナウンスにちよつと焦ったみたいに話を元に戻す。

確かにスケジュール調整は大変だった。けど思いのほかスルスルと事が運んで…まさか年内に決まるとは全く思ってもみなかった。…今思えば…それもこれも全部、真咲の計らいだったのかもしれない。きつと、真咲ならやる。あたしのために…それを可能とするお金を動かすことくらい、小林家なら造作ない。

「…歌うのが好き、って皆さんの前ではつきりと声にしてから…思っただんです。本格的に、歌の勉強がしたいなあ、って…。今のままじゃ、やっぱりどうしても小林家の枠の中で“歌わされている”ような気がして…。ちゃんと勉強して、一からやり直したいと思った。思い切って、清水さんに…マネージャーにそう言ってみたの。駄目モトだったんだけど…しばらくしたら、社長がオッケー出したから行ってきていいよって。留学先も決まったからって。ビックリしたけど…こんなチャンスもう二度とこないと思って、発つことにしました。」

今話していて、やっぱりこれは真咲が動いていたからこんなにスムーズだったんだと、改めて確信する。あたしの仕事の予定…一年先くらい余裕でとづくに埋まってたはずだ。

「さすが真咲…。無茶するなあ…。でも、それだけ香居ちゃんの役

に立ちたいんだな。」

「きつとね。香居ちゃんのしたいことを応援したいって、そういう気持ちからしたことだろ？ おれたちのことだって、元々は香居ちゃんの望みを叶えたいって始めたんだし。」

逸さんと大石さんが言う。二人とも、うつん四人ともあたしがすんなり留学できたこと、何も言っていないのに真咲がしたことだと確信している。まるでそれが当たり前のように。

真咲…もういいのに。あたしのためを思うなら…もう、何もしなくてもいい。

目から涙が溢れ出すのがわかる。きゅつと奥歯を噛み締めて、目を閉じる。

…そうだ。泣いてるだけじゃ駄目だ。ちゃんとその気持ちは…自分の思いは…、真咲に伝えなきゃ。真咲がわかってくれるまで、何度でも。自分で…伝えなきゃ。

再び搭乗を促すのアナウンスが流れる。タイムリミットが近付いている。

「香居ちゃん、この前渡したメアドの紙、持ってる？」

逸さんが突然あたしに問う。あたしは涙を振り切るように大急ぎで頷く。あれからあのメモは…あたしにとって、宝物だから。いつも、肌身離さず持ち歩いている。あたしはショルダーの内ポケットからちよつとボロくなった紙片を取り出す。

「あ、持っててくれたんだ。よかった。全然メールとかないから、もう捨てちゃったかと思った。」

「そんなことっ！！！」

ぶんぶんぶん、と慌てて頭を左右に振る。そんなあたしを見て逸さんは笑う。

「今度は保存版。ここにいる四人分、みんな載ってる。いつでもみんな、香居ちゃんからのメール、待ってるから。」

そう言ってまた、あたしの手の中に、前回よりも、ちょっと大きな紙片を、ぎゅっと握らせる。

「女の子同士の話はあたしが担当ね。」

につこり、栄子さんが笑う。…そういえば、あたし同世代の女友達って…いないんだ。っていうか女の子だけじゃなく、同性も異性も、友達なんて今まで一人もいなかった。

「…嬉しい。あたし…友達いなかったから…。向こうに着いたら、すぐに皆さんにメールします。」

涙を拭ってそう言っていると、皆さんも嬉しそうにうんうん、と頷いてくれた。

…またアナウンスが流れる。もうこれ以上、ここにいることはできない。あたしは思い切って笑顔を作って、別れを告げる。

「じゃ、あたし行きます。」

「うん、いつてらっしゃい！」

「絶対メールちょうだいね。」

「はなれていても、つきのかみがうつしだから！　ってーカメラのほうが早いって！」

「うわ、それはちょっとなんかクサクねえ？」

くすくす笑いながら、あたしは四人の新しい友達に、手を振ってから、背を向けて歩き出す。誰一人、さよならなんて言わない。そりゃそうよね、さよならなんかじゃないもの。

あたしの、…鞆根虹香じゃなく、小林香居の、新しい旅立ち。

それにふさわしい、青い、青い、この上なく青い、澄んだ空…。そして月は、うつすらと、少し欠けた状態で、その青空に浮かんでいる。

今日も、月はあたしを見ている。

そのことが、初めて心強く思えた。

「はああ…行っちゃったあ。」

「ってーか律、絶対香居ちゃんに男だっと思われたまんまだよね。栄子ちゃんのこと律の彼女だと思っただろうなあ…。」



「だって特に女ですって主張することもないだろ？　不自然じゃん。」

「律のこと女だってわかるほうが不自然。あ！　なんならあのワンピースで来たかった？　律の女装、逸くん気に入ってたもんねえ。」

「うんうん　あれは絶品だったなあ…。つか、女装って言うてる時点でアウトじゃね？」

「…だいたい栄子、お前なんでついて来たんだよ！　わざわざ学校サボって…!!」

「ええ？　ああっつ律！　あそこのベーグル美味しいんだよ？　食べて帰ろうよ」

「…栄子ちゃんのほんとの目的って…ベーグル…??？」

離陸した飛行機を見送った後も相変わらずな四人の頭上にも、彼女が見ている青い空は、延々と、ニューヨークまで、続いている…。

鞘根虹香帰国のニュースは、それから四年後。

まだまだ先の、ちょっと遠い未来である。

でもその時も、月は彼女を、彼女たちを、そしてすべてを、静かに、映している。

||  
完  
||

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1754f/>

---

つきのががみ

2010年10月12日16時02分発行